

2005 年度卒業論文

ヤン・マテイコー——同時代の公的な場における姿

Jan Matejko w życiu publicznym w Galicji

東京外国語大学外国語学部

ロシア・東欧課程ポーランド語専攻

小川美穂 （学籍番号 6801110）

Miho OGAWA

目次

目次	1
凡例	3
序章	4
1. 論文の目的と構成	4
2. 先行研究	4
3. 研究方法	6
4. 19 世紀ガリツィアの政治体制	7
第 1 章 画家としての略歴と作品	9
1. 生い立ちと家庭	9
2. クラクフ美術学校時代と留学	11
2. 1. マテイコの恩師	11
2. 2. 美術学校時代のマテイコ	12
2. 3. 留学	13
3. クラクフ美術学校長として	15
4. マテイコの絵画	18
4. 1. 美術史におけるマテイコ	18
4. 2. マテイコの歴史画の特徴	20
4. 3. 主要作品	21
4. 4. 展示場所・受賞歴・所属美術アカデミー	24
第 2 章 マテイコと公的機関	28
1. プラハ美術アカデミーとクラクフ美術学校	28
2. 「王笏」 ^{おうしやく} 授与式	31
3. 《プロイセンの臣従》をガリツィアに寄贈	34
4. マテイコ記念祭	36
5. ローマ教皇庁への使節団	38
6. コンスタンティンとメトディオスの記念祭	40
7. マテイコのガリツィア葬	43
第 3 章 マテイコとオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世	45
1. 《レイタン》の買い上げ	45
2. マテイコ宅来訪	47
3. 《プロイセンの臣従》観覧	49
4. 《ウィーンのソビエスキ》観覧	51

第4章 マテイコと文化財保護・修復	54
1. ヴァヴェル大聖堂	54
2. 聖マリア教会	57
3. 聖霊病院	58
結び	61
参考図版	63
引用原文の抜粋	71
参考文献一覧	74
Streszczenie（ポーランド語要旨）	77
あとがき	79

凡例

1. 絵画作品の題名の日本語訳は《 》の中に記す。また、マテイコ作品については、次の3点について略称を用いる場合がある。
 - ・《スモレンスク喪失の一報が入った時の、王妃ボナの宮廷舞踏会におけるスタンチク》
⇒《スタンチク》と略。
 - ・《レイタン——ポーランドの没落》、《1773年ワルシャワ国会議場のレイタン》、《1773年ワルシャワ国会》（すべて同一作品）
⇒《レイタン》もしくは《ワルシャワ国会》と略。
 - ・《ウィーンのソビエスキ》
⇒《ソビエスキ》と略。
2. 文学作品の題名の日本語訳、及び新聞・雑誌名の日本語表記は『 』の中に記す。
3. () 中の単位がない数字は年号を表す。主に、人名の後には生没年、作品名の後には完成年・出版年を入れた。
4. 引用及び参照箇所の出典を脚注で明示する際、頻出する以下の4文献については、著者の姓と頁数のみを記す。
 - ・Marian Gorzkowski, *Jan Matejko – Epoka od r. 1861 do końca życia artysty z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu*, Oprac. Kazimierz Nowacki, Ignacy Trybowski, „UNIVERSITAS”, Kraków 1993.
(脚注での表記例 Gorzkowski, s. 3.)
 - ・Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w holdzie... W stulecie śmierci artysty. Katalog wystawy*, Muzeum Narodowe w Warszawie, Warszawa 1993.
(脚注での表記例 Micke-Broniarek, s. 3.)
 - ・Maria Przemecka-Zielińska, *Krakowskim szlakiem Jana Matejki*, Wydawnictwo Pijarów, Kraków 2003.
(脚注での表記例 Przemecka-Zielińska, s. 3.)
 - ・Henryk Marek Słoczyński, *Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2000.
(脚注での表記例 Słoczyński, s. 3.)
5. 地名・人名の日本語表記について
 - ・現在ポーランド国内にある地名（ワルシャワを除く）の日本語表記は、ポーランド語に拠る。
 - ・現在ポーランド国外にあるが、ポーランド語による名称を採用した地名は、現在の現地語に基づく日本語表記、あるいは慣用化した名称を、初出の語に併記する。
 - ・人名の日本語表記は、原則として各々の言語に拠る。例外的な場合はその旨を記す。

序章

1. 論文の目的と構成

本論文の大きな目標は、19 世紀に活動したポーランドの画家ヤン・マテイコ Jan Matejko (1838-1893) を紹介的に論ずることである。現在のポーランド人が、歴代のポーランド王やポーランド史に名を残した人物の顔立ち、そしてポーランド史を動かした重要な出来事の 1 場面を想像するとき、マテイコの歴史画が心に浮かぶという場合がある。ポーランドではそれくらいよく知られた画家だといえるが、日本では彼に関しての本格的な研究がなされていない。そこで、まずはマテイコの画家としての経歴と、彼の作品に関する基本的な情報をまとめる必要があると考えた。本論文の第 1 章はこの目的のために設けた。

第 2 章から第 4 章では、同時代の公的な場におけるマテイコの姿がいかなるものであったかという問題を扱っており、本論文の重点はこの部分に置かれている。生前のマテイコは、ガリツィア Galicja やクラクフ Kraków の公的機関と関わり、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世 Franz Joseph I (1830-1916 / 在位 1848-1916) とも接触があった¹。この点についての詳細を知ること、マテイコという人物をより立体的に紹介できるのではないかと考えた。したがって、マテイコが公的機関や皇帝と、どのような形で関わっていたのかを明らかにすることが、本論文のもう 1 つの目的である。具体的には、ガリツィア及びクラクフにおいて行われた、マテイコに関連する公的な行事や出来事を第 2 章で取り上げる。第 3 章では、マテイコとオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世との接触について扱う。第 4 章では、クラクフにおける文化財保護・修復事業のうち、マテイコが携わったものを一部紹介する。

2. 先行研究

前述したように、日本ではマテイコに関する本格的な研究がまだ行われていない。ただし、『世界大百科事典』（平凡社）や『東欧を知る事典』（平凡社、1993 年）、渡辺克義編著『ポーランドを知るための 60 章』（明石書店、2001 年）の「第 55 章 ヤン・マテイコーポーランドの国民画家」では、マテイコについての簡単な説明がなされている。また、関口時正教授の論文「世紀末ポーランドで日本美術を見る困難について」（『比較文学研究 61』 東大比較文学會、1993 年）は、19 世紀末期のポーランドにおける日本美術の受容を通してポーランド文化の特徴を浮き彫りにしながら、ポーランドの絵画が政治性あるいは社会性を持っているという文脈の中にマテイコを位置づけている。ここではマテイコがいかに愛国心を持った人物であったか、彼がポーランド人にとっていかに影響力のある人

¹ 当時の政治的な背景については、本章 4. で簡単に説明する。

物なのかということが簡潔に述べられている。

マテイコに関するポーランド語文献は極めて多く、どのような先行研究がなされてきたのかについて筆者は明確に把握することができていない。しかし、本論文のテーマに関係する伝記的な文献に関しては、多少説明することができる。最も古い文献は、マテイコの同時代人の手による伝記に遡る。マテイコの秘書であったマリアン・ゴシュコフスキ²、マテイコの学校時代からの友人イズイドル・ヤブウォンスキ³、マテイコと親しかった政治家スタニスワフ・タルノフスキ⁴、同時代の画家であり芸術評論家のスタニスワフ・ヴィトキエヴィチ⁵、マテイコの姪スタニスワヴァ・セラフィンスカ⁶らが残したマテイコの伝記は、現在に至るまでマテイコ研究の土台となる基本的な情報の源となっている。その後の伝記的研究は戦間期のミェチスワフ・トレテルMieczysław Treterらに受け継がれ、戦後の社会主義時代にはカジミェシュ・ヴィカKazimierz Wyka、ヤヌシュ・ボグツキJanusz Bogucki、ミェチスワフ・ポレンプスキMieczysław Porębski、ユリウシュ・スタジンスキJuliusz Starzyński、ヤン・ギンテルJan Gintelら数多くの研究者が携わった。民主化後の代表的研究者としてはヤロスワフ・クラフチクJarosław Krawczyk、ヘンリク・マレク・スウォチンスキ⁷、ヴァルデマル・オコンWaldemar Okońなどを挙げるができる。

² Marian Gorzkowski (1830-1911)：ウクライナのビャワ・ツェルキェフBiała Cerkiew（ウクライナ語名ビワ・ツェルクヴァ）でシュラフタの家庭に生まれる。キエフ、ギリシャ、イタリアで美術史及び文学史、神学を学んだ。1870年以降クラクフに定住。『チャス』紙Czasの新聞記者や、チャルトリスキ博物館Muzeum Książąt Czartoryskich学芸員として働いた。専門分野の論文や文学作品を残している。1876年、クラクフで行われたショパンに関する講演会の席でマテイコと知り合う。以後、マテイコ一家の使用人、そしてクラクフ美術学校長であるマテイコの秘書となった。ゴシュコフスキはマテイコの日常生活を詳細に書きとめ、合計3種類の伝記を出版した。*O artystycznych czynnościach Jana Matejki począwszy od lat jego najmłodszych, to jest od roku 1850 do końca roku 1881 z dodatkiem niektórych szczegółów do tegoż okresu tyjących się*, Kraków 1882.はマテイコの生前に出され、*Jan Matejko, Epoka lat jego najmłodszych, wyjątki z dziennika prowadzonego w ciągu lat 17 przez Mariana Gorzkowskiego*, Kraków 1895.及び*Jan Matejko, epoka lat dalszych do końca życia artysty, z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu przez Mariana Gorzkowskiego*, Kraków 1898.はマテイコの死後出版された。この最後の著作は、後出のスタニスワフ・タルノフスキによってほぼ全本が買い占められ焼却されるという、数奇な運命をたどった。ゴシュコフスキの記録はあまりに日常的であり、マテイコの名誉や、未だ生存しているマテイコの家族を侮辱することになる、とタルノフスキは考えた。1993年、マテイコの100回忌に合わせてクラクフ美術愛好家協会が編纂し出版した『ヤン・マテイコ——1861年から没年まで——17年間の日記より』（Marian Gorzkowski, *Jan Matejko – Epoka od r. 1861 do końca życia artysty z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu*, Oprac. Kazimierz Nowacki, Ignacy Trybowski, „UNIVERSITAS”, Kraków 1993.）は、ゴシュコフスキの親類によって保存され、手直しされたものに基づいている。ゴシュコフスキはまた、《グルンヴァルトの合戦》以降のマテイコの作品数点について解説を書き、随時出版した。マテイコはゴシュコフスキを《プロイセンの臣従》や《ヴェルニホラ》に描いている。

³ ヤブウォンスキについては注釈26を参照。*Wspomnienia o Janie Matejce*, Lwów 1912.を残した。

⁴ タルノフスキについては注釈119を参照。*Matejko*, Kraków 1897.を残した。

⁵ ヴィトキエヴィチについては注釈47を参照。*Jan Matejko*, Kraków 1903.及び*Matejko*, Lwów 1908/1912/1950.を残した。

⁶ Stanisława Serafińska (1856-1924)：*Jan Matejko – Wspomnienia Rodzinne*, Kraków 1955.を残した。マテイコは彼女の肖像画を描いたが現存せず。

⁷ Henryk Marek Słoczyński (1953-)：修史学者。ヤギェロン大学出身。長年クラクフ国立美術館員として働き、現在は母校の歴史研究所博士。歴史思想史や歴史画に関する論文を手掛け

マテイコの伝記的研究の論調は、大体次のように変遷してきた⁸。マテイコの同時代人、あるいは戦間期の研究者によるマテイコ研究は、マテイコを愛国者として称賛すべきか、芸術的観点からマテイコの作品を非難すべきか、という同時代の論争から距離を置くことができなかった。また、マテイコを特定の政治派閥と関連付けて論じようとする傾向も見られた。社会主義リアリズムの時代には、マテイコは「偉大なリアリスト」として体制の正当化に利用された。19世紀のポーランドに生きた1人の人間としてマテイコを捉え、マテイコの意図したことを歪曲せずにそのまま分析しようという客観的な研究が行われるようになったのは民主化後のことである。例えば、スウォチンスキは当時の政治的社会的状況を考慮しながらマテイコの生涯を論じ、マテイコ作品の詳細な分析により彼独特の宗教的歴史哲学的思想を読み取ろうとしている。

ポーランド以外の国でマテイコがどのように研究されているのかは把握していないが、今まで目を通したポーランド語文献には外国人の研究成果を取り上げている記述は確認できなかった。

3. 研究方法

本論文はマテイコの伝記としての性格を持つてはいるが、マテイコの画家としての生涯と彼の作品については簡潔にまとめ、公的な場でのマテイコの姿についてより詳しく述べた。研究の方法としてはまず、次に挙げる伝記的な2つの文献を精読してマテイコの生涯に関する基本的な情報を集め、事実関係を整理した。1つは、マテイコの秘書マリアン・ゴシュコフスキが残したマテイコの伝記 (*Marian Gorzkowski, Jan Matejko, epoka lat dalszych do końca życia artysty, z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu przez Mariana Gorzkowskiego*, Kraków 1898.) を、1993年にカジミェシュ・ノヴァツキらが編集した『ヤン・マテイコ——1861年から没年まで——17年間の日記より』 (*Marian Gorzkowski, Jan Matejko – Epoka od r. 1861 do końca życia artysty z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu*, Oprac. Kazimierz Nowacki, Ignacy Trybowski, „UNIVERSITAS”, Kraków 1993.) である。ここにはマテイコの日々の動静や彼が述べた言葉、新聞などに掲載された彼の公式発言、行政機関の決議など、当時のマテイコと彼の生きた時代を生々しく伝える貴重な資料が掲載されている。ただし、年号と出来事が一致しない場合もあり、事実関係の整理にはやや正確さを欠く。また、ゴシュコフスキの個人的な感想を含むかなり主観的な記述となっているという難点もある。もう1冊は、ヘンリク・マレク・スウォチンスキ著『マテイコ』 (*Henryk Marek Słoczyński, Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2000.) である。これは修史学者である著者がポーランドにおける今までのマテイコ研究を踏まえた上で、マテイコの生涯と作品について客観的、分析的に論じたものである。したがって本論文では、事実関係の説明に際してはスウォチンスキの著書を参考にし、これらの事実をより具体的に論じる際には、ゴシュコフ

てきた。

⁸ Waldemar Okoń, *Jan Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2001, s. 75-76 参照。

スキの伝記における当時を伝える資料を参照・引用することにした。

この2冊のほか、主に次の文献を必要に応じて部分的に参照した。個々のマテイコ作品の簡単な内容、作品の大きさや展示場所などの情報については、エヴァ・ミツケ＝ブロニャレク著『マテイコに捧ぐ... 同氏没後 100 周年記念——展覧会カタログ』（Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w hołdzie... W stulecie śmierci artysty. Katalog wystawy*, Muzeum Narodowe w Warszawie, Warszawa 1993.）を参照した。また、マテイコ作品の同時代の展示場所に関しては、『ヤン・マテイコ——その創作活動に関する学術会議（1953 年 11 月 23-27 日）資料』（*Jan Matejko. Materiały z sesji naukowej poświęconej twórczości artysty 23-27 XI 1953*, Arkady, Warszawa 1957.）の末尾に付けられた資料に依拠させた。ガリツィア及びクラクフの公的機関がマテイコのために行った式典や行事、またはマテイコが公的機関に提案した企画、マテイコと皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世との接触に関してより詳細な事実確認が必要となる際は、ヤヌシュ・ボグツキ著『マテイコ』（Janusz Bogucki, *Matejko*, Państwowe Wydawnictwo „Wiedza Powszechna”, Warszawa 1955.）、ヤン・ギンテル編著『ヤン・マテイコ——伝記的資料の抜粋』（*Jan Matejko. Wypisy biograficzne.*, Oprac. Jan Gintel, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955.）、スタニスワヴァ・セラフィンスカ著『ヤン・マテイコ——家族の思い出』（Stanisława Serafińska, *Jan Matejko – Wspomnienia Rodzinne*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955.）において必要箇所を適宜参照した。マテイコが携わった文化財保護・修復のための活動に関しては、マリア・プシエメツカ＝ジェリンスカ著『ヤン・マテイコのクラクフにおける足跡』（Maria Przemecka-Zielińska, *Krakowskim szlakiem Jana Matejki*, Wydawnictwo Pijarów, Kraków 2003.）の記述を参考にした。以上の文献に当たる過程で、ある出来事が起こった年月日や場所に複数の可能性があることが分かった場合は、その旨を明記するようにした。

4. 19 世紀ガリツィアの政治体制

本論文で取り上げる事柄の主要な舞台となるのは、19 世紀ガリツィア及びクラクフである。特に、マテイコの公的な場における姿に焦点を当てているため、当時のガリツィアにおける政治体制について、若干の説明が必要となるだろう。

ガリツィアとは、18 世紀後半のポーランド分割後にオーストリア領となったポーランド南部地域のことである。現在の地図で考えると、ポーランド南東部及び東部とウクライナ西部にかけての範囲となる。当時ハプスブルク帝国の一部であり、1846 年以降のポーランド語による正式名称は *Królestwo Galicji i Lodomerii wraz z Księstwem Oświęcimskim i Zatorskim, tudzież Wielkim Księstwem Krakowskim*（直訳すると、ガリツィア・ロドメリア王国とオシフェンチム公国、ザトル公国、クラクフ大公国⁹）であった。ガリツィア西部にはポーランド人、東部にはウクライナ人（ルーシ人、ルテニア人）が多く居住して

⁹ 以下同様に、日本語訳が定まっておらず、筆者が自信を持って翻訳案を提示できない用語については、ポーランド語の原語を挙げ、括弧内に便宜的な日本語訳を記した。

いた。

ハプスブルク帝国は当初、絶対主義を掲げて諸民族を抑圧していたが、1859年の第2次イタリア統一戦争での敗北後、国政改革を余儀なくされ、諸民族に自治を認めていく方向に政策を転換した。1861年に2月勅令を發布して地方自治を制限付きで認めると、ガリツィアはこれを受けて *Statut Krajowy*（憲法）を制定し、国会（議会）*Sejm Krajowy* と *Wydział Krajowy*（政庁）を持つことを法的に規定した。1866年の普墺戦争に敗北し、統一ドイツから排除されたハプスブルク帝国は、1867年に帝国の存続を賭けてハンガリー王国に大幅な自治を認め、国政を二重制に改めた（オーストリア＝ハンガリー帝国）。同年12月に制定した憲法では、民族の平等を保障するなど、自由主義的政策を打ち出した。ガリツィアはこれ以降1873年までの間、より広範な自治権を要求していき、オーストリア帝国内（ライタ以西）で唯一、不完全ながらも自治が認められた地域となった。公的な場におけるポーランド語とウクライナ語の使用も徐々に許可されていった。

ガリツィアの政治の中心地はルヴフ *Lwów*（現ウクライナのリヴィウ）であった。ルヴフには自治機関である国会と政庁に加え、これらを監督する総督府 *Namiesnictwo*（*Rząd Krajowy*）が置かれた。総督府を指揮したのは、オーストリア帝国から派遣されたガリツィア総督 *namiestnik* であり、皇帝によって任免された。ただし、通例は国会を代表する人物が総督に選ばれていた。国会と政庁の頂点に立ったのは *marszałek krajowy*（ガリツィア国会議長）であり、オーストリア皇帝によって任免された。国会で作成されたすべての法案には皇帝の承認が必要であった。オーストリア帝国の帝国議会 *Rada Państwa* ではポーランド人議員クラブ *Koło Polskie* がポーランド人の利益を代表していた。1871年にはオーストリア政府内にガリツィア担当省が設置され、少なくとも1人のシュラフタが入閣した。

ガリツィアの自由化は、1848年の革命直後にオーストリア皇帝に即位したフランツ・ヨーゼフ1世の治世に実現した。皇帝はガリツィアの自治を後退させることはせず、ガリツィアと友好的な関係を続けた。この点は本論文の第3章に関係してくる。

マテイコが生まれ、生涯にわたって活動拠点としたクラクフも、1846年以降は常にこのガリツィアの一部であった。1795年のポーランド第3次分割の結果、クラクフはオーストリア領となったが、1809年にはナポレオン体制下で新たに誕生したワルシャワ公国の一部となった。1815年、ウィーン会議での決定に基づき、クラクフは自治共和国となった（クラクフ共和国 *Rzeczpospolita Krakowska*）が、1846年のクラクフ蜂起が失敗に終わると、再びオーストリア領に組み込まれてガリツィアの一部となったのである。クラクフには市長 *prezydent miasta* や市議会 *rada miasta* が存在していた。クラクフを含むガリツィア内の都市にも、ガリツィア国会によって法的に規定された地方自治が認められていた。

本論文の内容を考える時、特に重要となるのが、ガリツィア及びクラクフに自治があったという点である。第2章以降で、公的機関やマテイコが、ポーランドに対する愛国心を表すような行動を取ることができたのは、まさにこのためだと考えられる。これは、ポーランド分割の結果ロシア領やプロイセン領となり、支配国による迫害が厳しかった地域とは全く異なる、恵まれた状況であった。特に、古都クラクフに比較的自由な文化活動が許されていたことは、ポーランド人の精神的一体性の維持に少なからず貢献したと考えられる。

第1章 画家としての略歴と作品

本章ではまず、マテイコの画家としての略歴について簡単に説明する。マテイコの生い立ちと家庭、彼のクラクフ美術学校時代と留学、そしてクラクフ美術学校長時代を扱う。次に、マテイコの絵画に関連する諸点——美術史におけるマテイコの位置、彼の歴史画の特徴、主要作品や展示場所・受賞歴・所属美術アカデミー——に言及する。

1. 生い立ちと家庭

ヤン・マテイコ¹⁰は1838年6月、クラクフのフロリアンスカ通り41番地(ul. Floriańska 41)で誕生した。誕生日をめぐっては3通りの説がある。6月24日とする説は洗礼簿に基づいており、現在のマテイコ記念館¹¹の看板にもこの日付が刻まれているという。また、6月28日とする説は戸籍簿に基づいたものである。しかし、生前のマテイコが自らの誕生日として認識していたのは6月30日であり、誕生会もその日に開かれていた。スウォチンスキによると、この3つのうち最も信憑性が高いのは6月28日であり、その理由として戸籍簿が洗礼簿よりも新しく信頼できる点を指摘している。また6月30日については戸籍簿の日付を誤って読み取ったものだと推測している¹²。

マテイコはフランチシェク・クサヴェリ・マテイコFranciszek Ksawery Matejko (1793-1860)とその妻ヨアンナ・カロリナ・ロッスベルクJoanna Karolina Rossberg (1802-1845)の9番目の子どもとして誕生した。後にポーランドの歴史画家として広く知られることになる人物の両親が外国系であると知ったら、驚く人も多いかもしれない。マテイコの父フランチシェクはチェコ出身である。彼は1793年、フラデツ・クラーロヴェー¹³近郊の村でフランチシェク・ユゼフ・マチェイカFranciszek Józef Matieykaの息子として生まれ、カトリックを信奉した。なぜチェコを去りガリツィアにやって来たのかは定かではないが、1820年ごろには、すでにクラクフのフロリアンスカ通りに住まいを借り、音楽教師として生計を立てていた。プロテスタントであったマテイコの母ヨアンナは、1802年にクラクフで誕生した。ただし、彼女の父ヤン・ピョトル・ロッスベルクJan Piotr Rossbergはザクセンの出身でプロテスタント、彼女の母アンナ・マリア・ドゥスAnna Maria Duss (TussまたはTusz)もまたドイツ系で、こちらはカトリックであった。フロリアンスカ通りのアパートの大家であったヤン・ピョトル・ロッスベルクは、1785年にクラクフに移住し、馬具職人として働いていた。マテイコの両親が結婚したのは1826年で

¹⁰ 完全な姓名は、ヤン・アロイヅィ・マテイコJan Alojzy Matejko。

¹¹ マテイコの生家はマテイコ記念館Dom Jana Matejkiとして、1898年から正式に一般公開されている。

¹² Słoczyński, s. 5 参照。

¹³ Hradec Králové: チェコ中部に位置し、東ボヘミア地方の中心都市。

ある。両者の信仰の違いから、プロテスタントとカトリックの両教会で挙式した¹⁴。ちなみにヤン・マテイコは3歳の時、カトリックの洗礼を受けている。

マテイコの両親は計11人の子どもをもうけた。そのうち9人は男子、2人は女子である。歴史学を学ぶ長男のフランチシェク **Franciszek** はマテイコの良き理解者であった。マテイコの家庭には愛国的な雰囲気があったとされ、その証拠に次男のエドムント **Edmund** と三男のズィグムント **Zygmunt** は、共にポーランド解放運動に参加した。エドムントはトランシルヴァニアで将軍ユゼフ・ベム¹⁵の指揮下で戦い、無事帰宅することができたが、ズィグムントは1848年、ロシア軍の兵士に刺殺され帰らぬ人となった。ヤンと最も親しかったのは1歳年上の次女マリアンナ **Marianna** であり、マテイコは彼女の肖像画も残している。

マテイコの少年時代は、後の名声からは想像できないほど暗いものだった。彼はまず、カトリックの父とプロテスタントの母との狭間で気苦労が多かったとされている。そしてわずか7歳で母親の死を経験した。その後、母代わりの叔母に愛されていたものの、父親には相変わらず厳しく専制的な雰囲気があったため、マテイコは家庭的な温かさを充分に感じる事がなかったという。マテイコの鼻が何かの遊び中に折れてしまっていたことも、父親は気付かなかった。さらに、彼は多くのコンプレックスを抱えていた。1847年から通学していた聖バルバラ学校 **szkoła św. Barbary** では、成績不振、背が低くひ弱な体つき、近眼、地味な身なりなどの理由からいじめを受け、翌年、これを見かねた兄らが彼を聖アンナ中学校 **Gimnazjum św. Anny** に移らせている。また、マテイコのチェコ語なまりのポーランド語も、いじめられる原因となっていた。

哀れなマテイコにとって、家庭的な温かさで自分を包んでくれるギェブトフスキ家 **Giebułtowski** との親交はかけがえのないものだった。当時クラクフに居を構えていたギェブトフスキ家は、マテイコの父親を音楽教師として雇っていた。アントニ **Antoni** とパウリナ **Paulina** 夫妻には4人の子ども（長女ヨアンナ **Joanna**、長男スタニスワフ **Stanisław**、次男ステファン **Stefan**、次女テオドラ **Teodora**）がおり、マテイコとステファンは中学校の同級生であった。後に神父となるスタニスワフはマテイコの無二の親友であり、両者の間で交わされた手紙は、2人の友情の固さを証明している。ヨアンナはレオナルト・セラフィンスキ **Leonard Serafiński** と結婚し、ノヴィ・ヴィシニチュ¹⁶に住んでいた。このセラフィンスキ家もまた、マテイコに対して家族のように接している。序章で述べたとおり、ヨアンナとレオナルトの長女スタニスワヴァ（後のマテイコの姪）は、マテイコの伝記を残した。アントニの死後、セラフィンスキ家がボフニャ **Bochnia** に転居し、代わってギェブトフスキ家がノヴィ・ヴィシニチュに住むことになった。マテイコは青年時代しばしばヴィシニチュを訪れ、大親友スタニスワフや、後にマテイコの妻となるテオドラ・ギ

¹⁴ マテイコの両親が挙式したカトリック教会は聖十字架教会 **Kościół św. Krzyża** (ul. św. Krzyża 23) である。マテイコはここでカトリックの洗礼を受けた。

¹⁵ **Józef Bem** (1794-1850)：ポーランドの士族。11月蜂起で活躍した後フランスに亡命し、チャルトリス派との関わりを持った。1848年革命ではトランシルヴァニアなどでハンガリー軍を指揮し、またポーランド軍団を組織した。ハンガリー軍がオーストリア軍に敗れた後は、トルコ軍の一員となった。

¹⁶ **Nowy Wiśnicz**：クラクフの東約40キロメートル、ボフニャ **Bochnia** の南約7キロメートルの所に位置する。

ェブトフスカと面会していた。

テオドラとの結婚は、マテイコが《スカルガの説教》¹⁷の売却で経済的基盤を確保できた時に実現した。両者は 1864 年 11 月 21 日に、クラクフのピャセク地区Piasekにあるカルメル教会Kościół OO Karmelitów na Piaskuで挙式している。彼らの子どもたちは、長男タデウシュTadeusz、長女ヘレナHelena、次女ベアタBeata、次男イエジーJerzy、三女レギナReginaである。マテイコは生涯にわたって、後に精神病と診断される妻テオドラとの関係に非常に苦しんだ。また、休むことなく絵画制作に打ち込んでいたため、十分に子どもたちの面倒を見ることができなかったようである。

2. クラクフ美術学校時代と留学

2. 1. マテイコの恩師

マテイコがクラクフ美術学校¹⁸に入学したのは、1852 年、14 歳の時だった。当時の美術学校を主導していたのはヴォイチェフ・コルネリ・スタットレル¹⁹である。国民的絵画の創造を目指していた彼は、生徒の指導の際に、ロマン主義的な詩作品の紹介を欠かさなかったという。また同時に静物画教育の改革にも取り組み、1830 年代には裸体の男性モデルを導入することに尽力した。しかし、基礎技術の習得に重点を置いたスタットレルの厳密な指導方針はマテイコの肌にならなかったようである。マテイコは早々に独学で絵を描き始め、学校ではなく自宅で描くことが多かったため、スタットレルとの関係は良好とはいえなかった。

マテイコが良い意味で影響を受けたのは、スタットレルの後任ヴワディスワフ・ウシュチュキェヴィチ²⁰と、美学と美術史の優れた教師であったユゼフ・クレメル²¹である。ウ

¹⁷ 主要作品については、本章 4. 3. を参照。

¹⁸ krakowska Szkoła Sztuk Pięknych (SSP): 1818 年にヤギェロン大学に属する美術学校 Regularna Szkoła Sztuk Pięknychとして創立されるが、1833 年に技術学校Instytut Technicznyと合併。1873 年、独立した美術学校として改組される。この時の初代学校長はヤン・マテイコ(在任 1873-1893)。以後、ヴワディスワフ・ウシュチュキェヴィチ(在任 1893-1895)、ユリアン・ファワトJulian Fałat(在任 1895-1910)と続く。1900 年以降はクラクフ美術アカデミーAkademia Sztuk Pięknych w Krakowie (ASP) に改組される。

¹⁹ Wojciech Korneli Stattler (1800-1875)：ロマン主義絵画を代表する画家。クラクフで絵画を学び、その後ローマ、ヴェネツィアに留学。ナザレ派の影響を強く受ける。1831 年から 1857 年までクラクフ美術学校で教鞭をとる。晩年 1870 年にワルシャワに転居。聖書を題材にした代表作《マカバイ家》*Machabeusze* (1830-1842) はパリ・サロンに展示され、ポーランド人として初めて金賞を受賞。他に歴史画や肖像画を制作。芸術や芸術家養成についての論文も残した。博学であった彼は、ミツキェヴィチやスウォヴァツキら大詩人とも交友し、彼らから国民絵画の創造者となることを期待されていた。

²⁰ Władysław Łuszczkiewicz (1828-1900)：画家、美術史家。ヤギェロン大学で歴史と哲学を学び、1839 年から 1848 年までクラクフ美術学校でスタットレルに師事した。パリとアントワープに留学した後、1850 年にクラクフに戻り、以後クラクフ美術学校で教育に携わる (1893-1895 同学校長)。初代クラクフ国立美術館長でもあった (在任 1884-1900)。中世建築の研究家で、14 世紀クラクフにおけるゴシック建築の固有の特徴を初めて定義した。また、ポーランドにおける美術史研究を 1 つの独立した学問として確立することを推進した。

²¹ Józef Kremer (1806-1875)：哲学者。ヘーゲルに学んだ。1850 年から、ヤギェロン大学教授としてクラクフ美術学校でも教鞭をとる。文化財の保護を訴え、1840 年代にはクラクフ

シュチュキェヴィチは、実直さと人の良さで生徒たちから愛された。画家としての才能には乏しかったとされるが、美術学校の主導者として教育課程の充実に尽力し、スタットレル時代よりも自由な校風を作った。また、文化財に関する知識と文化財を愛する姿勢を生徒たちに伝えた。マテイコの才能にいち早く目を止め、彼に対しとても好意的に接したのもウシュチュキェヴィチである。マテイコは彼の下で次第に自信を付けていくことができた。一方、クレメルは文化財の保存に尽力した人物であり、クラクフの聖マリア教会における祭壇の技術的卓越性を正当に評価した第一人者である。マテイコがヴィト・ストッフ・オシュ²²の作であるこの荘厳な祭壇に興味を持ったのも彼の影響ではないかと、スウォチンスキは指摘している²³。

2. 2. 美術学校時代のマテイコ

マテイコの父親は、身を立てるのが難しい画家という職業を志す息子のことを憂慮していたようだが、マテイコは父親の心配をよそに、大変熱心に絵画の勉強に打ち込んだ。1853年、マテイコは最初の歴史画《1611年ズィグムント3世が取り仕切るワルシャワ国会に、ジュウキェフスキによって連行されたシュイスキー皇帝家》*Carowie Szujscy wprowadzeni przez Żółkiewskiego na sejm warszawski przed Zygmuntem III w roku 1611*を描いた。《歯痛のふりをするスタンチク》*Stańczyk udający ból zębów* (1856) も美術学校在籍中に描かれた作品である。マテイコはこの絵をヤギェロン大学図書館長ユゼフ・ムチュコフスキ²⁴に贈呈し、図書館の蔵書を閲覧する権利を得たという。また、後にマテイコの初期作品に影響を与えることになるユゼフ・シュイスキ²⁵と出会ったのもこの時期である。

前述したように、スタットレルの厳密な指導に賛同できなかったマテイコは、学校外で絵を描くことも多かった。自宅で描いたばかりではない。クラクフの歴史的建造物を頻繁に訪れては、その建物の装飾物などをスケッチした。マテイコは、このようにして集めた大量の資料を「宝物」*skarbczyk* と名付け、生涯にわたって絵画制作に利用した。今日に至っても歴史の薫りを失わないクラクフの雰囲気は、19世紀を生きたマテイコにもやはり

市の文化財破壊の流れを食い止めた。ちなみに彼の弟カロルKarolは、クラクフ市における文化財改修事業の先駆けとなったコレギウム・マイウスの改修作業(1839-1858)を初め、多くの重要な文化財の修復・改修作業を主導している。

²² Wit Stwosz (1447 または 1448-1533)：中世の彫刻家。ドイツのシュヴァーベン出身で、本名はVeit Stoss。聖マリア教会の主祭壇を作るためにクラクフに移り、1477年から1496年まで同地で活動した。その後はニュルンベルクに拠点を移す。表情豊かな人物描写が特徴。

²³ Słoczyński, s. 25.

²⁴ Józef Muczkowski (1795-1858)：文献学者、歴史学者、書誌学者、司書。1836年からヤギェロン大学図書館長を務めていた。

²⁵ Józef Szujski (1835-1883)：クラクフ歴史学派の歴史家、スタンチク派の政治家。作家、時事評論家。ヤギェロン大学教授。クラクフ学術アカデミーAkademia Umiejętnościの創設に携わる。同アカデミーの会員であり、秘書長官sekretnarz generalny (在任 1872-1883)。1866年からガリツィア国会議員、1867年からオーストリアの帝国議会議員。16世紀から18世紀のポーランド政治史が専門。歴史戯曲も手掛けた。マテイコは青年時代にシュイスキと親交があり、1月蜂起の際に2人で武器を搬送したというエピソードもある。スウォチンスキは、マテイコ作品にシュイスキの思想からの影響を認めている。

非常に多くの靈感を与えた。

美術学校時代にマテイコの勉学を妨げる要素もあった。その1つは、マテイコの近眼である。マテイコは授業中モデルがよく見えず、自分の隣にいた親友イズィドル・ヤブウォンスキ²⁶のスケッチを参考にしていたほどであった。マテイコが眼鏡を購入したのは美術学校での学業を修了する頃であり、その頃からようやく風景を描けるようになった。マテイコは常に経済的に困難な状況にあったため、すべての画材をできるだけ節約して使っていた。さらに、マテイコに限ったことではないが、当時のクラクフでは、過去の巨匠たちの名画に接する機会がほとんど得られなかった。版画による複製品は販売されていたが、クラクフには19世紀半ばまで公的な画廊が1件もなく²⁷、初めての公式な展覧会はようやく1853年に開催された²⁸。これは、貴族階級の者たちのコレクションからポーランドを含むヨーロッパ絵画を集め、コレギウム・ミヌス²⁹で一般公開したものである。美術学校の学生らは展示作品に大いに感動し、マテイコは特にヘンリク・ロダコフスキ³⁰の作品に強く惹かれたという。

1858年、マテイコは6年間在籍した美術学校を修了した。在学中に親しくしていた画家には、前出のヤブウォンスキの他に、アレクサンデル・コツシス³¹、フロリアン・ツィンク³²、アレクサンデル・グリグレフスキ³³、アンジェイ・グラボフスキ³⁴らがいる。

2. 3. 留学

クラクフ美術学校を卒業したマテイコが留学したのは、ミュンヘン美術アカデミーとウィーン美術アカデミーであった。いずれも奨学金による留学であり、「国民絵画」の創造が

²⁶ Izydor Jabłoński (1835-1905) : 1848年から1858年、クラクフ美術学校で学ぶ。ミュンヘン、ローマに留学。1877年、クラクフ美術学校教授となった。歴史画や宗教画を多く残している。マテイコの伝記の著者。

²⁷ 貴族階級の者が個人的に所蔵している絵画のコレクションは存在した。

²⁸ Słoczyński, s. 26によると、この展覧会を主催したのは美術愛好家協会であるが、同協会が創設されたのは1854年である。

²⁹ Collegium Minus: ヤギェロン大学の一部で、ゴウエンビヤ通11番地にある (ul. Gołębia 11)。コレギウム・マイウス Collegium Maius と並び、同大学の最も古い建物の1つ。

³⁰ Henryk Rodakowski (1823-1894) : 肖像画家として有名な19世紀ポーランドの画家。ウィーン、パリで絵画を学んだ。心理的側面をも映し出すロマン主義的な肖像画を描き、作品はパリのサロンでも展示された。マテイコは彼の代表作の1つ《母の肖像》*Portret matki* (1853)を見たという。

³¹ Aleksander Kotsis (1836-1877) : 1850年から1860年にかけてクラクフ美術学校で学んだ。主にクラクフやポトハレにおける民衆の生活を描き、風景画や肖像画も残している。

³² Florian Cynk (1838-1912) : 1848年から1849年、及び1852年から1862年にかけてクラクフ美術学校で学んだ。ミュンヘンではアンシュツに師事。クラクフ美術学校教授。歴史風俗画や宗教画を描いた。

³³ Aleksander Gryglewski (1833-1879) : 1852年から1859年にかけてクラクフ美術学校で学んだ。1858年に奨学生としてミュンヘンに留学。1877年以降、クラクフ美術学校の講師。クラクフ、トルン、グダンスクなどにある歴史的建造物の外観や内部を多く描いた。また、雑誌『クウォスィ』*Kłosy*及び『ティゴドニク・イルストロヴァニ』*Tygodnik Ilustrowany*の挿絵も担当した。

³⁴ Andrzej Grabowski (1833-1886) : 1849年から1855年にかけてクラクフ美術学校で学んだ。1860年から1863年の間、ウィーンに留学している。1866年からルヴフに住み、肖像画家として働いた。風景画や風俗画も残している。

叫ばれ始めていた当時のポーランド社会³⁵から経済的な後押しを受けた形となった。

マテイコがミュンヘンに旅立ったのは1858年12月である。当時のミュンヘンはヨーロッパ芸術の最重要拠点であり、ヨーロッパ各地から芸術家が集まっていた。マテイコは同じくミュンヘンに留学していたクラクフ美術学校時代の友人らに支えられながら、翌1859年11月の初めまで現地に滞在した。マテイコが師事したのはアンシュツ³⁶であったが、スウォチンスキはマテイコがなぜピロティ³⁷を選ばなかったのか疑問だとしている。というのは、マテイコは留学以前からフランス人画家ドラローシュ³⁸の歴史画に興味を抱いており、ミュンヘンでも実物を見て感銘を受けている。ピロティはドラローシュの弟子であり当時ミュンヘンで教授として働いていた。マテイコはピロティの歴史画にも同様に感銘を受けていたのだから、ピロティに師事するという選択をしてもおかしくはなかったのである。いずれにしても、マテイコはアンシュツが指導する基礎レヴェルのクラスに入門し、アンシュツはマテイコの技量を高く評価したという。アンシュツは当時ミュンヘン美術アカデミーの学長であったカウルバッハ³⁹にマテイコの最初のデッサンを見せた。カウルバッハはこのデッサンを評価し、マテイコにメダルを贈っている。一方、マテイコはアカデミーが指導する描き方に疑問を抱いていたとも言われる。彼はまた、クラクフにおいてと同様に、ミュンヘンでも歴史的建造物を訪ね歩き、「宝物」に新たなスケッチを加えることも忘れなかった。1年に満たない比較的短い留学となったのは、夏にチフスを患ったことに加え、徴兵委員会からの召集⁴⁰を受けてクラクフに戻らなければならなくなったためである。しかしながら、芸術の都ミュンヘンでの留学生活は、ドイツの歴史画や過去の巨匠たちの名画に直接対面するまたとない機会をマテイコに与えた。

徴兵を免れたマテイコは1860年5月、再びクラクフを後にしてウィーンへと旅立った。ウィーン美術アカデミーでは学長のルーベン⁴¹に師事したが、同教授との不和が原因でマテイコは8日後にはアカデミーを去ったとされている。マテイコは「宝物」へスケッチを追加することには精を出したが、すでに自分の絵画に自信を持っていた彼は、ウィーンの芸術には関心が持てなかった。結局、早くも7月の半ばにクラクフに戻っている。

³⁵ Słoczyński, s. 34 参照。スウォチンスキによると、当時のポーランド人知識人たちの間では、ポーランドにおける「国民絵画」の欠如が問題となっていた。留学奨学金や様々な美術家団体の設立は、「国民絵画」の創造を促す目的もあったという。

³⁶ Hermann Anschütz (1802-1880) : ミュンヘン美術アカデミーの教授職を長年にわたって務めた。後にミュンヘンに留学するポーランド人画家マクスィミリアン・ギェリムスキ Maksymilian Gieryski (1846-1874) やユゼフ・ヘウモンスキ Józef Chełmoński (1849-1914) からもアンシュツに師事している。

³⁷ Karl von Piloty (1826-1886) : ドイツの画家。後にミュンヘン美術アカデミーの学長を務めた。

³⁸ Paul Delaroche (1797-1856) : フランスの画家。フランス史やイギリス史に取材した歴史画を描いた。ロマン主義的なテーマを新古典主義的技法で描く。その緊迫感漂う歴史画は、マテイコの初期作品《王妃ボナの毒殺》*Otrucie królowej Bony* (1859) などに影響を与えたといわれる。

³⁹ Wilhelm von Kaulbach (1804 または 1805-1874) : ドイツの画家。1850年代末には、ミュンヘン美術アカデミー学長を務めるカウルバッハの下で、ドイツの歴史画が最盛期を迎えた。

⁴⁰ マテイコは徴兵委員長の妻の肖像画を描いて徴兵を免除されている。

⁴¹ Christian Ruben (1805-1875) : 歴史画、風俗画を描いた。1852年から1872年の間、ウィーン美術アカデミーの学長を務める。

3. クラクフ美術学校長として

クラクフ美術学校は 1873 年に技術学校から分離し、独立した美術学校となった。この時、初代校長となったのが、プラハ美術アカデミーの学長職を固辞したばかりのマテイコである⁴²。35 歳の彼は、留学後に描いた《スタンチク》⁴³、《スカルガの説教》、《レイタン》、《ルブリン合同》、《プスコフのバトーリ》などの大作を通じて、国内外ですでに大きな名声を得るに至っていた。マテイコは以後 20 年間、自らが死を迎える 1893 年まで学長職を離れなかった。

当時のクラクフ美術学校は、「デッサン部」*oddział rysunku*、「絵画部」*oddział malarstwa*、「歴史画部」*oddział malarstwa historycznego*（「作画部」*oddział kompozycyjny* あるいは「アカデミズム部」*oddział akademicki* とも呼ばれた）の 3 部から成っていた。彫刻は部門としては存在せず、補助的な科目にとどまり、「風景画部」は廃止された。マテイコは中でも「歴史画部」を重要視し、自ら教鞭をとっていた。この部で学ぶことができたのは、基本的に、「絵画部」を優秀な成績で修了した学生だけであった。

マテイコは、クラクフ美術学校が他のヨーロッパ諸国の美術アカデミーに匹敵する教育機関となるよう願っていた。しかし実際には、校長として専断的な学校運営を行い、教育方法の改革も行わず、学生数は減少していった。美術学校で教鞭をとった者はマテイコの学友らが中心であり、外国の芸術を知る有能な人材が教師として採用されることはなかった。さらにマテイコは、学生が外国の芸術に影響されるのを危惧し、教育の初期段階での留学には否定的であった⁴⁴。

マテイコはクラクフ美術学校の自由を束縛し、自らの絵画が放つ個性の力でもって学校の生命を奪い、これに自らのカトリック的芸術理論の枷をはめようと努めた⁴⁵。

マテイコの如き個性は、樫の巨木にも似て、その枝葉の影に生きる植物の成長を妨げる⁴⁶。

以上のスタニスワフ・ヴィトキエヴィチ⁴⁷の言葉からは、マテイコの個性がいかに強く

⁴² プラハ美術アカデミーの学長職固辞の件については、第 2 章 1. 参照のこと。

⁴³ 《スタンチク》については注釈 103 を参照。

⁴⁴ 例えばヤツェク・マルチェフスキ（注釈 61 を参照）は、パリへの留学を巡ってマテイコと対立している。

⁴⁵ Słoczyński, s. 200 より引用。

⁴⁶ Słoczyński, s. 202 より引用。

⁴⁷ Stanisław Witkiewicz (1851-1915)：画家、評論家、作家。1869 年から 1871 年にかけてペテルブルク、1872 年から 1875 年にかけてミュンヘンの美術アカデミーに留学。1875 年から 1890 年の間は主にワルシャワに住み、文学及び評論活動を開始した。『わが国の芸術と批評』*Sztuka i krytyka u nas* (1891) が代表作で、ポーランドの近代的な美術批評を確立した人物の 1 人として知られる。1890 年からはポーランド南部の山岳地帯ザコパネ Zakopane に定住。ザコパネ様式 *Styl Zakopiański* と呼ばれる建築様式を創始した。また、山岳地方の風景画も多く残している。ヴィトカツィ Witkacy の愛称を持つアヴァンギャルドの芸術家スタニスワフ・イグナツィ・ヴィトキエヴィチ Stanisław Ignacy Witkiewicz (1885-1939) の父。

美術学校を支配していたのかが分かる。その個性がいかなるものだったのかは、次に引用するマテイコの言葉から察することができるのではないか。これはマテイコが 1882 年 10 月 16 日に美術学校の始業式で行った演説である。彼が芸術についてどのような見解を持ち、実際に校長として学生に何を求めているのかを、ここから知ることができるだろう。

このように長い間、恒常的に異常な立場に置かれている国の一員として、諸君、我々は実際 2 つの祖国を持っているということを覚えておきましょう——それは芸術と国です！ 祖国や国から切り離された芸術もまた使命ですが、全生涯を通じて祖国のために戦った大昔の数多くのわが英雄たちの墳墓は、我々に非難の目を向けるでしょうし、そのような今日の芸術をただ否定的に評価するだけでしょ！ 芸術は、今日の我々にとっては、一種の手中の武器である。芸術を、祖国の愛から切り離すことは、許されない⁴⁸！ この 2 つを切り離す人は、中途半端にしか国に仕えていない人かもしれません。なぜなら、芸術は国への奉仕であるばかりか、それはとりわけ現代において、義務であり犠牲でさえあるのです。すでにマレク神父がベニョフスキから重要な誓いを受け入れた時、次のような意見を述べられている。「全身全霊を祖国への奉仕のために差し出さねばなりません。そうでないと、神様が祈りを聞き入れてくださらないでしょう...、そうしない者は樅の木となり、ただ枝葉をそよがせるだけで終わるでしょう！⁴⁹」祖国愛はそれ自体まさに褒美ではありますが、わがガリツィアもまたその祖国愛を顕彰しています。その証拠に、芸術家のための新しい公的奨学金が、最近わが国会によって創設されたのです。しかし、この奨学金は単に一時的なものとはならないでしょう。もっともこの新しい奨学金でさえ、今まで以上の夥しい数の芸術家たちに芸術の普及が緊急に必要となることを予感させます。わがガリツィアは公の目的のためにより多くの芸術家を必要としつつあります。ヴァヴェルの王城の再建に、一体何人の芸術分野の作業員が必要となるのでしょうか。

純粋に芸術的な分野における仕事は、将来まちがいなく増大するでしょう。この希望は、より高次の目的のために芸術分野で教養を身につけるという非常に強い義務感を、諸君に奮い起こさせるはずです！

高度な芸術環境は国外で獲得するというのが我々の慣例でしたが、今まで外国に行ったこの国の芸術家や学生たちは、芸術に関する新しく新鮮な知識をごくわずかしか蓄えられずに帰って来ました。この悲しい兆候は、彼らの外国滞在期間の短さか、または妨害に遭いほとんど克服されなかった他の不幸な環境が理由で

⁴⁸ 当該文とその前文の日本語訳は、関口時正 「世紀末ポーランドで日本美術を見る困難について」 『比較文学研究 61』 東大比較文学會、1993 年、23 頁に拠った。

⁴⁹ ユリウシュ・スウォヴァツキ Juliusz Słowacki の長編詩『ベニョフスキ』 *Beniowski* (1841 年) 第 3 歌 721 行目から 728 行目までと関連していると思われる („Bieda, kto daje ojczyźnie pół duszy, / A drugie tu pół dla szczęścia zachowa; / Oboje w nim Bóg swym piorunem skruszy / I padnie kiedyś w popiół taka głowa! / Żadną łzą taki Boga nie poruszy, / W modlitwie nigdy już nie znajdzie słowa, / Które by kiedyś jego Bóg rozumiał, / I będzie jak ten dąb umarły szumiął.” < *Juliusz Słowacki, Dzieła wybrane, Tom 2, Poematy, Oprac. Julian Krzyżanowski, Zakład Narodowy imienia Ossolińskich Wydawnictwo, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk 1979, s. 134.* >)。

あったはずなのです！

諸君、良く覚えておいてください。才能ある若者はその才能を埋もれさせてはなりません。なぜならそれは自殺だからです。しかしながら、この国ではすでに少なからぬ芸術家が自分の才能を埋もれさせ、または小さくくだらないことのために才能を無駄遣いしたのです！ 不用に切り倒された、この乾いた木のようにならないでください。そうではなくて、神の愛と祖国愛のためにより高く高く行動してください！

ところで、我々の美術学校にやって来るヘブライ人学生諸君、覚えておいて下さい。芸術は商業的で投機的な労働などではありません。芸術というのは、人間精神が目指すより高次の目的を掲げて神の愛の内でする仕事であり、祖国愛ともつながっている仕事なのです。もし諸君が我々の芸術研究機関で、ただ投機のためだけに芸術を習得したいのならば、そしてまた、国家に対する感謝の念も義務感も抱きたくないのならば、もしヘブライ人の諸君が、幾世紀も前から我々の国に暮らしていながら、我々の国のためにより高潔な行いをしようとも自覚せず、またポーランド人になりたいとも思わないのなら、この国から出て行って下さい。我々のもとを離れ、いかなる祖国もない、高次の祖国愛もない、大地の愛が内包する人間の高い美徳もないような場所へ行ってください！

以上の言葉をもって学校を開校し、諸君全員を高貴な仕事に召集します。これは人間の尊厳を掲げて模範を築く、実りの多い仕事です。神の名の下に開始してください！ 道は広くて長いのですから⁵⁰。(強調は原典)

ちなみに、この演説は当然ながらユダヤ人社会から非難された。マテイコの弁護士が彼の名誉毀損を訴えて裁判にまで発展したこの一件は、ワルシャワでも反響を呼ぶほどであった⁵¹。マテイコがクラクフ美術学校長という立場で行った反ユダヤ主義的発言は、本論文では検討できないが、マテイコのユダヤ人観がどのようなものであったのかという大きな問題を提示している。特に、クラクフ美術学校で学んだユダヤ人画家マウリツィ・ゴットリーブ⁵²とマテイコとの関係は、マテイコのユダヤ人観を巡る議論の中で頻繁に言及さ

⁵⁰ Gorzkowski, s. 237.

⁵¹ この演説に関してゴシュコフスキは次のように述べている。「校長が厳しい言葉でユダヤ人学生に言及したのは、最近ユダヤ教の何人かの学生が、賞金が出るコンクールではよくありがちなことではあるが、そこで自分の家系と出身を強調したためである[当時ユダヤ人資本家が主催するコンクールがよく行われていたことと関連か]。ある学生W [Saul Wahlという学生のこと。クラクフ美術学校に1880年から在籍し、1883年に中退。]はコンクールに出した自分の作品で賞金を獲得したいがために詐欺まで犯したのである。校長マテイコは新学年度の開始に際して行った学生に対する演説で、芸術作品はそれ自身の高尚な目的を持っており、何か投機的な商業的労働ではなく、高い目的を持った仕事なのだななどとはっきりと述べた。この演説はこの後話題になったのだが、それはすぐに後述するように、この演説が原因で訴訟が行われたからである。」(Gorzkowski, s. 236-238.)

⁵² Maurycy Gottlieb (1856-1879)：ドロホビチュDrohobycz (現ウクライナのドロゴビチ)の裕福なユダヤ人家庭に生まれる。ルヴフで絵画の勉強を始め、1872(1871)年から1874年、ウィーンに留学し歴史画を学ぶ。1874年から1875年、クラクフ美術学校でマテイコに師事し、主にポーランド・テーマを扱う。1875年から1876年、ミュンヘンでピロティに師事。それまで扱わなかったユダヤ・テーマを用い名声を得る。1878年、奨学金を得てヴェネツィア経由

れる。

4. マテイコの絵画

4. 1. 美術史におけるマテイコ

マテイコの創作活動は 1862 年に完成した《スタンチク》から本格化し、彼が未完の大作《ヤン・カジミエシュの誓い》*Śluby Jana Kazimierza*を残してこの世を去る 1893 年まで絶え間なく続いた。この期間を西欧美術史に照らし合わせてみると、フランスでは新古典主義とロマン主義をそれぞれ代表した 2 人の巨匠アングルとドラクロワの死、写実主義の流れを汲むマネやドガが登場した 1860 年代から、印象派が活発な活動を始めた 1870 年代を経て、後期印象主義の時代とされる 1880 年代後半以降という一連の流れに重なる。19 世紀後半はまた、ヨーロッパ諸国の芸術に象徴主義が様々な形で現れた時期でもあり、世紀末の芸術運動とも深く関わっていくことになった。

一方、引き続き分割列強国の統治下にあったこの時期のポーランドにおける美術は、フランスに代表されるような西欧美術史の流れとは異なっていた。ポーランドではロマン主義と写実主義が並行して存続し、印象派が堂々と現れる時期はなかった。その代わりに、ポズィティヴィズム *pozytywizm*、ヒストリズム *historyzm* といった言葉で表される、ポーランド独特の基調の存在を指摘できるかもしれない。ポズィティヴィズムは、1864 年の 1 月蜂起敗北後に当時ロシア領であったワルシャワで始まった社会の近代化運動を指す。これまでの無謀な武装蜂起路線に対する反省に基づき、祖国の独立を達成するためには教育の普及や経済活動の振興を推進する必要があるとされた。また、貧困やユダヤ人に対する差別などの社会問題にも目が向けられるようになった。これらの課題に対し日常生活の中で地道に努力を積み重ね、社会全体の近代化を図ることが必要であると唱えられ、文学や芸術の領域にもこの運動への賛同が見られる。美術に関しては、とりわけワルシャワで絵画を学んだ画家たちが農村生活や都市生活などの日常の風景を描くことが多かった。ヴォイチェフ・ゲルソン⁵³やマクスィミリアン・ギェリムスキ⁵⁴、アレクサンデル・ギェリム

でローマに旅行。1879 年にクラクフに戻り、弱冠 23 歳で死去。ユダヤ人意識とポーランド文化への帰属意識との狭間で揺れた。作品のテーマはユダヤ史・文化、聖書や文学、ポーランド史など。

ゴットリーブはウィーン留学中、現地に展示されていたマテイコ作品に感銘を受け、クラクフで学ぶことを決意。マテイコはゴットリーブを高く評価していたようであり、「彼 [ゴットリーブ] は非凡な才能の持ち主であっただけでなく、高貴な志で満たされた、人格の良さと無私の精神によって人を魅了するような天性を持つ人物であった」(*Śloczyński, s. 158.*) という言葉を残している。しかし、美術学校のある教授と学友が反ユダヤ主義的行動を取ったため、ゴットリーブは 1875 年にクラクフを去った。彼はマテイコに対する敬愛の念を抱き続けていたようである。1878 年末から 79 年初頭にかけてマテイコがイタリアに旅行した際、当時ローマにいたゴットリーブが、マテイコにクラクフ美術学校への復学を直接願い出ている。1879 年初頭、ゴットリーブはクラクフに戻り、美術学校の歴史画部に在籍していた。

⁵³ Wojciech Gerson (1831-1901) : ワルシャワ (1844-1851) とペテルブルク (1853-1855) で美術を学ぶ。1872 年から 1896 年の間、ワルシャワ絵画教室の教授を務めた。1878 年、ペテルブルク美術アカデミーの教授として認められる。タトリ山地の風景を多く描いた他、風俗画や歴史画も残した。美術協会ザヘンタの創設者の 1 人。

スキ⁵⁵らの名前が挙げられる。これは、日常生活に目を向けることを重視するポジティブイズムの要請を画面に反映させたともいえるかもしれない。一方、マテイコを含むクラクフの画家たちは、主にポーランド史に取材した歴史画を描くことが多かった。この潮流はヒストリズムとして括ることができ、マテイコその他、アルトゥル・グロットゲル⁵⁶やユリウシュ・コサック⁵⁷などがよく知られている。この時代に愛国主義の分かりやすい表明である歴史画を描くことができたのは、ポーランド人社会に自治が許されていたオーストリア領内のクラクフにおいてだからであろう。ポーランド人に対する厳しいロシア化またはゲルマン化政策が採られていた残る2つの分割領内でポーランド史を描くことは困難であった。ヒストリズムの起源はロマン主義に求めることが可能であるとされ⁵⁸、民族の歴史を描くことでポーランド人の愛国心に訴えることを使命とした。いずれにしても、この時期のポーランドにおける絵画には、作品に政治性や社会性が求められる場合があったという点を、1つの特徴として指摘することができる⁵⁹。この点は、本論文で扱うマテイコの絵画や彼の生き方からも理解することができるだろう。

クラクフにおける歴史画は、その後直接の後継者を見出せなかったが、次世代の画家たちが担った「若きポーランド」*Młoda Polska*と呼ばれる世紀末芸術運動に、その影響が見られる。西欧モダニズムの流れを汲むこの潮流は、ちょうど西欧諸国のアール・ヌーヴォーやユグレント・シュティールに対応する。ただし、ポーランド美術史の頂点を成すとされる「若きポーランド」は、「ネオ・ロマンティズム」と言い換えることが可能なほど、ロマン主義と強く結びついていた。このロマン主義の再来が、同じくロマン主義的傾向を持

⁵⁴ Maksymilian Gierymski (1846-1876) : 1月蜂起参加者。1865年にワルシャワ絵画教室で学んだ後、1867年からミュンヘンの美術アカデミーに留学する。同地のポーランド人画家コロニーの中心的人物。風景画や風俗画、1月蜂起の光景を描いた作品などを残した。アレクサンデルの兄。

⁵⁵ Aleksander Gierymski (1850-1901) : 1867年にワルシャワ絵画教室で学んだ後、1868年から1872年の間、ミュンヘン美術アカデミーに留学する。主に都会の風景や生活の一場面を多く描いた。イタリア、ウィーン、ミュンヘン、パリなど様々な場所に滞在した。ポーランドでは主に1879年から1884年の間ワルシャワで過ごし、雑誌出版に携わった。1893年から1年間クラクフで活動し、農民やその生活をテーマにした絵を多く描いている。

⁵⁶ Artur Grottger (1837-1867) : ルヴフ (1848-1852)、クラクフ美術学校 (1852-1854)、ウィーン美術学校 (1855-1859) で美術を学ぶ。ウィーンには1865年まで滞在し、現地の雑誌の挿絵画家としても成功した。1865年にポーランドに戻り、主としてクラクフやルヴフなどに滞在した。1866年末にフランスに赴き、翌年弱冠30歳で逝去した。愛国的テーマを描き名声を獲得する。代表作には5つの連作《ワルシャワ I》*Warszawa I* (1861)、《ワルシャワ II》*Warszawa II* (1862)、《ポロニア》*Polonia* (1863)、《リトアニア》*Lithuania* (1864-1866)、《戦争》*Wojna* (1866-1867) があり、最後の作品はオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世によって買い上げられた。1月蜂起を題材にした作品などもある。

⁵⁷ Juliusz Kossak (1824-1899) : 1853年から1855年をワルシャワで、1856年から1861年までをパリで過ごす。その後ワルシャワに戻り、1862年から1868年の間、雑誌『ティゴドニク・イラストロヴァニ』*Tygodnik Ilustrowany*の美術責任者となる。続いてミュンヘンやパリに滞在した。1869年からは主にクラクフで活動し、1872年にはクラクフ学術アカデミー会員となっている。水彩画で有名。戦闘や狩猟の光景、歴史画、馬の姿を多く描いた。息子ヴォイチェフ Wojciech Kossak (1856-1942) の父。

⁵⁸ Tadeusz Dobrowolski, *Nowoczesne malarstwo polskie 1764-1939. T. II*, Zakład Narodowy im. Ossolińskich Wydawnictwo, Wrocław-Kraków 1960, s. 19 参照。

⁵⁹ 関口時正 「世紀末ポーランドで日本美術を見る困難について」 『比較文学研究 61』 東大比較文学會、1993年、21頁参照。

っていたヒストリズムの延長線上にあることは、ヤツェク・マルチェフスキ⁶⁰やスタニスワフ・ヴィスピャンスキ⁶¹、ユゼフ・メホフェル⁶²といったマテイコの教え子たちが、この新潮流の中核に存在していることから明らかである。

4. 2. マテイコの歴史画の特徴

マテイコは多数の歴史画を残したほか、折に触れて肖像画も描いた。また、歴史的建造物の修復作業に伴い、建物の部分的な設計や教会の壁画のデザインなども行った⁶³。これらの中でマテイコが自らの本業とみなしていたのが歴史画であった。そこで、彼の歴史画におけるいくつかの特徴を挙げてみたい。

まず主要作品が巨大であることが挙げられる。最も大きいものは《グルンヴァルトの合戦》で、縦 423cm×横 987cm である。この超大作は現在ワルシャワ国立美術館に展示されており、まさに壁一面を覆い尽くしている。

対象の描写が極めて写実的であることも指摘できる。マテイコは単に対象をリアルに描く技術を持っていただけではない。彼はキャンバスに描く人物の衣装、武具、馬具、建物、布類、その他すべての小道具について、その作品の舞台となっている時代の物としてふさわしいかどうかを逐一検討した。国王などの著名な人物を描く場合は、その人物の顔立ちなどに関しても調査を行った⁶⁴。彼の歴史画における描写の写実性は、単に技術的な面からだけでなく、入念な時代考証の末に対象が描かれているという点からも指摘できるので

⁶⁰ Jacek Malczewski (1854-1929): 画家。1873 年から 1879 年にかけてクラクフ美術学校に在籍し、主としてマテイコに学んだ。1876 年から 1877 年の間、パリのエコール・デ・ボザールに留学。1896 年から 1900 年及び 1912 年から 1921 年、クラクフ美術アカデミーで教授を務める。1 月蜂起後のシベリア流刑者の受難をテーマにした作品を多く描き、《鉱山の日曜日》*Niedziela w kopalni* (1882) などの写実的な作品の他、《エレナイの死》*Śmierć Ellenai* (1883 及び 1907) など J. スウォヴァツキの文学作品に基づいたものや、《ポロニア》*Polonia* (1918) のように寓意的な作品もある。後年の絵画には象徴主義的なものが多く、ポーランドに関連した《メランホリア》*Melancholia* (1890-1894) などに加え、ギリシア神話などに取材した非現実的要素を描き込んだ作品が多数ある。肖像画や自画像も残した。

⁶¹ Stanisław Wyspiański (1869-1907): 画家、詩人、劇作家、舞台装置作家。1884 年から 1885 年及び 1887 年から 1895 年にかけてクラクフ美術学校で学び、ウシュチュキエヴィチやマテイコに師事した。ヤギェロン大学でも歴史、美術史、文学を学んだ。1890 年から 1894 年、主にパリで留学生活を送る。1902 年からクラクフ美術アカデミーで教鞭をとる。パステル画を好み、子どもや著名人の肖像画、自画像などを描いた。教会の内陣やステンドグラスの図案作成、家具のデザインなども行った。文学領域でも重要な作品を多数残し、ポーランド文化史において大きな存在感を持つ人物。

⁶² Józef Mehoffer (1868-1946): 画家。1887 年から 1889 年、クラクフ美術学校でマテイコとウシュチュキエヴィチに師事する。1889 年にウィーン、1891 年から 1896 年にかけてパリに留学。1900 年以降、クラクフ美術アカデミーで教鞭をとった。教会の内陣やステンドグラスのデザイナーとして成功した。スイスのフリブールにある聖ニコラ大聖堂のステンドグラス (1895-1935) は有名。セセッションの影響を受けた装飾性が特徴で、油彩画では《不思議な庭園》*Dziwny ogród* (1903) が代表作。肖像画、自画像、風景画も残している。

⁶³ 例えば、本論文第 4 章で取り上げる、聖マリア教会内部の改修作業などがある。

⁶⁴ 例えば Gorzkowski, s. 419 によると、マテイコは《ポーランド王侯図》*Poczet królów i książąt polskich* (1892) を描く際に、王侯の顔を決定するのに苦心している。墓や硬貨に残された彫刻を参考にしただけでなく、文献から得られた当該人物の伝記的情報を基に、その人物の性格などを考慮した上で顔を決定した。

ある。

しかしながら、マテイコがキャンバスに描いた場面が史実の写実的な再現であったかという、全くそうではない。彼が描こうとしたのは自らの「歴史哲学」historiozofiaであって、描いた場面が史実に忠実かどうかは問題ではなかった。マテイコの歴史画には、実際にはその場にいるはずがない人物や、あるはずがない物が意図的に描き込まれており、史実に照らし合わせてみれば虚偽ばかりなのである。しかし、まさにこの点こそがマテイコの歴史観を検討する際の手がかりになる。マテイコが敢えて虚構を描いたのは、自分が史実をどう解釈しているのかを表明するためであった。ただし、マテイコが何を表明したかったのかを理解するためには、作品の詳細な分析が必要となる。

4. 3. 主要作品

スウォチンスキは、以下に挙げるマテイコ作品 9 点を 1 つの大きな連作として捉え、マテイコの「歴史哲学」がいかなるものであったかを包括的に検討している⁶⁵。本論文でもスウォチンスキの主張に基づき、この 9 作品をマテイコの主要作品として紹介することにした。以下に、作品の題名（日本語訳と原語）、完成年、大きさ（縦×横／単位はセンチメートル）、作品の場面に関するごく簡単な説明⁶⁶を記しておく。本論文 63 頁の参考図版 B を合わせて参照して頂きたい。

《スカルガの説教》 *Kazanie Skargi* (1864) 224 x 397

<場面>イエズス会士ピョートル・スカルガ⁶⁷が、クラクフのヴァヴェル大聖堂で国王ズィグムント 3 世⁶⁸や国会議員らを前に説教をしている。これはマテイコが独自に設定した架空の場面であり、全くの想像上の出来事である。マテイコはさらに、1606 年に反国王派のシュラフタたちによって結成されたゼブジドフスキ（サンドミェシュ）のロコシュ⁶⁹を取り巻く政治的な勢力関係をも描き入れている。（参考図版 B・1）

⁶⁵ Słoczyński, s. 98 などを参照。

⁶⁶ 以下の説明は主として Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w hołdzie... W stulecie śmierci artysty. Katalog wystawy*, Muzeum Narodowy w Warszawie, Warszawa 1993 に拠った。

⁶⁷ Piotr Skarga (1536-1612): ポーランドの対抗宗教改革を代表する人物であるイエズス会士スカルガは、狂信的なカトリック信者となった国王ズィグムント 3 世の時代、国王付きの説教師として国政に影響を及ぼした。シュラフタ階級の専横を批判し、カトリック教会との協力関係を持つ強力な王権のあり方を訴えた。代表作『議会のための説教集』*Kazania sejmowe* (1597)。

⁶⁸ Zygmunt III Waza (1566-1632/在位 1587-1632): 大法官ザモイスキ Jan Zamoyski の支持を得てポーランド国王に選出されたが、即位後は親ハプスブルク路線をとって絶対王政を理想としたためシュラフタからの信用を得ることができず、さらにイエズス会士を重用し強硬なカトリック化政策をとったため、新教徒や正教徒のシュラフタの非難にもさらされた。

⁶⁹ rokosz Zebrzydowskiego (rokosz sandomierski): クラクフ県知事ミコワイ・ゼブジドフスキ Mikołaj Zebrzydowski (1533-1620) らが結成した反国王派シュラフタのロコシュ（武装したシュラフタの蜂起）。国王側に立った大貴族らも対抗ロコシュを結成し、内戦状態に陥る。1607 年、グズフ Guzów での戦いで反国王派の敗北が決定。「マグナート寡頭政」への流れが強まった。

《レイタン——ポーランドの没落》 *Rejtan – Upadek Polski* (1866) 282 x 487

（《1773年ワルシャワ国会議場のレイタン》 *Rejtan na sejmie warszawskim 1773 roku*）
＜場面＞この作品は、1772年の第1次ポーランド分割の批准を目的として、ロシア、プロイセン、オーストリアの圧力で1773年にワルシャワ王宮に召集された「分割国会」sejm rozbiorowyを題材にしており、同国会にノヴォグロデク県Nowogródek（現ベラルーシのノヴォグロドク）代表議員として出席していたタデウシュ・レイタンTadeusz Rejtan（1742-1780）に関する有名なエピソードが下敷きになっている。レイタンは、アダム・ポニンスキ⁷⁰が分割の批准を目指して密かに結成した連盟を違法とし、3日以内に⁷¹ポニンスキ以外の議長を選出することを望んでいた。連盟側の妨害により議長の選出が行われないまま迎えた国会3日目（4月21日）、議場である下院室を退室しようとする議員たちを止めようと⁷²、レイタンは下院室の出入り口扉の下に倒れ込んで横たわり、退室したいのなら自分の体を踏みつけて行くようにと議員たちに向かって叫んだ。（参考図版B-2）

《ルブリン合同》 *Unia lubelska* (1869) 298 x 512

＜場面＞1569年7月1日、ルブリン議会でポーランド王国とリトアニア大公国の制度的合同（ルブリン合同）が成立し、宣誓された。この絵には、十字架を掲げ合同決定の文書への署名を呼びかけている国王ズィグムント・アウグスト⁷³が登場する場面と、合同の宣誓の場面とが共に画面に納められている。ルブリン合同成立300年周年を記念して描かれた。（参考図版B-3）

《プスコフのバトーリ》 *Batory pod Pskowem* (1872) 322 x 545

＜場面＞この絵は国王ステファン・バトーリ⁷⁴が行ったモスクワ大公国との戦争を題材にしており、マテイコは戦争中の2つの出来事を組み合わせて描いている。1つは1580年のヴィエルキエ・ウキWielkie Łuki攻略後にバトーリがモスクワの使節団を迎え入れた場面である。もう1つは1581年のプスクフPsków（現ロシアのプスコフ）攻囲後の場面であり、敗北したイヴァン4世（雷帝）による休戦の申し出から、教皇庁の仲介で長期間にわたって休戦条約の締結交渉が行われた際の様子までを含むものである。（参考図版B-4）

《グルンヴァルトの合戦》 *Bitwa pod Grunwaldem* (1878) 423 x 987

＜場面＞1410年7月15日グルンヴァルト村⁷⁵で、ヴワディスワフ・ヤギェウォ⁷⁶率いる

⁷⁰ Adam Poniński (1732-1798)：1773年から1775年にかけて行われた分割国会で国会議長を務める。ロシアからの命令を有給で実行していた。

⁷¹ 国会開始日を含め3日間以内に議長が選出されなければ、その国会は流会になるとされていた。

⁷² 議員らが退出すれば議長の選出は不可能となり、それはポニンスキが議長となることの承認と、第1次分割の批准を意味した。

⁷³ Zygmunt II August (1520-1572／在位 1529-1572)：ポーランド王兼リトアニア大公。ヤギェウォ朝最後の王。

⁷⁴ Stefan Batory (1533-1586)：トランシルヴァニア公バートリ・イシュトヴァーン（在位 1571-1576）。1576年よりポーランド国王に選出された（在位 1576-1586）。

⁷⁵ Grunwald: ポーランド北東部、オルシュティンOlsztyn付近に位置する。

⁷⁶ Władysław Jagiełło (1348頃-1434)：1377年からリトアニア大公（リトアニア名ヨガイラ）

ポーランド・リトアニア・ルーシの連合軍がドイツ騎士団と戦い、大勝利を収めた「グレンヴァルトの戦い」が題材になっている。マテイコはこの戦いの最終局面を描いた。リトアニア大公ヴィトルト⁷⁷の活躍と、必死のドイツ騎士団長フォン・ユンギンゲンUlrich von Jungingenの姿が、ドイツ騎士団の最終的敗北を象徴している。(参考図版B-5)

《プロイセンの臣従》 *Hołd pruski* (1882) 388 x 785

<場面>この作品は、クラクフの中央市場広場で1525年4月10日に行われた、いわゆる「プロイセンの臣従」の光景を描いたものである。ルター派に改宗したドイツ騎士団長アルブレヒト・ホーエンツォレルン⁷⁸はこの日、ポーランド国王ズィグムント1世Zygmunt I (在位1506-1548)に臣従を誓った。騎士団領は世俗化されてプロイセン公国となり、初代プロイセン公となったアルブレヒトは、ポーランド国王の封臣という立場に置かれた。マテイコの絵では、ズィグムント1世が、ポーランドへの従属を象徴するプロイセン国旗をアルブレヒトに授けている。国旗の黒鷲は首に王冠、胸には「Sigismundus」(=ズィグムントZygmunt)の頭文字Sを付けている。アルブレヒトは跪いてズィグムントの膝の上にある聖書に手を置きながら、国王に臣従を誓っている。(参考図版B-6)

《ウィーンのソビエスキ》 *Sobieski pod Wiedniem* (1883) 458 x 894

<場面>1683年9月12日、国王ヤン3世ソビエスキ⁷⁹を最高司令官とするポーランド・オーストリア・ドイツ諸侯の連合軍は、ウィーンを包囲していたオスマン帝国軍を撃退した。この作品は、教皇インノケンティウス11世に宛てた戦いの勝利を知らせる手紙を、ソビエスキが司教座聖堂参事会員デンホフDenhoffに手渡している場面が描かれている。この絵は「ウィーン解放」200周年を記念して制作され、マテイコの意向により教皇レオ13世に捧げられた⁸⁰。(参考図版B-7)

《オルレアンの乙女》 *Dziewica Orleańska* (1886) 484 x 973

(《ジャンヌ・ダルク》 *Joanna d'Arc*)

<場面>英仏間で行われた百年戦争(1339-1453)の末期、危機に陥っていたフランスに、神から祖国救済の啓示を受けたと信じる農民の娘ジャンヌ・ダルク(1412-1431)が現れた。1429年、彼女は英軍に包囲されていたオルレアンとランスを解放し、仏軍が劣勢を巻き返す契機を作った。1422年にフランス王として即位していたシャルル7世は、1429年7月27日の夜、ジャンヌ・ダルクによって解放されたランスの地で戴冠の儀式を行った。マテイコが描いているのは、フランスの歴代国王が戴冠式を行うランスの大聖堂にシャル

であったが、ポーランドの女王ヤドヴィガJadwigaとの結婚により、1386年からポーランド王を兼ね、ポーランドのヤギェウォ朝を創始。1401年に従弟のヴィトルトWitold(1352-1430/リトアニア名ヴィタウタス)にリトアニア大公の地位を譲渡した。

⁷⁷ 注釈76を参照。

⁷⁸ Albrecht Hohenzollern(1490-1568):最後のドイツ騎士団長(在任1511-1525)。1525年、初代プロイセン公となる。

⁷⁹ Jan III Sobieski(1629-1696/在位1674-1696):スウェーデン、コサック、オスマン帝国などとの戦いにおける軍事指導者としての功績を評価され、1674年、ポーランド国王に選出された。

⁸⁰ 詳細は本論文第2章5.を参照。

ル7世が入場するところである。ジャンヌ・ダルクは国王の従者たちを率い、シャンパーニュの村で自らに使命を託した聖人たち（聖カトリヌ、大天使ミカエル、聖マルグリット）を見つめている。（参考図版なし）

《ラツワヴィツェのコシチュシュコ》 *Kościuszkę pod Racławicami* (1888) 465 x 897
＜場面＞1794年3月24日、第2次ポーランド分割（1793）に反発したタデウシュ・コシチュシュコ⁸¹がクラクフで蜂起を呼びかけた。彼の蜂起で最初の勝利となったのは、4月4日に行われたラツワヴィツェ⁸²の戦いであり、その勝利に大きな貢献をしたのはクラクフ周辺の農民兵2000人であった。彼らは大鎌を手にしてロシアの正規軍部隊を相手に戦った。マテイコの作品は戦闘終了後の光景を描いたものである。コシチュシュコは大鎌を持った農民兵らに迎えられ、自分の部隊を見渡している。農民兵の先頭に立ったバルトシュ・グウォヴァツキ⁸³の姿もある。（参考図版B-8）

4. 4. 展示場所・受賞歴・所属美術アカデミー

マテイコという人物を紹介的に論ずるという本論文の趣旨を考慮すると、マテイコの作品が同時代のポーランド社会においてどのように受容され、また、国際的にはどのように評価されていたのかについても検討されねばならないだろう。しかし、ここでは同時代における展示場所⁸⁴や、受賞歴及びマテイコの所属美術アカデミーについての簡単な説明にとどめておきたい。

マテイコの絵画が最も多く展示された都市は、彼の居住地であり活動拠点であったクラクフで、大半の作品が完成と同時に展示された。展示はたいてい美術愛好家協会⁸⁵で行われ、その他にはクラクフ学術協会⁸⁶（後にクラクフ学術アカデミー⁸⁷）や織物会館、ヴァヴェル城で行われたこともある。クラクフに次いで展示回数が多かった都市はワルシャワで、特に美術協会ザヘンタ⁸⁸での展示が多い。ガリツィアの首都ルヴフでの展示も比較的

⁸¹ Tadeusz Kościuszkę (1746-1817)：ポーランド独立を目指す最初の蜂起の指導者として英雄的な存在。アメリカ独立戦争参加者としても知られる。

⁸² Racławice：クラクフの北にある村。

⁸³ Bartosz (Wojciechとも) Głowacki (1758頃-1794)：このラツワヴィツェの戦いで軍功をあげた農民。ポーランド独立のために戦う農民の象徴となった。

⁸⁴ 展示に関する情報は、主に *Jan Matejko. Materiały z sesji naukowej poświęconej twórczości artysty 23-27 XI 1953*, Arkady, Warszawa 1957, s. 313-320 に拠った。

⁸⁵ Towarzystwo Przyjaciół Sztuk Pięknych w Krakowie: 1854年に創設された。マテイコも同協会の幹部として活動した。展覧会を行っていた場所は、当初ラリシュ邸 Pałac Larischa (フランチェスコ教会の向かいにある建物) の3階であった。その後は、司教邸 Pałac Biskupi や織物会館で行った。1901年以降は「芸術の館」 Pałac Sztuki (シュチェパンスキ広場4番地 pl. Szczepański 4) に拠点を置いている。

⁸⁶ Towarzystwo Naukowe w Krakowie (TNK): 1816年にヤギェロン大学の関連組織として創設された。1871年以降はクラクフ学術アカデミー Akademia Umiejętności となる。

⁸⁷ Akademia Umiejętności (AU)：1871年に創設された、クラクフに拠点を置く学術機関。クラクフ学術協会 (TNK) が前身。ロシア領やプロイセン領からも第一線の学者らが集まり、分割時代のポーランドにおいて非常に重要な学術機関であった。

⁸⁸ Towarzystwo Zachęty Sztuk Pięknych (Zachęta)：1860年に画家ヴォイチェフ・ゲルソン Wojciech Gerson (1851-1901) らによって創設され、ワルシャワで活動を展開した。1900

多く、主要作品の大半が展示された。ポーランド分割以前のポーランド領内ではこの3都市の他に、ポズナンPoznańとプシェミシルPrzemyślでも展示が行われたことがあった。ポーランド分割以前のポーランド領外の都市に関しては、ウィーン、パリ、ベルリン、プラハにおける展示回数が比較的多く、その他にはブダペスト、ミュンヘン、ブルノ、ドレスデン、ロンドン、ペテルブルク、ローマ、ヴロツワフWrocław(当時ブレスラウBreslau)、ブリュッセル、シカゴでも展示された。パリではサロンに7回、万国博覧会に3回出展している。

ちなみに、先ほど挙げたマテイコの主要作品がどの都市に展示されたのかというと、次の通りである。

《スカルガの説教》(1864)

——クラクフ(1864、1871、1883、1884)、パリ(1865[サロン])、ウィーン(1873[万博]、1883)、ワルシャワ(1874、1878、1884)、ポズナン(1884)、ヴロツワフ(1884)、ルヴフ(1884)、ベルリン(1891)

《レイタン》(1866)

——クラクフ(1866)、ウィーン(1866)、パリ(1867[万博])、ルヴフ(1868)、ブルノ(1868)、プラハ(1868)

《ルブリン合同》(1869)

——クラクフ(1869、1873、1874)、ウィーン(1869、1873[万博])、ルヴフ(1869、1875)、パリ(1870[サロン]、1878[万博])、プラハ(1870)、ロンドン(1871[万博])

《プスコフのバトーリ》(1872)

——クラクフ(1872、1873)、ルヴフ(1872)、ウィーン(1872、1873[万博])、ブダペスト(1872)、プラハ(1873)、パリ(1874[サロン])

《グルンヴァルトの合戦》(1878)

——クラクフ(1878、1889、1890、1892、1893)、ワルシャワ(1878、1879、1881、1882/1883、1884)、ウィーン(1878)、ベルリン(1879)、ブダペスト(1879)、ルヴフ(1879)、ペテルブルク(1879)、パリ(1880[サロン])、

《プロイセンの臣従》(1882)

——クラクフ(1882、1887)、ルヴフ(1882)、ローマ(1882/1883)、ワルシャワ(1882/1883)、ウィーン(1882/1883)、パリ(1884[サロン])、ベルリン(1884)、プラハ(1885)、ブダペスト(1885)

年からは、マワホフスキ広場pl. Małachowskiにある建物「ザヘンタ」Zachętaを拠点としている。

《ウィーンのソビエスキ》(1883)

——クラクフ (1883)、ウィーン (1883)

《オルレアンの乙女》(1886)

——ベルリン (1886)、クラクフ (1886、1890、1891、1892、1893)、ポズナン (1886)、
ワルシャワ (1886)、ブリュッセル (1887)、ミュンヘン (1887、1888)、パリ (1887
[サロン])、ウィーン (1887)

《ラツワヴィツェのコシチュシュコ》(1888)

——クラクフ (1888)、ルヴフ (1888)、ポズナン (1888)、ウィーン (1888/1889)、パリ
(1889 [万博])

マテイコ作品がポーランド社会でどのように受容されたのかという問題に対し、以上から、クラクフ以外の都市でも実際にマテイコの作品を鑑賞する機会があったという点をまずは指摘することができる。当時ロシア領であったワルシャワでも、比較的多くの作品が展示されていた。一方で、当時のプロイセン領では、ポズナンでの数回の展示しか行われていない。また、展覧会を訪れていたのはどのような社会階層の人々だったのだろうか。もしかすると、マテイコの作品を版画や写真によって目にしていた人のほうが多かったのかもしれない。当時は雑誌出版が大変盛んであり、マテイコ作品の版画や写真も雑誌に掲載されていた。例えば、1865年に《スカルガの説教》がパリで金賞を受賞すると、ワルシャワの週刊誌『ティゴドニク・イルストロヴァニ』*Tygodnik Ilustrowany*は木版画による絵の模写とマテイコの似顔絵、彼の簡単な略歴を掲載した。また、1878年以降は、マテイコの秘書ゴシュコフスキによる作品の解説も出版されている。本論文ではこれ以上詳細には扱わないが、人々がどのような方法でマテイコの作品に接していたのかという問題は、マテイコの絵画が当時のポーランド社会に及ぼした影響を検討する上でも重要となるだろう。

また、マテイコ作品の国際的評価については、外国の諸都市で展示が行われたという上に挙げた事実に加え、以下に掲載する受賞歴や所属美術アカデミーについての情報を客観的資料として提示するととどめる。ただし1点だけ述べておくと、パリでの受賞が相次いだ比較的初期の作品に比べ、《グルンヴァルトの合戦》以降の作品は賞賛よりも批判の声が多く聞かれるようになった。すでに印象派や後期印象派が現れていた西欧美術の流れの中で、マテイコの歴史画は時代錯誤の様相を呈していったのである。

[受賞歴]

1865年 パリ・サロンで金賞——《スカルガの説教》

1867年 パリ万国博覧会で第1級金賞——《レイタン》

1870年 パリ・サロンでレジョン・ドヌール勲章——《ルブリン合同》

1878 年 パリ万国博覧会で大金賞——《ルブリン合同》《1521 年クラクフにおいて大聖堂鐘楼にズィグムント王の鐘を設置する》*Zawieszenie dzwonu Zygmunta na wieży katedry w 1521 r. w Krakowie*(1874)、《ヴィルチェック伯爵の肖像》*portret hr. Wilczka* (1876) ⁸⁹

1893 年 シカゴ万国博覧会で金賞——《ヴェルニホラ》*Wernyhora* (1883-1884)

〔所属美術アカデミー〕

ウィーン美術アカデミー会員 (1867)、パリ芸術アカデミー通信会員 (1873)、ベルリン・アカデミー会員 (1874)、ウルビーノ・ラファエロ・アカデミー会員 (1878)

⁸⁹ *Wacław Wilczek podczas obrony klasztoru w Trzebicach*と同一作品だと思われる。

第2章 マテイコと公的機関

前章ではヤン・マテイコの画家としての生涯を概観したが、本章以降はこの論文の本題——公的な場におけるマテイコの姿がいかなるものであったか——を扱う。本章では、クラクフ及びガリツィアで行われた、マテイコに関連する公的な行事及び出来事を7つ取り上げる。これらの詳細を明らかにすることで、マテイコが公的機関とどのような形で関係を持っていたのかが浮かび上がってくるはずである。とりわけ、マテイコが公的機関からどのような存在として扱われていたのか、それに対し、マテイコ自身は公的な場においてどのように振舞っていたのか、といった点を考えることができるだろう。

1. プラハ美術アカデミーとクラクフ美術学校

1873年3月、マテイコは妻テオドラと共にプラハを訪れた。これは前年に完成した《ブスコフのバトリ》がプラハで展示されるのに合わせた訪問であり、マテイコは現地で熱烈な歓迎を受けたという。しかしながら、父の祖国での滞在は、マテイコがおそらく予想もしなかった結末を迎えることになった。つまり、プラハ美術アカデミーの学長に就任してほしいという提案をチェコ側から正式に示されたのである。

もしもマテイコの出自を知らなければ、ポーランドの代表的な歴史画家である人物が、異国の美術アカデミーの学長になるか否かの決断に、丸1ヶ月を要したというのは少々意外かもしれない。マテイコはチェコ側からの提案に対し、どのような返答をしたのだろうか。以下にその書簡を紹介する。

拝啓

1ヶ月間思い悩みました末、私をプラハ美術アカデミー学長に指名して下さった委員会の代表者である貴方様にお手紙を差し上げております。チェコの方々に対する私の清算とでもいえるようなこの手紙の用件を、然るべき方にお伝えください。

皆さんが満場一致で熱心な訴えをされたことから、心から喜んで私を迎え入れてくださるだろうことが察せられますし、このことから、私が要求するであろうすべてのお願いを、皆さんが無条件で受け入れてくださるだろうと納得させられました。私が祖国を離れることに対する報酬が高額なものとなるように、皆さんが奔走して下さったことは承知しております。それは、私の祖国では今までに何によっても保証されたことのない、私と私の子どもたちの将来の基盤となるでしょうし、さらには経済的な保証ともなるかもしれません。また、私が皆さんの仲間に入ることによって、美術分野においていわば分散しているスラヴの力が統合されるであろうことも心得ております。そしてもちろん、私個人のチェコ民族寄りの立場が——それは私が止めることができず、感じずに

はいられない共通の血が同時に脈打っていることによってさえ説明されているのです——皆さんにとって親近感のあるものだということも、存じ上げております。魅力的に映る他のいかなる経済的条件以上に、まさにこの血の共通性というものが、自分の正しき故郷との断絶——故郷を去ることは結果的に私の家族全員の国外移住を意味するのです——を招く非常に危険な誘因となりうるのです。

今日チェコの方々に対して抱いている友愛の念を、私はこの先ももちろん持ち続けたいと思っておりますが、私の愛情が注がれるべきなのは、祖国であるポーランドなのです。他に余地のない私の選択はしたがって、この点に依拠しているのです。この選択の非情さの根底には、大変近い2つの民族が持つ共通の利益を、永遠に一体化することのない分裂状態に置いた歴史の宿命というものが、わずかに存在しているのかもしれませんが、あるいはまた、私たちポーランド人にしばしば見受けられる排他主義が、多少は作用しているのかもしれませんが。これが外交的に好ましくないということは否定しませんが、一方でこれは、惨めではありますが自分自身のものである埴生の宿への無限の愛着の印であって、この愛着心は、埴生の宿をいかなる富よりも優越させるのです。たとえそれらの富が、皆さんの富と非常に親近性のある類似したものであったとしても、事情は変わりません。

私の率直な態度に対し、皆さんは憤慨されるかもしれませんが、このようにご返答が遅れてしまったとしても、皆さんは私の態度を尊重せずにははいられないでしょう。ご返答が遅れましたことは、私の言葉が表明可能となる前に、長い感情の闘いがあったことの証拠に相違ないのです。

皆さんのご計画と、民族の芸術のために捧げられた犠牲とに、神の祝福がありますように。それらが実を結ばないことはない、私は強く信じております。母国の状況や必要を私より良く心得ており、もしかすると、私より大きな幸福をもたらしながらチェコの芸術を導くであろう、偉業を成すことのできる方々を、皆さんはご自分の国の中にお見つけになるでしょう。私はチェコの芸術に対する共感を、遠くからではありますが抱くことでしょうし、皆さんが私にそうすることを要求すれば、いつでも助言あるいは行動によって、皆さんをお助けすることができます。私が今書いていることを公表した後、私の決断の本当の理由を理解した上で、私が皆さんに対する友情を今後何時も失わないのと同様に、皆さんも私に対する友情を失わないで頂ければ幸いです。尊敬する貴方様、私から真の尊敬の保証をお受け取りください。私はこれを保証すべく、尊敬の念を抱き続ける最も誠実な僕でありたいと思います。

1873年5月17日 クラクフにて

ヤン・マテイコ⁹⁰

⁹⁰ Gorzkowski, s. 65-66.

マテイコはこの書簡でプラハ美術アカデミー学長職を断り、祖国ポーランドの画家として生きる決意をした。しかしそこに至るまでには彼の心に激しい葛藤があったことが分かる。まず、マテイコにプラハ美術アカデミーの学長職を提案するにあたって、チェコ側がかなりの好条件を提示したことが窺える。定職を持っていなかった当時のマテイコにとって、自らの経済的基盤と社会的地位を保証するチェコ側の申し入れは、少なからず魅力的に映った。しかし、マテイコの決断にとって非常に大きな問題だったのは、この点ではない。

彼には自分の父から受け継いだチェコの血が体内を流れている。にもかかわらず、彼にとっての祖国は自らが生まれ育ったポーランドである。マテイコはこの 2 つの事実を天秤に掛けて、1 ヶ月間も思い悩んだ。最終的には、「私の愛情が注がれるべきなのは、祖国であるポーランドなのです」という結論に達したが、この書簡からは、彼のチェコに対する思い入れが非常に強いものだったということが分かる。

マテイコがこの書簡によってプラハ美術アカデミー学長職を固辞したことは、クラクフで大いに歓迎された。クラクフ市は 5 月 19 日、マテイコの決断を称える特別な祝宴をサスキ・ホテル⁹¹で開催した。出席者にはピョートル・モシンスキ伯爵⁹²、マテイコの恩師ユゼフ・クレメルらがいた。彼らからの祝福の言葉に対し、マテイコは「クラクフ美術アカデミー」設立への努力を惜しまないようにと述べた。このマテイコの発言には少し説明を加えなければならない。

マテイコにチェコ側からプラハ美術アカデミー学長職就任の提案があったちょうどその頃、ウィーンの中央政府がガリツィアの自治政府に対し、現行のクラクフ美術学校を廃止する計画を持ちかけていた。マテイコが望んだのは、クラクフ美術学校の廃止を阻止し、さらに美術学校の「アカデミー」への改組を実現させることであった。その目的のために、先のプラハ美術アカデミー学長職の件を利用したともいえるのである。つまり、自分はチェコ側から提示された好条件の学長職を断ってまでポーランドに残ることにしたのだから、何としてもクラクフ美術学校を守り、発展させなければならない、という論法である。

ガリツィア自治政府はマテイコの意を酌み、ウィーンの中央政府に対して積極的な働きかけを行った。中央政府は、これまで技術学校の一部であったクラクフ美術学校を独立させ、新たな校舎を建設することに素早く同意した。そして、新校の校長としてマテイコを指名したのである。ただ、学校に対する予算の増額は認められず、美術学校はあくまでも教師の養成学校と位置付けられ、アカデミーへの改組も結局 1900 年まで先延ばしされた。1873 年 8 月 30 日、マテイコはクラクフ美術学校長に就任し、以後自身が死去するまでの 20 年間、さまざまな困難にぶつかりながらもこの職を離れなかった。

プラハ美術アカデミー学長職を断ったマテイコの決断は、その後の彼自身の人生のあり

⁹¹ Hotel Saski: 現在スワフコフスカ通り 3 番地 (ul. Sławkowska 3) にあるホテル。当時のサスキ・ホテルは今日よりも大きく、聖トマシュ通りに沿って、聖ヤン通りに至るまでの建物であった。マテイコに敬意を表する祝宴が行われたのは、聖ヤン通りに面していた「サスキ・ホール」Sala Saska。このホールは当時、様々な祝宴や式典、著名な作曲家らのコンサートが行われる場所であった。

⁹² Piotr Moszyński (1800-1879) : 収集家。慈善家。マテイコがクラクフ美術学校長に就任するよう尽力した。

方を決するものとなった。また、同時代の公的な場で、マテイコが愛国的人物としてよりはっきりと認識される契機となったことだろう。

2. 「王^{おうしやく}笏」授与式

1878年10月29日、クラクフ市は、1人の画家に^{しやく}笏 berlo（参考図版C）を授与するという前代未聞の式典を開催した。笏は権力の象徴であり、とりわけ王権のシンボルであることが多い。クラクフ市からこの一風変わった寄贈品を受け取ったマテイコは、超大作《グルンヴァルトの合戦》を描き終え、40歳を迎えていた。

この日、式典の出席者たちは、ヴァヴェル大聖堂で行われた特別な礼拝に参加した後、完成したばかりの《グルンヴァルトの合戦》が展示されているクラクフ市庁舎⁹³へと厳かに移動した。式典ではまず、マテイコに笏を授与することを定めた決議書が、市議会秘書により正式に発表された。以下にその全文を紹介する。

クラクフ市議会は、われわれの同胞ヤン・マテイコが、ポーランド民族の芸術、ポーランド史、そしてわが市に対して行った以下の功績を評価して、次のことを決定した——クラクフ市民であるヤン・マテイコに芸術領域における支配の象徴としての笏を贈呈する。

1. 絵画芸術の領域において、ポーランド民族がかつて到達したことの無い高みに登りつめ、文明世界の審判の前で、芸術分野における全人類的仕事の巨匠として輝いたこと。
2. 自らのために獲得した尽きることのない名声により、わが民族の名誉と栄光をさらに大いなるものとし、わが民族に生命及び活力が存在するという、揺るぎない証拠を提示したこと。
3. 芸術家として、民族の巨匠として、《ピョートル・スカルガ》、《ルブリン合同》、《ステファン・バトーリ》、《グルンヴァルトの合戦》などの自らの不朽の名作において、ポーランド史の1頁1頁を具現し、わが英雄たちの姿を蘇らせたこと。また、彼らの不滅の功績を再現し、ヨーロッパが認めた天才的技量によって、国内外にわが民族の輝かしくかけがえない過去を新たに提示したこと。
4. この全ポーランド民族の偉人は、ポーランド全土からの謝意を受けるに値するが、わけても当人が生まれ育った都市からの謝意を受けるに値すること。彼は、わが都市で完成させた自らの記念碑的作品によって、この都市の歴史に光に満ちた新たな1頁を追加した⁹⁴。

マテイコに対し異常なまでの賛辞を呈したこの決議書からは、クラクフ美術学校長とし

⁹³ ヴィエロポルスキ邸 Pałac Wielopolskich（pl. Wszystkich Świętychにある）のこと。クラクフ市当局の本拠地。

⁹⁴ Gorzkowski, s. 121.

てすでに 5 年間職務を遂行し、《グルンヴァルトの合戦》を完成させたマテイコが、ポーランド社会にとって非常に特別な存在となっていたことが窺える。彼がクラクフ市民の、さらにはポーランド民族の誇りとして特別扱いされる理由としては大きく 2 つあるだろう。1 つは、マテイコの技量が国外でも認められており、世界に誇るべき人物だという点である。マテイコはすでに、国外の国際的展覧会で上位の賞を獲得してきた。とりわけ、この式典が開催される前、パリ万国博覧会に出品した《ルブリン合同》、《1521 年クラクフにおいて大聖堂鐘楼にズィグムント王の鐘を設置する》、《ヴィルチェック伯爵の肖像》が大金賞を受賞している。もう 1 つの理由としては、マテイコがポーランドの過去の功績を描き、それを国際社会に披露しているという点であろう。マテイコは美そのものを追求した画家とはいえないであろうし、革新的な芸術運動を行ったというわけでもない。そのような画家が、「芸術領域における支配の象徴としての笏」を受け取ったのである。当時国を持たない民族にとって、自分たちが固有の歴史を持っていることを示す行為が、いかに大きな意味を持っていたのかと、つくづく思い知らされる。

式典ではこの後、クラクフ市長ミコワイ・ズィブリキエヴィチ⁹⁵が演説を行い、式典の前にヴァヴェル大聖堂で聖別された笏を、演説の終盤でマテイコに手渡した。そして、マテイコ本人が参列者を前にして以下のような言葉を述べた。

われわれは、これまで成し遂げられてきた数々の事実の中に、太古の昔に刻まれた神のおぼしめしを読み取ることができます——神の御手によって宿命の書に記されたそのおぼしめしは、民族の伝統の中に不可思議にも織り込まれているのです！ かつて、我々の先祖たちが自由選挙で選出した歴代の王たちは、この町の王城で自らの王権の象徴を受け取りました——それが王笏です！ それゆえ彼らは、いわば王都への感謝の気持ちに動かされ、まるで自らの王権を分かち合うように、この町の威厳ある官吏に王笏を使用する権利を与えました。われわれの王たちは、この町に 1 つの施設を創設し、そこでは権力が民族における知的な面での支配を確立することを承認した上で、国王の威厳を表すに相応しい記章でその施設を飾りました。つまり、クラクフ・アカデミー⁹⁶の盾に王笏を描いたのです。今日、空位期にあります！ そのため、現在の国王不在期においてこの町と民族の代表者である諸君が、まるで以前の自由選挙でのように、諸君の言うところの巨匠を、王権の象徴で、伝統的な王笏で飾っているのです。なぜなら、王笏には祖国の悲しくも素晴らしい歴史が刻まれているのですから！

われわれが詩人の予感を信じるなら、この瞬間は必ずや、われわれのユリウ

⁹⁵ Mikołaj Zyblikiewicz (1823-1887): 1874 年から 1880 年の間クラクフ市長を務めた。1861 年にガリツィア国会議員となり、ガリツィアの学校や役所へのポーランド語の導入に尽力した。オーストリア帝国議会の下院議員でもあり、ポーランド人議員クラブの会長も務めた。1880 年からガリツィア国会議長となるが、ガリツィア総督アルフレド・ポトツキと対立して職を追われた。マテイコに対して好意的に接し、マテイコは彼の肖像画 *Portret Mikołaja Zyblikiewicza* (1887) を残している。

⁹⁶ ヤギェロン大学のことを指す。ここでは同大学の校章について言及している。

シュ⁹⁷の史観を想起させるに違いありません。私の民族は今日、自らの精霊王をポーランド芸術の中に認めたのではないのでしょうか！ 諸君はその精霊王に王笏を授与することにより、迫り来る歴史の変化を感じ取ることを彼に許しているのです——その変化とは再生です！ 私には遠くに見えています！ 再生を出迎えるべく、心を込めた叫び声が私の口から出ようとしています。ズィグムントの鐘の青銅の胸板が発する唸りにも似た諸君の賛同によって承認していただきましたので、それでは、「万歳！」⁹⁸。

式典の主催者側には、マテイコに特別な敬意を表することで、公的に愛国心を表明するという意図はもちろんあっただろうが、マテイコの演説には彼らですら啞然としたという⁹⁹。スウォチンスキが誇大妄想と表現するこの演説からは、マテイコが自分自身をどう捉えていたかが窺える。彼は市から贈呈された笏を、王権の象徴として、つまり「王笏」として理解した。「王笏」を授与された自分は、現在の空位期において民族の精神を支える国王なのであり、ポーランドを再生へと導くために選ばれた。マテイコはこのように考えていたのではないかと思われる。

式典はというと、マテイコの恩師ウシュチュキエヴィチが続いて演説したあと、最後にマテイコが、笏を美術学校に寄贈することを表明した。祝祭はこれだけでは終らず、同日午後 16 時から豪華な晩餐会が開かれた。祝祭を締めくくったのは、晩餐会の後に行われた観劇であった。晩餐会の参加者全員で劇場パレparé¹⁰⁰へ移動した。特別な装飾が施された満員の劇場でアレクサンデル・フレドロ¹⁰¹の作品が上演され、さらにマテイコの《マチコ・ボルコヴィツ》*Maćko Borkowic* (1873) と《スタンチク》*Stańczyk* (1862)¹⁰²に基づく活人画が催された。劇場から出たマテイコは、若者たちによる行進と盛大な拍手で自宅まで見送られた。

ところで、マテイコに笏を贈呈する式典には、いわゆる貴族階級の者が誰も参加しなかった。スウォチンスキが指摘しているように、一部の保守派知識人らは、この式典を大げさな愛国的示威行動であるとみなし、式典をボイコットした¹⁰³。彼らは式典に招かれな

⁹⁷ ポーランド・ロマン主義時代の詩人ユリウシュ・スウォヴァツキJuliusz Słowacki

(1809-1849) のこと。この後に言及される精霊王とは、スウォヴァツキの長編詩『精霊王』*Król-Duch* (1845-1848) に由来すると思われる。この作品や彼の史観についてなど、詳細は説明できない。ただ、ロマン主義時代のポーランド文学では、ポーランドの再興を、精霊の進化論的な発展の過程に位置付けて説明することがあった点を指摘しておく。

⁹⁸ Gorzkowski, s. 122-123.

⁹⁹ Słoczyński, s. 143 参照のこと。

¹⁰⁰ 所在地などの詳細は不明。

¹⁰¹ Aleksander Fredro(1793-1876): ポーランドの代表的な喜劇作家。代表作に『復讐』*Zemsta* (初演 1834 年)がある。詩人。ガリツィア国会の議員でもあった。

¹⁰² 正式には《スモレンスク喪失の一報が入った時の、王妃ボナの宮廷舞踏会におけるスタンチク》*Stańczyk w czasie balu na dworze królowej Bony, kiedy wieść przychodzi o utracie Smoleńska*などの題名がある。スタンチク (1480-1560 推定) は実在した宮廷道化師であり、ヤギェロン朝時代にアレクサンデル・ヤギェロンチクAleksander Jagiellończyk、ズィグムント 1 世、ズィグムント 2 世アウグストといった国王に仕えた。

¹⁰³ Słoczyński, s. 143 参照。

ったのではなく、式典への参加をあえて拒否したというわけである。これは当時ガリツィアの政治に大きな影響力を持っていたスタンチク派¹⁰⁴の政治思想に関連してくる問題であろう。

3. 《プロイセンの臣従》をガリツィアに寄贈

1882年10月6日のゴシュコフスキの記録は、以下のように始まっている。

10月6日、マテイコはこの時行われていた国会に用事があり、不意にルヴフへと旅立った。彼がクラクフを立った理由については誰も知らなかったし、マテイコは私にも自分の旅行の意図について話さなかった。つまり、マテイコの行動には何か秘密があった。そのため、《プロイセンの臣従》が改修後のヴァヴェル王城に収められるという条件で国家に寄贈されるという知らせが新聞各紙をにぎわせた時、皆がどんなに驚いたことか¹⁰⁵。

《プロイセンの臣従》は《グルンヴァルト》に続く大作として、マテイコが1880年1月から制作を開始し、2年後の1882年4月によりやく完成させた。このゴシュコフスキの記録からもうかがえるように、マテイコがルヴフの国会において、この絵を改修後のヴァヴェル城に展示するという条件でガリツィアに寄贈することを宣言すると、一大ニュースとして社会に報じられた。特に、現地ルヴフでは街中に華やいだ雰囲気があったようである。以下に再びゴシュコフスキの記録を紹介する。

《プロイセンの臣従》寄贈の知らせはルヴフですぐに街中に広がり、その熱狂ぶりは並外れたものであった。マテイコに敬意を表する祝宴や晩餐会は非常に豪華なもので、地元の新聞にはそれらについての詳細な報告が掲載されている¹⁰⁶。

¹⁰⁴ *Stańczycy*: 西部ガリツィアの士族や高位役人を中心とした保守的な政治家集団。1869年、クラクフの政治文芸月刊誌『プシェグロント・ポルスキ』*Przegląd Polski*において、『スタンチクの鞆』*Teka Stańczyka*という風刺文芸作品を連載し始めたことから、スタンチク派と呼ばれるようになった（スタンチクについては注釈103を参照のこと）。この作品はガリツィアの政治状況を手紙形式で風刺したものである。彼らは愛国主義的示威運動や蜂起に反対し、オーストリア政府に対し従順になることで、ガリツィアの自治権を維持・拡大しようとした。自治を享受している環境の下で、ポーランド社会を教化することを目指す一方、地主と農民の支配関係を安定化させることも目的としていた。ガリツィアの政界やオーストリア帝国議会のポーランド人議員クラブで多数を占めた。スタインチク派は当初ガリツィアの愛国主義的示威運動に反対し、逆にオーストリアが主催する式典などを支持したという。

彼らの歴史観はミハウ・ボブジンスキ *Michał Bobrzyński* (1849-1935) の『ポーランド史概観』*Dzieje Polski w zarysie* (1879) にまとめられ、クラクフ歴史学派と呼ばれる潮流を形成した。スタンチク派の主な人物には、後出のスタニスワフ・タルノフスキ、前出のユゼフ・シュイススキの他、スタニスワフ・コジミヤン *Stanisław Koźmian* (1836-1922) らがいた。クラクフの政治情報日刊紙『チャス』*Czas* はスタンチク派の機関紙とされる。彼らの思想がマテイコにどのような影響を与えたのかについて議論されることも多い。

¹⁰⁵ *Gorzkowski*, s. 231.

¹⁰⁶ 同上。

国内での大きな反響は、ついに行政機関を動かした。ガリツィア政庁は、1882 年 10 月 11 日付けの以下のような文書でガリツィア国会に対し緊急の提案を行った。

巨匠ヤン・マテイコがガリツィア国民に素晴らしい贈り物を寄贈したことにより、国の代表者全員がこの寛大な贈り主に対する感謝と敬愛の念を即座に露にするに至りました。この感情の表明は、わが国全土のみならず、遠く離れた国外からも心からの熱烈な賛同を得たのです！ わが国と全国民は、この寄贈品の重要さと、《プロイセンの臣従》の不滅の制作者に誠に驚くべき物惜しみのなさや克己心とを伴うこの行為を行わせた動機の高潔さを評価する能力があるのです！ わが国と国民はヤン・マテイコをすでに自らの最も偉大なる第一線の芸術家の 1 人として位置付けてきましたが、この度は彼を功労のあった市民の 1 人として記録し、《プロイセンの臣従》をポーランド芸術の傑作としてばかりか、ポーランドの市民的美德を雄弁に物語る証拠として、永久に誇りを持って語り継ぐことでありましょう！ しかし、わが国は巨匠からこのような贈り物を受け取ったことで、それに報いる義務も受け入れたのです！ 祖国愛に基づいて自らの傑作の中から最良のものを祖国のために捧げたこの偉大なる芸術家は、国に対して犠牲的精神の模範を示したのであり、これに対し何もなしに済ますことは不可能で不適当なのです！ この寛大な芸術家の例にならって彼の示した方向に向かうこと、彼の寛大な意図が完全に理解されたことを記念的な行為によって示すこと、さらに、彼が従事している芸術は自身の名声と国民の名誉をこれほどまでに高めているが、その芸術を国内に一層高潔に普及させるための機会を彼に与えること——私たちの考えでは、これらが巨匠の偉大な市民的行為に対して報いる唯一の方法であり、偉大なる芸術家と国にふさわしい唯一の方法なのです！ このような意図と動機に基づき、ガリツィア内閣は国会に対し以下のことを採択されるよう提案します。

1. クラクフ美術学校を優秀な成績で卒業し、さらなる学問を修める目的で国外に赴くことを望んでいる同校の学生を対象に、年間 1000 ズウォティ・レンスキ¹⁰⁷のヤン・マテイコ記念奨学金を創設する。そのためヤン・マテイコがクラクフ美術学校長である間、金 1000 ズウォティ・レンスキを 1883 年から毎年国家の資金予算案に含めることとする。
2. ヤン・マテイコがクラクフ美術学校の校長である間、この奨学金を贈与する権利はヤン・マテイコにあるものとする。
3. この奨学金の贈与、期間、充当、損失などに関する詳細については、内閣がヤン・マテイコとの合意後に定めるものとする。

ガリツィア・ロドメリア王国及びクラクフ大公国における政庁評議会より

¹⁰⁷ złoty reński: 当時のオーストリア＝ハンガリー帝国の貨幣。グルデン guldenとも呼ばれた。1892 年からはコ罗纳（クローネ）に取って代わられる。

1882 年 10 月 11 日 ルヴフにて
ガリツィア国会議長 ミコワイ・ズィブィキエヴィチ
政庁構成員オクタフ・ピエトルスキ¹⁰⁸ 報告¹⁰⁹

ガリツィア政庁はこの文書で、マテイコに対して謝意を表明すべく、マテイコの名を冠した奨学金の設立を提唱した。「王笏」授与式でのクラクフ市の文書と同様に、ここでもマテイコを称賛する文句が並んでいる。しかし先程とは違い、ここでのマテイコはガリツィアという国が誇る人物として扱われていると思われる¹¹⁰。また、第 3 章で詳しく扱うが、この文書が発表された 3 日後の 10 月 14 日、ウィーンで行われていた《プロイセンの臣従》展覧会を、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世が訪れている。そして 10 月 18 日、クラクフ市議会が特別会議で次のような決定を下すに至った。

クラクフ市議会は市長の提案により、巨匠・芸術家・クラクフ美術学校長であるヤン・マテイコ氏を、首都であり王の町であるクラクフ市の名誉市民とすることを満場一致の賛成の喝采をもって決定した。また部長各位に対し、ヤン・マテイコ氏に名誉市民証書を手渡す際、市長に同伴する権限を与えた¹¹¹。

クラクフ市議会はこれに加え、クラクフ美術学校周辺の広場を「マテイコ広場」plac Matejki と名付けることを決定している。

マテイコがポーランドの栄光の歴史を描いた作品を国家に寄贈し、さらには当時オーストリア軍の支配下にあったヴァヴェル王城にその作品を展示するよう条件を付けたこと、公的機関がマテイコに謝意と敬意を表するために幾つかの特別な決定を行ったこと——これらいずれもが、愛国心を公的に表明する手段として機能した。

ところで、マテイコがヴァヴェル城にこの絵を展示することを条件としたのは、ヴァヴェル城改修作業の早期実施を訴えたかったためである。クラクフにおける文化財の修復・保護作業に生涯にわたって携わってきたマテイコが、いかに強い意志を持ってその作業に臨んでいたのかが窺える。《プロイセンの臣従》は、次に紹介する「マテイコ記念祭」に際し、ヴァヴェル城に展示されることになった。

4. マテイコ記念祭

1883 年、マテイコがクラクフ美術学校を卒業して画家としての道を歩み始めた 1858 年

¹⁰⁸ Oktaw Pietruski (1820-1894) : 1861 年からガリツィア国会議員となり、1862 年から 1890 年の間、ガリツィア政庁の構成員となる。ガリツィアの自治獲得に尽力した。

¹⁰⁹ Gorzkowski, s. 231-232.

¹¹⁰ この文書では、先程は民族と訳した *naród* という語を、国民と訳すことにした。ガリツィア政庁が *naród* という語を使う時、ポーランド人だけでなく、ウクライナ人なども含めた「ガリツィア国民」を念頭に置いていると思われるためである。

¹¹¹ Gorzkowski, s. 232.

から、25 年間が経過した。クラクフ市はこの節目の年に合わせ、9 月に「マテイコ記念祭」を開催することを企画したのである。ヴァヴェル城での「マテイコ展」の開催などが主要企画として予定された。さらにアルトゥル・ポトツキ¹¹²を議長とする特別委員会は、記念祭の一環として、マテイコの新作《ウィーンのソビエスキ》を一般からの寄付金でガリツィア国のために買い上げ、それを 1879 年に創立されたクラクフ国立美術館に収蔵することを計画した。この作品は、マテイコ記念祭と同時期にウィーンで行われる「ウィーン解放記念祭」で展示されることになっていた¹¹³。一般からの寄付金は順調に集まり、買い上げ実現に向けて期待が高まっていた。

かくして 9 月 13 日、クラクフではマテイコ記念祭が開幕した。ゴシュコフスキが記録した当日のプログラム¹¹⁴によると、まず午前 10 時にヴァヴェル大聖堂での礼拝が執り行なわれた。11 時、ヴァヴェル城回廊でマテイコに対する賞状と記念メダルなどの記念品が授与された。回廊には招待された者しか入れなかったが、中庭には誰でも自由に入ることができた。12 時、ヴァヴェル城の広間で「マテイコ展」の開会式が行われた。そこには、マテイコの作品約 100 点が完成年代順に展示された。ヴァヴェル城は依然としてオーストリア軍によって占拠されていたが、このときは特別に広間の利用が許可されたのである。14 時までは記念祭の委員会によって招待された者のみが展覧会に入場できた。夕方 19 時には記念演劇が催された。

一方、アルトゥル・ポトツキが主導する《ソビエスキ》の買い上げ計画は、寄付金も集まり順調に事が運んでいるかのようにみえた。しかしながら、この計画は見直しを迫られることになる。アルトゥル・ポトツキは、《ソビエスキ》のその後の扱いに関する驚くべき構想をマテイコ本人から告白されていた。マテイコはこの作品を、ヴァチカンのローマ教皇へ贈呈しようと考えていたのである。マテイコがこの案を公にすると、寄付に協力した者からの抗議が殺到した。そこで特別委員会は以下のような文書を発表した。

ヤン・マテイコが委員会とは無関係に、また予期せぬ形で絵画をヴァチカンへの寄贈品としたことにより、委員会は 9 月 13 日会合を開き、次の決議を採択した。

委員会が所有し責任を負っている^{きとぎん} 釀金による基金が当初の目的を失ったことを考慮して、また、集められた目的のためにこの釀金を使用することは委員会の義務であることを考慮して、次のことを決定した。

1. マテイコに対し、釀金による基金を対価として国立美術館のために《ウィーンのソビエスキ》の模写を描くことを要求する。
2. それが不可能である場合、すでに集められ、いまだ集めることになっている釀金による基金の対価として、国立美術館のために別の記念碑的歴史的 content の作品を要求する。

¹¹² Artur Potocki (1850-1890)：伯爵。オーストリア帝国議会貴族院議員。金融関連のさまざまな機関で総裁を務めた。

¹¹³ 詳細は次章 4. 参照のこと。

¹¹⁴ Gorzkowski, s. 262 参照のこと。

3. さらなる醵金の集金は中止しない。
4. ただし、以上の決議に賛同せず、自らが寄付した醵金の返還を要求するすべての者に対し、その醵金を返還するものとする。委員会は醵金返還の申し出期間を 11 月 1 日までと定める。

委員会代表 伯爵アルトゥル・ポトツキ¹¹⁵

マテイコは《ソビエスキ》の模写を描くことには同意せず、代替作品を制作することを約束した。ただ、彼はこの約束をすぐに果たさねばならないとは考えていなかったようである。代替作品として《ラツワヴィツェのコシチュシュコ》を描くことを公表したのはこの 4 年後のことであり、この絵が正式に国立美術館に収められたのは、さらにもう 1 年後のことであった。

《ソビエスキ》をローマ教皇に寄贈するというマテイコの考えは、委員会にとって全く寝耳に水であったことが、この文書から窺える。マテイコの絵画を一般からの寄付金で買い上げ、国立美術館に収蔵するという政界側の計画は、やはり愛国心を表明する方法として捉えることができるだろう。この計画がマテイコ独自の考えによって頓挫してしまった。マテイコの行動は、公的機関が彼に期待する愛国的行為の在り方と、常に一致したわけではなかったのである。

5. ローマ教皇庁への使節団

こうして《ウィーンのソビエスキ》を教皇庁に寄贈するための準備が進められることになったわけだが、この企画は多くの議論を呼んだとスウォチンスキは述べている¹¹⁶。その理由は、教皇の^{ふかびゅうせい}不可謬性についての教義が発表されて間もない時期にあって、ポーランド社会が教皇庁に対してどのような見解を持つべきかが、当時広く問われていたからである。教皇に敬意を表することになるマテイコの企画に対して、世俗主義陣営は当然反感を抱いたが、重要なのは、一部のカトリック信者さえもが否定的な態度を示した点である。カトリック信者であると同時に愛国主義者である彼らにとっては、これまで教皇庁が行ってきたポーランドの利益に資さない政策を無視するわけにはいかなかった。つまり、教皇庁はポーランドの蜂起を支持しなかったという問題である。また、当時の教皇レオ 13 世が推し進める、カトリックと正教の和解に向けた動きは、ポーランド人の利益を犠牲にして行われるように思われた。ポーランドが愛国主義を表明するにあたって、マテイコが重要な役目を果たしていると考える者は、彼が教皇の前で跪くことが、ポーランドにとっていかに屈辱的行為となるかを恐れたのである。

マテイコへの風当たりは強まる一方であったが、ゴシュコフスキは、マテイコの意図が当時の社会にしっかりと理解されていなかったのだと憤っている。彼は以下のように述べ

¹¹⁵ Gorzkowski, s. 262.

¹¹⁶ Słoczyński, s. 164 参照。

ている。

しかしながら絵画《ソビエスキ》の話に戻ると、我々の社会一般は、この絵をヴァチカンに寄贈せねばならない理由を理解していなかった。ヴァチカンには世界中から教皇を訪れる人があるので、マテイコはそこに自分の絵を展示すると同時に、全世界にポーランド問題をも提示したのである。また、この絵はウィーン及び全キリスト教世界の解放はポーランドに負うべきであることを、現在だけでなく、幾世紀にもわたって証明するものなのである。さらに、もしこの絵がわが国だけに展示されるならば、遠隔地の者が誰 1 人としてそのことについて知ることがないかもしれない。そして最後に、ポーランド人芸術家の作品が、最良の芸術の殿堂に、ラファエロの作品のそばに収められれば、ヨーロッパにおいてポーランドの芸術を顕彰することにもなる。以上のことについて、当時誰 1 人として理解できなかったのである¹¹⁷。

マテイコは自らの企画を実行するにあたり、ヴァチカンへの使節団はポーランドを代表する著名な要人たちによって構成されるべきであると考えた。「ポーランド代表団」の性格を持つことになった使節団を構成したのは、代表者ミェチスワフ・レドゥホフスキ¹¹⁸に加え、スタニスワフ・タルノフスキ¹¹⁹、《ソビエスキ》の買い上げを企画した前出のアルトゥル・ポトツキ、ヴワディスワフ・ホトコフスキ¹²⁰、アウグスト・チャルトリスキ¹²¹などであった。チャルトリスキはローマで使節団に合流することになっていた。また、詳細は記述されていないが、マテイコの希望により、カトリック信者でおそらくポーランド人

¹¹⁷ Gorzkowski, s. 263.

¹¹⁸ Mieczysław Ledóchowski (1822-1902)：枢機卿。1866 年からは、当時プロイセン領だったグニェズノ及びポズナンの大司教（首座大司教）。文化闘争の時代、カトリック教会弾圧に抵抗し、1874 年から 1876 年まで獄中で過ごす。ポーランド社会から大きな支持を得た。1876 年にローマに移っている。

¹¹⁹ Stanisław Tarnowski (1837-1917)：伯爵。ポーランド文学史家及びポーランド文学批評家。時事評論家。スタンチク派の政治家。1867 年からガリツィア国会議員。1885 年からオーストリア帝国議会貴族院議員。1871 年から 1909 年、ヤギェロン大学で教鞭をとり、学長を 2 回務めた。1873 年からクラクフ学術アカデミー会員となり、1890 年から 1917 年には同アカデミーの会長を務めた。マテイコと親交があり、伝記『マテイコ』*Matejko* (1897)を残している。

¹²⁰ Władysław Chotkowski (1843-1926)：カトリックの聖職者。教会史学者。文化闘争時代に愛国的活動をしポズナンを離れる。1882 年からヤギェロン大学教授。1891 年から 1 年間、同大学の学長を務めた。クラクフ市議会議員及びオーストリア帝国議会下院議員。1900 年からクラクフ聖堂参事会の一員となる。政治社会問題も扱う説教師として有名になった。ヘウムノで出版されていた週刊誌『プシヤチェル・ルドゥ』*Przyjaciół Ludu*の編集長を 1875 年から 1880 年にかけて務めた。クラクフ学術協会通信会員、ポズナン学術愛好家協会 *Poznańskie Towarzystwo Przyjaciół Nauk*の会員（1918 年から名誉会員）、トルン学術協会会員（1902 年から名誉会員）。

¹²¹ August Czartoryski (1858-1893)：オテル・ランベール派の指導者であったアダム・イエジー・チャルトリスキ公 Adam Jerzy Czartoryski (1770-1861) の孫であり、ヴワディスワフ・チャルトリスキ公 Władysław Czartoryski (1828-1894) の息子。サレジオ会（ドンボスコ会）を創始したドン（ヨハネ）・ボスコと出会い、1887 年に同会の修道士となる。1892 年に司祭となったが 1 年後に逝去。2004 年 4 月 25 日、ローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世によって列福されている。

の農民と、東方帰一教会の信者でウクライナ人の農民それぞれ 1 名が使節団に加えられた。

先述したように、マテイコの企画はポーランドと教皇庁との関係の在り方に影響を与える微妙な問題であったため、マテイコは使節団への参加を依頼した政界の要人全員から快諾を得られたわけではなかった。5 年前、クラクフ市長としてマテイコに笏を授与したミコワイ・ズィブリキエヴィチは、この時ガリツィアの国会議長に昇格していた。マテイコは、自分に対して好意的であったこのズィブリキエヴィチにも、使節団への参加を依頼した。ゴシュコフスキはわざわざルヴフを訪れて説得にあたり、1 度は承諾を得られたものの、ズィブリキエヴィチは最終的に使節団に参加しなかった。また、参加を決めたスタンチク派のタルノフスキにしても、当初はこの企画を厳しく非難していた。

マテイコら使節団がヴァチカンへと旅立ったのは 1883 年 12 月 10 日である。そして 16 日、《ウィーンのソビエスキ》はポーランド民族からの贈り物として、教皇レオ 13 世に寄贈されたのであった。マテイコはこの時、教皇からピウス 9 世の勲章を授けられている。《ソビエスキ》はラファエロ作品の展示室のそばに収められた¹²²。23 日クラクフに戻ったマテイコは、自分の計画を達成して満足した様子であったという。

この一件からは、政治情勢を考慮して現実的な対応をしようとした政界側に対し、あくまでも自らの思想に基づいて計画を推し進めたマテイコの姿が見て取れるのではないだろうか。

ところで、スウォチンスキはこのマテイコの企画に関してさらに興味深い考察をしている¹²³。彼によると、教皇レオ 13 世は、自分の外交戦略のためにマテイコの一大企画をここぞとばかりに利用したというのである。まず教皇は、マテイコらの使節団を迎えるにあたり、国家の正式な代表者レヴェルの式典を行った。そして、《ソビエスキ》寄贈の式典を行った翌日にドイツ帝国の皇太子¹²⁴をもてなしている。驚くべきは、教皇がその後再びマテイコらポーランド人使節団を迎え入れたことである。つまり、ドイツ帝国の皇太子のもてなしは、マテイコらポーランド使節団の歓迎行事の最中に、合間を縫って簡単に行うという形にしたのである。教皇はドイツ帝国の公賓を冷たくあしらうこの行為によって、「文化闘争」を掲げて教会を弾圧するドイツに対し敵対心を表明した。したがって、《ソビエスキ》は絵の内容などのマテイコの意図とは無関係に、反ドイツを表明する道具となった。また、教皇がマテイコらの使節団をポーランドという 1 国家の代表として歓迎したことは、ポーランド問題が棚上げにされていた当時の欧州の国際情勢の中にあって大きな意味を持つとスウォチンスキは述べている¹²⁵。

6. コンスタンティンとメトディオスの記念祭

ローマ教皇への《ソビエスキ》寄贈という大企画を実現させたマテイコは、その 2 年後の 1885 年、新たなデモンストレーションを形にしようと再び奔走していた。今回は、7

¹²² 現在、ヴァチカン美術館の「ソビエスキの間」に展示されている。

¹²³ Słoczyński, s. 165 を参照のこと。

¹²⁴ おそらくヴィルヘルム 2 世 (1859-1941) のこと。

¹²⁵ Słoczyński, s. 165 参照。

月にモラヴィアのヴェレフрат¹²⁶で開催が予定されている、聖コンスタンティン（キリロス）と聖メトディオス¹²⁷の記念祭にまつわる企画である。この2人の聖人は両者ともスラヴ人の使徒であり、記念祭はメトディオスの没後千年を記念するためのものであった¹²⁸。

マテイコがこの記念祭に興味を示したのは、それがスラヴ人の祭典として位置付けられていたからである。プラハ美術アカデミー学長職固辞の件からも分かるように、マテイコは自分がチェコ系であるというアイデンティティを持っており、ポーランドとチェコが共有する「スラヴ」という要素を重要視していた。また、スウォチンスキも述べているが、マテイコの「歴史哲学」においては「ルーシ（ウクライナ）」というテーマが大きな意味を持っていた¹²⁹。彼は、当時緊迫していたポーランド人とルーシ人（ウクライナ人）との関係を立て直すには、「スラヴ」という理念を用いるのが良いと考えていた¹³⁰。さらにマテイコは、ミツケヴィチの思想にも影響を受けていたと言われる¹³¹。

マテイコは、スラヴの一体性という理念に即したヴェレフратでの記念祭において、ポーランドがスラヴの一員としてどのように存在感を示すことができるのか、また、この機会にポーランド人とウクライナ人の友好関係をどうにかしてアピールできないだろうか、といった点を熟考した。彼が最初に考案したのは、自らがコンスタンティンとメトディオスの絵（参考図版D）を描き、その絵をポーランドからの贈り物としてモラヴィアに贈呈することであった。さらに、その絵がモラヴィアの人々が集まるヴェレフратの教会に飾られれば、荘厳な雰囲気の中でポーランドの存在を訴えることができるだろうと考えた¹³²。この構想はクラクフ中で話題を呼び、政界にこの件を扱う特別委員会が発足している。その後、マテイコの構想はさらにスケールの大きなものとなった。まず自らが描いた両使徒の絵をヴァチカンに運び、ローマ教皇レオ13世による聖別を賜る。これをポーランド人とルーシ人合同の巡礼者たちがヴァチカンからヴェレフратまで運び、現地の教会に寄贈するという案である。

しかし、マテイコの計画に対する政界の反応は冷淡であった。ガリツィア政府だけでなく、ウィーンの中央政府までもが計画の実行に難色を示した。なぜなら、この「聖コンスタンティンと聖メトディオスの記念祭」が、ロシアとローマ教皇の思惑が見え隠れする政治色の強いものであったからである。記念祭への対応はしたがって、一国の外交政策に関

¹²⁶ Velehrad: チェコ南東部の都市ウヘルスケー・フラジシュチェの近郊にある。およそ9世紀頃に存在したモラヴィア国家の中心的な都市で、大司教座が置かれていた。コンスタンティンとメトディオスを祭る修道院及び教会があり、巡礼の地として有名。1990年には教皇ヨハネ・パウロ2世も訪れている。

¹²⁷ コンスタンティン（キリロス）とメトディオスの兄弟は、863年からモラヴィアでキリスト教の伝道を行い、すでにこの地に布教を行っていたフランク教会から独立した教会組織を作ることを使命とした。ヴェレフратは彼らの重要な活動拠点の1つであった。メトディオスは885年に死去している。

¹²⁸ この記念祭に関する本論文での説明は、すべてスウォチンスキに拠ったものである。筆者が詳細を確認しきれていないことを述べておく。

¹²⁹ Słoczyński, s. 171 参照。

¹³⁰ Słoczyński, s. 174 参照。

¹³¹ 同上。スウォチンスキは、当時マテイコがミツケヴィチ像の建設をめぐってクラクフ市と対立していたことに触れ、ポーランド・ロマン主義時代の大詩人アダム・ミツケヴィチ Adam Mickiewicz (1798-1855) の思想に強く影響されていたことを指摘している。

¹³² Gorzkowski, s. 292 参照。

わる大問題であった。スウォチンスキの解説によると¹³³、汎スラヴ主義を掲げるロシアは、以前から聖コンスタンティンと聖メトディオスを自らの理念の宣伝に用いてきたのであり、両聖人の記念祭がロシアの息のかかったものであることは想像に難くなかった。ハプスブルク帝国のスラヴ人の間に、ロシアの汎スラヴ主義が影響力を持つことを懸念していたウィーン政府にしてみれば、記念祭への参加のみならず、帝国内における記念祭の開催自体が好ましくなかった。ウィーン政府は、モラヴィアに伝染病が蔓延しているという真偽の定かでない事実を根拠に、マテイコが企画したヴェレフラトへの巡礼を禁止している。ポーランド側にとっても、ロシアが宣伝する汎スラヴ主義がポーランド人の利益になるものではないという認識が一般的であったため、記念祭への参加には慎重にならざるを得なかった。

さらに問題を複雑にしたのは、教皇の意図である。正教徒との接近を図ることを目指していたローマ教皇レオ 13 世は、コンスタンティンとメトディオスの両スラヴ人使徒を崇拝することを支持しており、ポーランドにも記念祭への参加を勧めていた。しかし、ポーランドと教皇の関係が良好でなかったことは、先の《ソビエスキ》の教皇寄贈問題で触れたとおりである。カトリックと正教徒との和解が国益に反すると考えたポーランド側は、教皇からの記念祭参加の勧めに応じなかった。

マテイコが以上のような政治的な問題をどの程度理解していたのかは分からないが、彼はただ自分の思想に基づく企画を形にしたかっただけである。ゴシュコフスキは、マテイコが最終的な企画案についてどう考えていたかを以下のように記している。

マテイコ自身はこの件を次のように考えていた。われわれポーランド人は、最も教養あるスラヴ族として、この祝祭のすべてを指揮して熱心に取り組むのが適当であろう。その際、自らの行為を宗教的儀式の範囲内に限定する。なぜなら、宗教以外のすべての事柄は自然と展開していくからである。したがって、この目的を達成するために、とりわけ、われわれポーランドの影響力がモラヴィアの人々の間で少しでも強いものであるためにマテイコが切望したのは、自分がヴェレフラトに寄贈する絵が、まず教皇自らの手によって聖別され、その後ポーランド人からの贈り物としてローマからヴェレフラトに送られることであつた。このほうがより美しいであろうし、また、スラヴ世界全土に轟く名声をわれわれにもたらすであろう。この絵がローマからヴェレフラトに送り届けられた後は、ポーランド代表団がそこに残り、その後の儀式に参加すべきであろう¹³⁴。

いずれにしても、今回のマテイコの企画は政界の協力が得られず破綻した。ただし、ウィーン政府によるモラヴィアへの旅行禁止命令が解除された後、マテイコは私的にささやかなデモンストレーションを行っている。2 使徒の絵はクラクフで聖別され、マテイコとあまり著名でない少数の政治家たちによってヴェレフラトの教会に運ばれた。プラトン・

¹³³ Słoczyński, s. 174 参照。

¹³⁴ Gorzkowski, s. 294.

コステツキ¹³⁵は、ルーシ系としてただ1人、マテイコに同伴している。

マテイコは今回の企画が政界や社会の支持を得られなかったことに落胆した。《ソビエスキ》の教皇への寄贈に際しても、公的機関の意図とマテイコの考え方との間にずれがあった。しかし今回はずれにとどまらず、マテイコの意向が公的機関に聞き入れられなかった。政治家ではないマテイコが、独自の思想に基づいて行動していたことを、この一件からも指摘できると思われる。

7. マテイコのガリツィア葬

1893年11月1日、ヤン・マテイコはフロリアンスカ通りの自宅で家族に見守られながら53歳の生涯に幕を閉じた。11月1日といえば、ポーランドで万聖節という祝日になっているが、どういうわけか生前のマテイコは、この祭日の頃の季節には毎年運がないと嘆いていた¹³⁶。以前から胃痛と精神的ストレスに苦しめられ、体調を崩しがちであったマテイコは、1893年10月31日に吐血し、非常に危険な状態に陥った。マテイコに付き添っていた医師たちは、吐血が始まったらもう最期だと宣告していたのである。家族や親戚が集まってくる中、神父による告解と終油の儀式が執り行われた。翌11月1日、マテイコは自宅に到着した末息子イエジーとセラフィンスキー家の姿を病床で認めた後、甥のアントニ・セラフィンスキとの会話¹³⁷を最後に眠るように息を引き取った。

マテイコと半生を共にした秘書ゴシュコフスキは、この日の夕方から遺族と共に葬儀に向けての準備に迫られた。ゴシュコフスキは遺族の同意を得た上で、マテイコの顔と右手の石膏型をとっている。棺に納めるマテイコの遺体には、彼が普段から好んで着ていた民族服チャマラ¹³⁸を着せた。翌2日には各方面に電報を打ち、マテイコの死を伝えた。マテイコの葬儀がどのような形で行われるのかについて、さまざまな憶測が飛び交っていた中、最初に葬儀を取り仕切る意向を示したのはクラクフ市であった。しかし、ゴシュコフスキと遺族はこの申し出を断り、自費で葬儀を行うことにした。なぜなら、生前のマテイコが文化財関連事業でクラクフ市と度々対立して頭を痛めていたからである。その後、クラクフ市長の使者がゴシュコフスキらを訪れ、彼らの決定がマテイコの遺言状に基づくものなのかを尋ねた。ゴシュコフスキは、マテイコとクラクフ市との対立が激しいものであったために、市長が心を痛めてこのような質問をするのだらうと述べている¹³⁹。次にこの使者は、マテイコの埋葬場所はスカウカ¹⁴⁰にするのかと尋ねた。この問に対してゴシュコフス

¹³⁵ Platon Kostecki (1832-1908)：ウクライナ系ポーランド人の記者、詩人。

¹³⁶ Gorzkowski, s. 480 参照。

¹³⁷ アントニがマテイコに対し「おじさん、ご安心ください。」 „Niech się wuj uspokoi” と声をかけると、マテイコは「うん、安心したいさ。」 „Tak, chcę się uspokoić” と答えた。これがマテイコの最後の言葉である。

¹³⁸ czamara: 男性用の外套。ポーランドでは18世紀に町人の間で流行し、19世紀には11月蜂起の際、蜂起参加者の制服として着用された。

¹³⁹ Gorzkowski, s. 489 参照。

¹⁴⁰ Skalka: クラクフのカジミェシュ地区にある、テーベの聖パウロ修道院及び教会。ポーランドの守護聖人である聖スタニスワフの聖域。教会の地下祭室は、ポーランドの著名な文化人が眠る場所として知られる。例えばクラシェフスキの他に、先述したマテイコの教え子S. ヴ

キはきっぱり否と答えた。というのも、スカウカには以前《レイタン》を激しく非難したクラシェフスキ¹⁴¹の墓があり、マテイコは彼と隣り合って眠るのは絶対に避けたいと、生前に話していたからである。11月3日にはマテイコの遺体を前にして、2回のミサが行われた。2回目のミサはクラクフ司教であるドゥナイェフスキ枢機卿¹⁴²が執り行っている。ゴシュコフスキはこの日の様子を、「朝から非常に多くの群衆が弔問に押し寄せ、雑踏のすごさは言葉にならないほどであった！¹⁴³」と記録している。ガリツィア政庁がマテイコの葬儀をガリツィア国の責任で取り仕切ることにした、という情報が広まったのはこの日であった。ゴシュコフスキと遺族らはその知らせを受け、私費での葬儀を見送ることにした。

ゴシュコフスキの記録は、この11月3日に医師を呼び、マテイコの遺体に防腐処置を施したところで終わっている。そのため、この後の経過やマテイコのガリツィア葬がどのようなものであったのかについては他の資料に頼ることになる。マテイコの遺体は1週間自宅に安置され、哀悼の礼拝が毎日行われた¹⁴⁴。ガリツィアの国費によるマテイコの葬儀(参考図版E)は7日に行われたようである¹⁴⁵。葬儀は午前9時に始まり、政界の要人、教会関係者、芸術関係者、諸都市・諸機関の代表者らが多数参列した。クラクフ学術アカデミー会長でマテイコの友人であるスタニスワフ・タルノフスキが開式の言葉を述べ、その後、聖マリア教会でドゥナイェフスキ枢機卿による哀悼の礼拝が行われている。ヴァヴェル大聖堂のズィグムントの鐘¹⁴⁶の音が響く中、葬列は中央市場広場を一周した。その後、再びフロリアンスカ通りに戻り、フロリアンスカ門を抜けてルビチュ通りLubiczを通してラコヴィツキ墓地¹⁴⁷へと向かった。射撃場Ogród Strzelecki付近では一斉射撃が行われ、クラクフの至る所でポーランド国旗と喪旗がたなびいたという。マテイコの墓では、恩師ウシチュキエヴィチがクラクフ美術学校と国立美術館を代表して哀悼の辞を述べた¹⁴⁸。ガリツィア自治政府によって執り行われたこの葬儀は、公的機関から精神的指導者たることを求められていた人物の最期に相応しい、荘厳なものであったといえるだろう。

イスピャンスキやJ. マルチェフスキ、また、作曲家のカロル・シマノフスキKarol Szymanowski (1882-1937) や詩人チェスワフ・ミウオシュCzesław Miłosz (1911-2004) もここに埋葬されている。

¹⁴¹ Józef Ignacy Kraszewski (1812-1887)：小説家、時事評論家、歴史家。多作で、様々な領域に関して筆を執り、特に歴史小説が評判となった。1879年には創作活動50周年記念祭がクラクフで行われたが、マテイコは参加していない。

¹⁴² Albin Dunajewski (1817-1894)：1879年からクラクフ司教。1890年から枢機卿。政治活動家でもあった。

¹⁴³ Gorzkowski, s. 490.

¹⁴⁴ Słoczyński, s. 221 参照。

¹⁴⁵ Micke-Broniarek, s. 66 及びPrzemecka-Zielińska, s. 127 参照。ただしJan Matejko. *Wypisy biograficzne.*, Oprac. Jan Gintel, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955, s. 399 には11月5日とある。

¹⁴⁶ Dzwon „Zygmunt”：1520年にズィグムント1世の命で作られた。ポーランドで最大の鐘(重さ約11トン、高さ195センチメートル、直径248センチメートル)で、教会及び国家の重要行事に際してしか鳴らされない。

¹⁴⁷ Cmentarz Rakowicki：旧市街の北西にある墓地。1801年から1803年にかけて設立された。

¹⁴⁸ 葬儀に関する以上の簡単な説明は、Micke-Broniarek及びPrzemecka-Zielińska, s. 127-129 に拠った。

第3章 マテイコとオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世

本章ではマテイコと当時のオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世との関係に言及し、公的な場におけるマテイコの姿がいかなるものであったかを引き続き検討する。皇帝の取った行動からは、皇帝がマテイコをガリツィアそしてポーランド人社会を代表する人物の 1 人として認識していたことがうかがえる。さらに、皇帝がガリツィアとどのように接しようとしていたのかも読み取れるかもしれない。皇帝がマテイコに対して好意的に接するのは、1867 年のオーストリア・ハンガリー帝国誕生後、ガリツィアとの友好的な関係を築くことを意図していたからであろう。

1. 《レイタン》の買い上げ

《スタンチク》と《スカルガの説教》で最初の名声を得るに至ったマテイコは、1866 年に新たな大作《レイタン——ポーランドの没落》（または《1773 年ワルシャワ国会議場のレイタン》）を完成させた。しかし、当時のポーランド人社会は《レイタン》のメッセージを極めて批判的に受け止めており、マテイコに対する風当たりは強さを増していた。一方、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世は、パリ万博に出展されていたこの絵を高額で購入したのである。皇帝が《レイタン》の内容や、この絵に対するポーランド人社会の反応を知っていたのかどうかは定かではないが、いずれにしても、この行為はガリツィアとの関係を意識した政治的なものであっただろう。

《レイタン》の内容については第 1 章で簡単に述べた。「ポーランドの没落」という副題をつけたこの絵によって、マテイコが何を訴えようとしていたかは、さまざまに解釈されたとスウォチンスキは述べている¹⁴⁹。とはいえ、当時のポーランド人の間では、ポーランド分割の責任は 3 つの分割列強国だけでなく、一部のポーランド人も負っているのだということをマテイコが示している、というのが一般的な解釈であったようだ。「一部のポーランド人」とは、シュラフタ上層部のことである。したがって、貴族階級のとりわけ保守的な考え方をするポーランド人たちは、マテイコが自分たちや先祖を非難しているのだと受け止め、《レイタン》に対して激しい嫌悪感を表明した。また、ポーランド人社会の感想としても、ポーランド分割の責任をポーランド人自身に見出すことは、ポーランド人の名誉を汚す行為であるという受け止め方が一般的であり、《レイタン》は世論からも激しい非難に遭った。フランスのオテル・ランベール派¹⁵⁰の政治家たちが、《レイタン》のパリ万

¹⁴⁹ Słoczyński, s. 87 参照。

¹⁵⁰ Hôtel Lambert: 1831 年に 11 月蜂起が敗北した後パリに亡命したアダム・イエジー・チャルトリスキ公 Adam Jerzy Czartoryski を支持する政治グループ。セヌ川の中洲サン・ルイ島にあるランベール館を活動拠点とした。イギリス、フランスの協力によってポーランド独立を実現させることを目指し、あたかも亡命政府のように政治外交を繰り広げた。1861 年のアダム公の死以降は、息子のヴワディスワフ公 Władysław Czartoryski によって率いられた。

博への出展を阻止しようとしたのは、まさにこのためである。これはポーランドの名誉を守ろうとした愛国的な反応であり、ポーランドの没落は自分たちの責任であると、ポーランド人自らが自白している絵を万博に展示することは、ポーランドの恥であるという認識に基づいたものであった。マテイコはパリから帰国後、社会からの厳しい批判に答えて《マテイコへの宣告》*Wyrok na Matejkę* (1867) を描き、絵の中で自らに死刑を宣告している。

オテル・ランベール派の政治家らの努力もむなしく、1867年に《レイタン》は最終的にパリ万国博覧会に出品され、オーストリア代表作品の1つとして展示された¹⁵¹。しかしながら、絵の題名は《レイタン——ポーランドの没落》ではなく、《1773年ワルシャワ国会》*Sejm warszawski w roku 1773* に変えられていた¹⁵²。展覧会は4月1日から10月末日まで行われた¹⁵³。《1773年ワルシャワ国会》は観客の大きな関心を集め、絵の前に人だかりができるほどであったという。受賞作品の正式な発表が行われたのは7月1日であったが、非公式の受賞者目録はすでに4月の終わり頃から新聞等で発表されていた。クラクフで受賞の行方を気にしていたマテイコは、その結果に満足できなかったようである。《1773年ワルシャワ国会》は、15作品に与えられる「第1級」の中でも金賞を受賞したが、マテイコは最高賞である名誉賞（8作品に与えられる）を期待していた。

マテイコはこの絵の売却に向けて動き出した。買い手を見つけられなければ、ポーランド国内でマテイコに対する非難の度が増すことは必至であったし、マテイコ自身の家計の建て直しも困難になる。難航する《レイタン》売却に見通しが立ってきたのは、万博の展覧会が終盤を迎えた頃であった。マテイコは9月末にクラクフを発ち、ウィーン経由でパリを訪れた。マテイコがウィーンに立ち寄ったのは、《レイタン》がパリ万博へ出品されるよう尽力したウィーン美術史家アイテルベルガー *Rudolf Eitelberger* (1817-1885) に謝意を表するためであった。ただ、この時アイテルベルガーがマテイコに託した手紙が《レイタン》の買い手を決定することになったようである。この手紙はフランス在住のオーストリア大使メッテルニヒ *Richard Klemens Metternich-Winneburg* (1829-1895) に宛てたものであった。近々オーストリア皇帝がパリ万博を訪れることを知っていたアイテルベルガーはこの手紙で、パリで皇帝の案内役となるメッテルニヒに対し、マテイコの《ワルシャワ国会》にとりわけ注目するよう頼んだという¹⁵⁴。マテイコは手紙の内容を知らなかったというが、彼はパリに到着すると、ユリアン・クラチュコ¹⁵⁵と共にメッテルニヒを訪

¹⁵¹ 《レイタン》のパリ万博への出品を許可したのはパリの審査員ではなく、ウィーンの委員会であった。《レイタン》は1866年にウィーンで展示され、そこで同年12月17日にパリへの出品が決定された。

¹⁵² この変更がマテイコ自身によるものなのかどうかは不明。

¹⁵³ Marek Zgórnjak, *Matejko w Paryżu—Opinie krytyków francuskich z lat 1865-1870*, Instytut Historii Sztuki Uniwersytetu Jagiellońskiego, Kraków 1998, s. 155 参照。

¹⁵⁴ Gorzkowski, s. 45 参照。

¹⁵⁵ Julian Klaczko (1825-1906)：時事評論家、美術史及び文学史学者。ユダヤ人家庭に生まれ、主にフランス語で著作活動を行った。1849年から1879年にかけてパリで亡命生活を送り、オテル・ランベール派と関係を持った。1870年からオーストリア外務省で働き、1870年から1871年にはガリツィア国会の議員でもあった。1886年からクラクフに定住。1872年からクラクフ学術アカデミー会員。

れたようである¹⁵⁶。この手紙が功を奏したのか、マテイコの買い手探しに終止符を打ったのは、この絵に対し 45000 フラン¹⁵⁷という大金をはたいたオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世であった。《ワルシャワ国会》はかくしてウィーンのベルヴェデーレ宮殿に収められることになり¹⁵⁸、マテイコはフランツ・ヨーゼフ騎士十字勲章を授与され、さらにウィーン美術アカデミーの会員に迎えられたのである。思いがけない買い手から申し分のない売却額を手にしたマテイコは、10 月 5 日にクラクフに帰宅した。

皇帝の《レイタン》買い上げが、アイテルベルガーやクラチュコらの尽力によって準備されていたものだとしても、皇帝が面識もない 1 人の若手画家をこれほどまでに特別扱いする決断をしたのは、異例なことのように思われる。スウォチンスキは、皇帝の行為に政治的な意味合いがあることは明らかであるとし、ポーランド人との友好関係を築いていきたいというジェスチャーであったと指摘している¹⁵⁹。つまり、このパリ万博が開催された 1867 年は、ちょうどオーストリア＝ハンガリー帝国が誕生した年でもあった。フランツ・ヨーゼフ 1 世が二重制を実施することを決定したのが 2 月 1 日、ハンガリー国会がアウスグライヒ¹⁶⁰を承認したのが 5 月 29 日、フランツ・ヨーゼフがハンガリー国王として戴冠したのが 6 月 8 日と続き、皇帝が《レイタン》を買い上げたのが 9 月末から 10 月初頭の時期に当たると推測される¹⁶¹。

《レイタン》が皇帝による高い評価を得たことで、マテイコはポーランド人社会でどうにか面目を保つことができた¹⁶²。しかしポーランド人社会にとってみれば、この絵をオーストリア皇帝が購入したというのは皮肉であろう。ポーランド分割に参加した国の皇帝が、ポーランド分割の責任は自分たちにもあると、ポーランド人自身が自白しているこの絵を、高い値を付けて購入したのである。

2. マテイコ宅来訪

1880 年 8 月、オーストリア皇帝がクラクフを訪問予定であるという突然の知らせが街を騒がせた。驚いたことに、皇帝はマテイコのアトリエも訪れることになっていた。マテイコや家族らは急いで自宅を装飾し、皇帝を迎える体裁を整えた。

皇帝のガリツィア視察旅行は 12 年前から計画されていた。二重帝国の成立後、ガリツ

¹⁵⁶ Stanisława Serafińska, *Jan Matejko, Wspomnienia Rodzinne*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955, s. 257 参照。

¹⁵⁷ Słoczyński, s. 95 参照。ただし Gorzkowski, s. 45 では 50000 フランとなっている。

¹⁵⁸ 《レイタン》はその後 1920 年にポーランド政府によって買い上げられ、現在はワルシャワ王宮に展示されている。

¹⁵⁹ Słoczyński, s. 95 参照。

¹⁶⁰ Ausgleich: オーストリア帝国とハンガリー王国の間で結ばれた協定。しばしば「妥協」と訳される。これにより、二重君主国であるオーストリア＝ハンガリー帝国が成立した。

¹⁶¹ Stanisława Serafińska, *Jan Matejko, Wspomnienia Rodzinne*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955, s. 257-258 参照。

¹⁶² Janusz Bogucki, *Matejko*, Państwowe Wydawnictwo „Wiedza Powszechna”, Warszawa 1956, s. 112 によると、皇帝による買い上げが新聞で伝えられたその日、ガリツィア総督アゲノル・ゴウホフスキ Agenor Gołuchowski (1812-1875) に敬意を表する晩餐会に、マテイコは急きょ招待された。

ィアに一定の自治を認めた皇帝は、ポーランド人との友好関係を築いていくにあたり、ガリツィアを視察することを予定していた。スウォチンスキの説明によると、この 12 年前の視察が実現しなかったのは、ロシアの圧力があったためだという¹⁶³。ロシアが恐れていたのは、自治を獲得したガリツィアのポーランド人社会が、ポーランドの統一と独立を目指す運動の拠点になることであった。オーストリアがポーランド人に自由を与え、ポーランド人と友好関係を築こうとしている状況を、ロシアは黙って見ているわけにはいかなかった。1880 年にこの視察旅行が実現したのは、ポーランドを取り巻く国際情勢が変化し、ポーランド独立の実現を期待できるような欧州の国際関係が消滅したからである。1870 年から 1871 年の普仏戦争で、ポーランドがこれまで頼りにしていたフランスが敗北し、ヨーロッパにおけるドイツ帝国の優勢が確実となった。フランスはドイツに対抗するために、ポーランドに対する支持を取り下げて、ロシアとの協調を進めざるを得なくなった。強大なドイツ帝国の台頭という緊迫する情勢の中、ポーランド問題の重要性は著しく低下し、欧州の国際社会がポーランド問題を顧みるようになるには、第 1 次世界大戦を待たねばならなかった。

クラクフを訪れたフランツ・ヨーゼフ 1 世は、住民から熱狂的な歓迎を受けた。ポーランド人と友好関係を築こうとしている皇帝の姿は、住民たちに好印象を与えた。9 月 2 日、皇帝はコレギウム・ミヌスを訪れた後マテイコの自宅に向かい、14 時半頃到着した¹⁶⁴。皇帝の従者 2 人に加え、ガリツィア総督アルフレド・ポトツキ¹⁶⁵、クラクフ市長ミコワイ・ズィブリキェヴィチ、総督府代表カジミェシュ・バデーニ¹⁶⁶らが同伴していた。マテイコとゴシュコフスキは玄関に立ち、パンと塩を載せた盆を持って皇帝を出迎えた。これは客人を出迎える際に行うポーランドの古い習慣に従ったものであるとゴシュコフスキは述べている¹⁶⁷。皇帝もその習慣に基づき、敬意と歓待の印であるパンと塩に手を触れ、その後マテイコの自宅 1 階の客間に案内された。この時マテイコの子どもたちが、皇帝の足元に花を投げかけるという演出をしている。皇帝を迎えた部屋に展示されていたのは、《1515 年ウィーン会議》*Zjazd pod Wiedniem w 1515 roku*、《ウィーン解放》*Odsieczy Wiednia*、《教皇への書簡を携えたデンホフの派遣》*Wysłanie Denhoffa z listem do papieża*、《プロイセンの臣従》で、いずれもスケッチであった。《プロイセンの臣従》を除き、オーストリアが関係する内容の作品が選ばれたことが分かる。また、壁にも様々な作品が飾られた。マテイコが手短かに歓迎の言葉を述べ終わると、皇帝は展示されている絵画に興味深く鑑賞

¹⁶³ Słoczyński, s. 146 参照。

¹⁶⁴ 皇帝来訪に関する以下の詳細は Gorzkowski, s. 211-213 を参照した。

¹⁶⁵ Alfred Józef Potocki (1822-1889) : 1876 年から 1883 年までガリツィア総督。オーストリア内閣で農相 (1867-1870)、国防相 (1870)、さらには首相 (1870) を務める。1862 年からオーストリア帝国議会貴族院議員であった。1863 年からガリツィア国会議員となり、1875 年から 1877 年には国会議長を務める。オーストリアに忠実であった。伯爵。農業の近代化にも尽力した。

¹⁶⁶ Kazimierz Badeni (1846-1909) : 1888 年から 1895 年の間ガリツィア総督。1895 年にオーストリア首相に就任。帝国議会の選挙法改正を行う。1897 年には、ボヘミアとモラヴィアの行政機関においてチェコ語とドイツ語が平等であることを定めた「バデーニ言語令」を発した。これがドイツ系議員らの激しい反発と、国会機能の麻痺を招く結果となり、同年、首相の職を追われた。

¹⁶⁷ Gorzkowski, s. 212 参照。

し、作品の内容について説明を求めた。《プロイセンの臣従》については、内容がこの場にふさわしくないと判断されていたため、ポトツキが「これはスケッチです」と答えて説明を避けている。

この訪問の終盤にマテイコは皇帝に謝意を表し、《1515 年ウィーン会議》（参考図版 F）を皇帝へ贈った。マテイコがこの絵によって、皇帝に何らかのメッセージを伝えたかったのだろうということは想像できる。この作品に付いている《1515 年ヤギェウオ家の 2 人の王と皇帝マクシミリアンのウィーン会議》*Zjazd królów Jagiellonów z cesarzem Maksymilianem pod Wiedniem w roku 1515* というより詳しい題名からも分かるように、この絵は 1515 年にウィーンで行われた、ヤギェウオ家のズィグムント 1 世とその兄でボヘミア王兼ハンガリー王であるヴワディスワフ 2 世¹⁶⁸の 2 人と、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世¹⁶⁹との会見をテーマにしている。この会見ではまず、ヴワディスワフ王の息子ルドヴィク¹⁷⁰と娘アンナ Anna が、皇帝の孫たちであるマリア Maria とフェルディナンド¹⁷¹と婚約することが決められた。さらに、ボヘミアとハンガリーでヤギェウオ家が断絶した際には、ハプスブルク家が王位を継承することが約束された。ハプスブルク家は実際に、その後間もなくボヘミアとハンガリーを統治することになった。マテイコはこの作品により、ハプスブルク家とヤギェウオ家の二重婚姻が、その後のハプスブルク家の繁栄に貢献したことを想起させようとした¹⁷²。そして 19 世紀においても、ポーランド人との友好的な関係がオーストリアにとって重要であることを訴えたのだろう。

フランツ・ヨーゼフ 1 世は、ポーランド人が誇る歴史画家を訪問するという象徴的なデモンストレーションによって、ポーランド人との友好関係を強調しようとした。マテイコが当時のポーランド人にとって重要な人物であったということを、皇帝も認めていたのだろう。ちなみに、この皇帝来訪の光景はユリウシュ・コサックが 1 枚の絵に残している（参考図版 G）。この絵はガリツィアから皇帝に贈られたアルバムに収められた。

3. 《プロイセンの臣従》観覧

第 2 章で取り上げたとおり、1882 年 10 月、マテイコは《プロイセンの臣従》をガリツィア国に寄贈することをルヴフの国会にて宣言し、大きな反響を呼んだ。ここではその後の経過を紹介する。マテイコはルヴフに滞在した後ポトホルツェ¹⁷³に赴き、次回作《ソビエスキ》の制作に必要なスケッチなどを行った。そして 10 月 12 日に 6 日ぶりにクラクフに戻っている。当時ウィーンで開催されていた《プロイセンの臣従》の展覧会に皇帝が訪

¹⁶⁸ Władysław II Jagiellończyk (1456-1516) : 1471 年からボヘミア王。1490 年からハンガリー王（ウラスロー 2 世）。

¹⁶⁹ Maximilian I (1459-1519) : 1508 年から神聖ローマ皇帝。

¹⁷⁰ Ludwik (1506-1526) : 1516 年からハンガリー王（ラヨシュ 2 世）兼ボヘミア王（ルドヴィク 1 世）。ポーランドのヤギェウオ家ではルドヴィク 2 世として知られる。

¹⁷¹ Ferdinand (1503-1564) : 1526 年からハンガリー王兼ボヘミア王、1556 年から神聖ローマ皇帝（フェルディナンド 1 世）。

¹⁷² Słoczyński, s. 148 参照。

¹⁷³ Podhorce: ルヴフの東。現在はウクライナの村。ソビエスキ家領だった。17 世紀前半に建てられた大貴族の館があることで知られる。

れるとの知らせをマテイコが受け取ったのは、この帰宅直後のことだった。ゴシュコフスキによると、皇帝がある画家の作品展を訪れる際には、その画家自らが皇帝に対して作品の説明をするのが慣例であったという¹⁷⁴。したがって、本来ならば当然マテイコがウィーンに足を運ぶはずであるが、彼は体調不良を理由に¹⁷⁵秘書ゴシュコフスキにすべてを任せた。

ゴシュコフスキは10月13日にクラクフを発ち、翌14日、《プロイセンの臣従》の展覧会が行われていたウィーンの造園協会館¹⁷⁶で皇帝を出迎えるために朝から待機していた。皇帝は11時に展覧会の会場に到着した。ウィーンの新聞記者らもその場にいたため、皇帝の作品観覧の様子は現地のいずれの新聞にも詳しく掲載された。以下に、その中の1紙である『ノイエ・フライエ・プレッセ』*Neue Freie Presse*第6514号の記事を引用する。

皇帝は今日、マテイコの巨大な絵画をご高覧されるために広間を訪問され、マテイコの秘書ゴシュコフスキ氏が皇帝に対応した。ゴシュコフスキ氏はマテイコの代理として皇帝をお迎えすべく、クラクフからわざわざウィーンに赴いたのであった。皇帝は「マテイコはどこにいて、調子はどうなのか？」とご質問なさった。それに対しゴシュコフスキ氏が、マテイコは病気のためクラクフに残っていると答えると、皇帝は大変残念だとお答えになった。「私から彼によりよく伝えてください。また、ガリツィア国へ献上された素晴らしい贈り物に対し、私自ら彼に感謝の意を伝える心づもりであったことも、合わせて伝えておくように。」

皇帝はこのあと、この絵を長い間まじまじとお見つめになり、ゴシュコフスキ氏はこの絵の内容をフランス語で説明した。皇帝は「素晴らしい、最高だ！これは彼が描いた絵の中で最も美しいものだ。」と2回繰り返された。ヴァヴェル王城にこの巨大な絵を展示する場所があるのかどうか皇帝がご質問になると、ゴシュコフスキ氏は、あらかじめ王城の広間を修復することが必要となるだろうと答えた。絵をご覧になった後、皇帝は再びゴシュコフスキ氏の方に向き直り、「私はこの大作に魅了された。どうかマテイコに、ガリツィア国への贈り物に対する感謝の意を伝えてください。」とおっしゃった¹⁷⁷。

ゴシュコフスキによると、現地の新聞の中でマテイコを非難したものは1紙だけであった¹⁷⁸。ドイツ人を侮辱するような絵を、よくもここウィーンで展示する勇気があるものだという批判である。しかし、そのほかの新聞は事実を正確に伝え、皇帝のこの絵に対する好意的な評価を掲載した。スウォチンスキは、ここでの皇帝の態度について次のように述べている。

¹⁷⁴ Gorzkowski, s. 233 参照。

¹⁷⁵ マテイコは旅行からの帰宅直後で疲労していた。

¹⁷⁶ Gebäude der Gartenbaugesellschaftとあるが、詳細は不明。

¹⁷⁷ Gorzkowski, s. 235. ゴシュコフスキによってポーランド語に翻訳されたものを引用した。

¹⁷⁸ 同上。

皇帝はとりわけ《プロイセンの臣従》を称賛した。新聞によっても広く報道された皇帝のこの評価は、もちろんポーランド人に対する共感の印でもあり、この絵に込められたオーストリアの同盟国¹⁷⁹に対する扱いを考えると、これは注目に値することである¹⁸⁰。

《プロイセンの臣従》の内容は第1章で多少述べたが、皇帝はその内容よりも、この絵がマテイコによってガリツィアに寄贈されたということを重視していたはずである。皇帝が《臣従》を観覧したのは、マテイコがルヴフでこの絵を国家に寄贈する旨を宣言してから、ほぼ1週間後という素早さであった。マテイコにとっては、ヴァヴェル城の改修を急がせたかった、というのが本心だったのかもしれないが、結果的には国内の愛国的な雰囲気を取り上げたことになった。皇帝が絵の観覧を決めたのも、このようなガリツィアの状況を考慮した上で、ポーランド人に対する共感を時宜にかなうように示そうとしたためではないかと思われる。

4. 《ウィーンのソビエスキ》観覧

1883年9月、クラクフでマテイコ記念祭が行われたことについては、第2章で述べた。この記念祭では、アルトゥル・ポトツキを代表とする委員会が、《ウィーンのソビエスキ》を一般からの寄付金でガリツィアのために買い上げることを計画していたが、委員会の意に反して、マテイコはこの絵を教皇に寄贈しようと心に決めていた。第1章で簡単に述べたこの絵の内容からも明らかなように、マテイコが《ソビエスキ》を描いたのは、この1883年という年が、ウィーン解放200周年に当たるためであった。そのためマテイコは、この年にウィーンで開催される「ウィーン解放記念祭」で、ぜひとも《ソビエスキ》を展示しようと準備を進めていた。しかしこの記念祭はマテイコ記念祭と同時期に行われたため、マテイコはクラクフに残ることにし、ウィーンでの《ソビエスキ》展覧会¹⁸¹は秘書ゴシュコフスキにすべてを任せることにした。そして、この展覧会の終盤に皇帝が訪れたのである。

マテイコ記念祭に立ち会えないことを嘆きながら1人クラクフを後にしたゴシュコフスキは、苦心して巨大な絵をウィーンに運び込んだ。ゴシュコフスキは現地で、予想していた厳しい現実と直面した。すべてのドイツ語新聞が、ウィーン解放の功績はもっぱら自分たちドイツ人にあると宣言しているのである。ソビエスキの活躍は、当然ながら副次的に扱われていた。マテイコとゴシュコフスキが以前から懸念していたのは、まさにこの状況であった。ソビエスキをいわばウィーン解放の英雄として描いているマテイコの作品は、ウィーンで人々からの関心を集めることができないのではないかと。展覧会への客足が伸び

¹⁷⁹ プロイセンを前身とする当時のドイツ帝国のこと。オーストリアはこの1882年の5月に、ドイツ、イタリアとの間で三国同盟を締結している。

¹⁸⁰ Słoczyński, s. 167.

¹⁸¹ Jan Matejko. *Materiały z sesji naukowej poświęconej twórczości artysty 23-27 XI 1953*, Arkady, Warszawa 1957, s. 317によると、この展覧会はwystawa historyczna（歴史展）という名で行われ、《ソビエスキ》の他、《スカルガの説教》と《ベルニホラ》も展示された。

悩めば、この展覧会の目的——ソビエスキの功労を称え、ウィーンの解放はポーランドに負うところが大きいのだということを、できる限り多くのドイツ人に訴えること¹⁸²——が果たせなくなる。そこでマテイコは、展覧会の入場料を無料にすることを決断していたのである。この思い切った決断は、ゴシュコフスキが展覧会初日になってようやく現地の新聞で発表し、ウィーン市民を驚かせた。そしてこの結果、貧しい人も含め非常に多くの人々がこの展覧会を訪れたのである。彼らの感想としては、ドイツ人の英雄の姿がしっかり描かれていないという批判が大半だったが、ソビエスキの存在を多くのウィーンの住民にアピールできたという点ではマテイコの思惑通りになった。

以上のような話題を呼んだこの展覧会は 4 週間続いたようである¹⁸³。展覧会の終盤には皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世が訪れることになっていた。以下に紹介するのは、《プロイセンの臣従》の一件に引き続き、再びマテイコの代理人として皇帝と対面することになったゴシュコフスキ本人が、この時の様子を記したものである。

最後に皇帝も展覧会にいらっしゃった。私は皇帝のご訪問についてあらかじめ伺っていたので、お出迎えの準備はできていた。皇帝はとてもおもしろそうに作品をお見つめになった。私が皇帝に、この絵の内容や描かれている人物の名字をご紹介しますと、皇帝はこの絵をひっきりなしにお褒めになった。私はこの絵を解説した小冊子を執筆していたので、皇帝にそれをお受け取りいただくようお願いした。この小冊子はきれいに装丁されており、私は皇帝のために前もって 1 部用意していた。皇帝は大変好意的にこれをお受け取りくださり、ずっとご自分の手に携えておられた。そのため、皇帝のそばに立っていた副官は、皇帝がその本を手に持っていらっしゃるのに気付くと、本をお持ちして差し上げようと皇帝に近付いた。しかし皇帝はその本をお預けにならずに引き続きご自分でお持ちになり、私のような者に対して必要以上に礼儀正しく振舞われた。私が説明差し上げている最中、皇帝が「なぜマテイコはこの絵を教皇に贈ったのか」と突然ご質問になった。現地のすべての新聞がこれについて取り上げていたため、皇帝はこの情報をすでにご存知であったのだ。私は皇帝からのこのようなご質問を想定していなかったが、頭に浮かんだ最初の考えに従い、神がマテイコにあまりにも多くの苦難をお与えになるためだと申し上げた。マテイコの妻は気がおかしく¹⁸⁴、彼は家庭生活において不幸である。そのためマテイコは神の御哀れみを請いたいのであり、本当にそれを必要としているのである。私が簡潔に手っ取り早くお答え申し上げると、皇帝は大変お心を動かされた。

「では、彼の妻はここウィーンの病院にいるのですか」と皇帝はお尋ねになった。「皇帝閣下、彼女は只今クラクフの病院におります」と私はお答えした。皇帝は非常にお心を打たれたご様子で私をお見つめになった。というのも、皇帝

¹⁸² Gorzkowski, s. 257 参照。

¹⁸³ 同上。展示会場の貸主との契約で、展示会の最初の 2 週間分の収益はマテイコに、次の 2 週間分の収益は貸主に分配されることになっていた、との記述がある。

¹⁸⁴ マテイコの妻テオドラは精神病であった。とりわけこの前年の 1882 年に病状が悪化し、入院している。

ご自身も、ご自分の日常生活において大変不幸でいらっしゃるためである。その後、皇帝はお別れに際し、「どうか私の心からの好意の気持ちを添えて、マテイコによろしくと伝えるように」とおっしゃった¹⁸⁵。

展覧会には皇帝のほか、皇帝のおじに当たるアルブレヒト大公Albrechtと、皇帝の弟であるカール・ルートヴィヒ大公Karl Ludwigも訪れた。《ソビエスキ》の内容がウィーンのドイツ人社会には受け入れがたいものであったにもかかわらず、皇帝家はこの展覧会を訪問したのである。彼らはゴシュコフスキに対しても、非常に丁重に接していた様子が見える¹⁸⁶。ゴシュコフスキが皇帝と何語で話したのかは記録されていないが、2人の大公とはフランス語で会話しているため、おそらく《プロイセンの臣従》の説明の際と同様に、皇帝ともフランス語で話したものと推測される。皇帝家がゴシュコフスキにドイツ語を強制しないところにも、ポーランド人との友好関係を維持するという路線が貫かれているように見える。

¹⁸⁵ Gorzkowski, s. 259-260.

¹⁸⁶ Gorzkowski, s. 260 参照。

第4章 マテイコと文化財保護・修復

最終章となる本章では、マテイコがクラクフの文化財保護・修復事業にどのように関わったのかを明らかにし、公的な場における彼の姿にもう1つだけ新たな側面を加えておきたい。彼が関わった文化財すべてを取り上げることはできないが、クラクフの有名な文化財としては、ヴァヴェル大聖堂Katedra na Wawelu、聖マリア教会Kościół Mariacki、織物会館Sukiennice¹⁸⁷などがある。以下では前者2つについて詳しく取り上げたい。マテイコはまた、現存しない聖霊病院Szpital św. Duchaというゴシック様式の建造物の保護を必死に訴えた。これに関しても以下で扱うことにする。マテイコがクラクフ市の公的機関と対立する姿からは、彼が文化財保護・修復に対して大変な熱意を持っていたことが窺えるだろう。

1. ヴァヴェル大聖堂

ヴァヴェル城に隣接する大聖堂（司教座聖堂）はかつて国王の戴冠式や葬儀が行われた場所である。大聖堂全体の抜本的な改修作業はマテイコの死後、1895年から1910年にかけて行われたが、部分的な改修や保護にはマテイコも携わった。まず、当時荒廃していたポーランドの王侯の墓を調査、修復する作業が挙げられる。クラクフ学術協会は1864年、ヤギェロン大学創立500周年を機に、大学の創立者であるカジミェシュ大王¹⁸⁸の墓を改修する作業を開始した。1869年6月14日、改修作業の最中に大王の遺骨と王冠などの遺品が偶然発見され、ポーランド中で大きな反響を呼んだ。マテイコはこの時行われた大王の墓の調査に立ち会い、大王の遺骨と遺品をスケッチした。マテイコはまた《（ヴァヴェル城における）カジミェシュ大王の墓内部》*Wnętrze grobu Kazimierza Wielkiego (na Wawelu)* (1869) と題した作品も残している。同年7月8日には、カジミェシュ大王の再葬儀がクラクフで行われた。愛国的な示威運動の様相を呈したこの荘厳な葬儀の前日には、大王の遺体が新しい金属製の棺に納められ、マテイコはクラクフ市当局、聖職者団、ヤギェロン大学長と共にその場に立ち会った。カジミェシュ大王の葬儀のために寄せられた寄付金の残りは、大聖堂の地下祭室（クリプト）にある王侯の墓の最終的な改修作業に当てられた。作業中、地下祭室は一般にも公開された。マテイコはこの時も王侯の墓を開く作業に立ち合い（ステファン・バトーリの墓<1877年>、ヤドヴィガ¹⁸⁹とズビグニェフ・

¹⁸⁷ 1879年に終了した織物会館Sukienniceの改修作業では、その中心人物であった建築家トマシュ・プリリンスキTomasz Pryliński (1847-1895) にマテイコが助言を与えた。

¹⁸⁸ Kazimierz III Wielki (1310-1370)：ピラスト王朝最後の国王（在位1333-1370）。法典の整備や貨幣の発行などの中央集権的な諸改革を行い、ポーランドの王国としての統一に尽力した功績が称えられている。1364年にクラクフ・アカデミー（ヤギェロン大学）を設立した。

¹⁸⁹ Jadwiga (1374頃-1399)：ポーランドの女王（在位1384-1399）。ヤギェウォ朝時代の初代国王であるヤギェウォJagielloの妃。

オレシニツキ¹⁹⁰の墓く共に 1887 年>)、遺骨や遺品のスケッチを行っている。歴史に直に触れる貴重な体験となったこの作業にマテイコは大変な熱意を持って取り組んだという。彼はこのスケッチをもとに王侯の外見について検討し、絵画制作の参考にもした。

文化財保護に対するマテイコの熱意がよく表れているのは、大聖堂の主祭壇取り壊し計画をめぐる出来事である。1878 年 9 月、マテイコは司教座聖堂参事会が大聖堂の主祭壇の取り壊しを計画していることを知った。この計画はゴシック様式の大聖堂からバロック様式の主祭壇を取り除いてネオゴシックの祭壇を新設するという、文化財修復領域における当時の流行を反映したものであったという¹⁹¹。マテイコはこの計画に反対するにあたり、公的機関に対して公開状を書くという手段に訴えた。彼はまずクラクフの文化財修復専門家を代表するユゼフ・ウェブコフスキ¹⁹²に宛てて公開状¹⁹³を書いた。同氏の返答に対してマテイコはもう一度公開状¹⁹⁴を書き、主祭壇は取り壊すのではなく改修すべきであると主張した。さらに彼は、改修作業に対して寄付金を募るべきだと提案し、手始めに 100 ズウォティ・レンスキを自ら寄付することを表明した。ゴシュコフスキの記録によると¹⁹⁵、マテイコはこの後 10 月に、ウィーンの文化財保護中央委員会¹⁹⁶の委員長に対し、この件に関する報告書を送っている。主祭壇の取り壊し作業が一旦中止されることになったのは、取り壊しを推し進めようとする司祭らの主張を、この委員長が退けたためだという。しかしながら、この時点では取り壊し計画自体が放棄されたわけではなかった。

この問題が再燃したのは、1883 年にマテイコがフロリアンスカ門 *Brama Floriańska* の改修をめぐるウェブコフスキと対立している時であった。マテイコは主祭壇の取り壊しに対し、再び公開状で反対した。4 月 27 日付けの『チャス』紙 *Czas* に掲載された公開状¹⁹⁷は、マテイコが聖堂参事会に宛てたものであった。この公開状に対しては、聖堂参事会だけでなく、クラクフ市長ヴァイゲル *Ferdynand Weigel* (1826-1901)、文化財修復専門家（おそらくウェブコフスキ）、クラクフ市建築課長のニェジャウコフスキ *Janusz Niedziałkowski* にも異議を唱えた。そこでマテイコはニェジャウコフスキに宛てて再び公開状¹⁹⁸を書いた。これは 5 月 1 日付けの『チャス』紙に掲載されている。マテイコと公的機関との対立はその後も続いたようだが、最終的にマテイコの努力は報われた。改修されることになった主祭壇は作業のため一時的に司教宮殿の礼拝堂に移されていたが、やがて大聖堂の元の場所に戻された。このバロック様式の主祭壇を現在でも見ることができるの

¹⁹⁰ Zbigniew Oleśnicki (1389-1455) : 1423 年からクラクフ司教。1439 年から枢機卿。有力貴族の代表として、当時の政治に大きな影響力を持っていた。ポーランドのルネサンス期において、学問・芸術の庇護者でもあった。

¹⁹¹ Maria Przemecka-Zielińska, s. 89 参照。

¹⁹² Józef Łepkowski (1826-1894) : 考古学者。文化財修復専門家。1875 年、ヤギェロン大学で最初の考古学教授となる。1885 から 1 年間同大学学長。1872 年からクラクフ学術アカデミー会員。

¹⁹³ Gorzkowski, s. 118-119 参照。

¹⁹⁴ Gorzkowski, s. 119 参照。

¹⁹⁵ Gorzkowski, s. 119 参照。

¹⁹⁶ Centralna Komisja dla Ochrony Zabytków Sztuki w Wiedniu とある。委員長の名前は *Freiherrn von Helfert* となっている。

¹⁹⁷ Gorzkowski, s. 249-250 参照。

¹⁹⁸ Gorzkowski, s. 251 参照。

は、公的機関と対立してでも後世に文化財を残そうとしたマテイコのおかげであろう¹⁹⁹。

マテイコの最晩年には、大聖堂内にあるズィグムント父子の礼拝堂 *Kaplica Zygmuntowska* を修復する作業が行われた。これは 1891 年から 1894 年に、建築家スワヴォミル・オジヴォルスキ²⁰⁰ が主導した作業である。マテイコは 1892 年の 8 月以降、毎週金曜日に礼拝堂前で開かれる修復委員会に参加していた。当時すでに老衰していたマテイコだが、毎週欠かさず礼拝堂を訪れて作業の進展状況を確認し、時には作業員に助言を与えたという。彼はこの作業の進展を大変快く思っていた模様である。1893 年 10 月 21 日、市立劇場の柿落とし²⁰¹に参加したマテイコは、式典に招待されていたガリツィア国会議長サングシュコ²⁰²とガリツィア総督バデーニをヴァヴェル大聖堂に案内し、礼拝堂の修復状況を 2 人に詳しく説明した。

大聖堂にまつわる出来事は以上に留めるが、ここでヴァヴェルの王城についても少し述べておきたい。マテイコの生きた時代、この王城はオーストリア軍の支配下に置かれていた。1815 年から 1846 年のクラクフ共和国時代には、オーストリア軍の宿舎だけでなく、貧困者のための施設など様々な機関がヴァヴェル城内に拠点を置いていたというが、1846 年のクラクフ蜂起後にクラクフが正式にオーストリア領となると、ヴァヴェル城は完全にオーストリア軍の兵舎となった。1848 年以降、オーストリア軍は王城を増築してクラクフを監視する要塞とした。1854 年から 1856 年には、軍用地を確保するためヴァヴェルの丘陵にある様々な建造物を破壊し、王城の改築も行った。さらには、大聖堂を閉鎖して駐屯部隊用の教会にする計画もあったようであるが、これは実現には至らなかった。ヴァヴェル城をオーストリア軍から取り戻すためにポーランド社会が動き出したのは、ガリツィアに自治が認められるようになってからである。例えば、1880 年に皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世がクラクフを訪れたことは前章で述べたが、この時クラクフ市長ズィブリキエヴィチは皇帝に対し、ヴァヴェル城を皇帝の公邸として寄贈することを提案した。こうすることで、オーストリア軍を王城から撤退させようとしたのである。皇帝はこの提案を受け入れたが、ヴァヴェル城から最終的に軍隊が去ったのは 1905 年のことであった。王城の改修作業が行われるようになったのはこれ以降である。したがって、生前のマテイコは王城の改修に直接関わることはできなかった。しかし、改修を急ぎたいというマテイコの思いは、《プロイセンの臣従》を改修後のヴァヴェル城に展示するという条件でガリツィアに寄贈したという一件に見て取れる。

¹⁹⁹ ただし、マテイコは大聖堂全体を自分の構想に基づいて抜本的に改装するという夢も抱いており、主祭壇は全く違ったものにしなければならないとも語っている。また、聖堂の多色装飾には《ポーランド王侯図》に色付けしたものを使おうと考えていた。

²⁰⁰ Sławomir Odrzywolski (1846-1933)：建築家。文化財修復専門家。1895 年から 1904 年の間、建築家ズィグムント・ヘンデル Zygmunt Hendel (1862-1929) と共にヴァヴェル大聖堂全体の改修を主導した。

²⁰¹ 本章 3. を参照。

²⁰² Eustachy Sanguszko (1842-1903)：1890 年から 1895 年までガリツィア国会議長を務めた。1873 年から 1901 年までガリツィア国会議員。1873 年から 1879 年の間オーストリア帝国議会議員、1890 年から 1895 年は貴族院議員。1895 年から 1898 年にかけてガリツィア総督。公爵。

2. 聖マリア教会

中央市場広場の東側、マテイコの住むフロリアンスカ通りに入る手前に、クラクフのシンボルの1つである聖マリア教会が2本の尖塔を空高く掲げながら堂々とそびえ立つ。マテイコは幼い頃からこの教会に足繁く通い、美術学校時代には、15世紀の彫刻家ヴィト・ストウフォシュによる祭壇を熱心にスケッチした。彼は《ヴィト・ストウフォシュとその孫娘》*Wit Stwosz z wnuczką* (1865)の展示会で得た収入を、この祭壇の改修費としている²⁰³。この祭壇の周囲の壁に目を向けてみると、そこには色鮮やかな天使たちが浮かんでいる。この天使たちを含む教会内部の多色装飾は、1889年から1891年にかけて、クラクフ市の特別委員会が行った大々的な改修作業の際に施されたものである。以下では、この作業にマテイコがどのように関わったのかを説明する。

1889年1月、クラクフ市に聖マリア教会の内装改修を担当する特別委員会が設置された。委員長は建築家のタデウシュ・ストリエンスキ²⁰⁴であった。しかし、マテイコは当初この委員会には招かれていなかった。市としては、画家であるマテイコに文化財保護・修復の知識があるとは考えていなかったのである。お気に入りの教会の改修作業に自分が必要とされていないのが理解できなかったマテイコは、自分から勝手に委員会に顔を出していたが、同年1月25日からは正式に委員会の一員となった。委員会ではウシュチュキエヴィチの改修案に沿った全体計画が採用されようとしていたが、マテイコはこれに異議を唱えて計画をすべて白紙に戻してしまった。以後の全体的な作業は、マテイコが提出した新しい計画に沿って進められることになったのである。

6月には教会内陣の多色装飾について、詳細な計画作りが本格的に議論された。ここでもマテイコはウシュチュキエヴィチ案を掲げる委員会側と意見が合わず、ついに彼は自分を信用しない委員会に対し思い切った宣言をした——無償であっても自分の案で作業を行いたい。驚いた委員長パヴェウ・ポピエル²⁰⁵がマテイコを説得したが話し合いは決裂した。マテイコは14世紀の装飾法を自分で研究した上で新たな装飾案を提出したが、委員会はこれに対し財政難を理由に難色を示した。しかし、マテイコは教会に寄付金が集まることを想定し、自分で最初の寄付金を支出した上で、自らの案を実行に移そうと無償で作業を開始した。

マテイコの多色装飾案は鮮やかな色彩や装飾性の高いデザインを用いた革新的なものであり、当時としては奇抜なものであったため、マテイコを非難する声も多かった。ただし、現在このマテイコの案は「若きポーランド」の装飾性を先取りしたものであると指摘されることが多い。装飾案のテーマは宗教的で愛国的なものであると、ゴシュコフスキは指摘している²⁰⁶。

作業はマテイコ案で順調に進み出した。しかし、委員会側がウィーンからユダヤ人技師

²⁰³ Przemecka-Zielińska, s. 81 参照。

²⁰⁴ Tadeusz Stryjeński (1849-1943)：建築家。クラクフの旧劇場Stary Teatrの改築(1904-1906)などにも携わった。

²⁰⁵ Paweł Popiel (1807-1892)：スタンチク派の政治家。時事評論家。1872年にクラクフ学術アカデミー会員。1874年から1881年、ガリツィア国会議員。

²⁰⁶ Gorzkowski, s. 384 参照。

を招いて作業の中心に据えたことに対しては、マテイコだけでなく当時のポーランド社会も反対した。自国の教会の改修を外国人に、しかもユダヤ人に頼らなければならないのはポーランドの恥であるというのがその理由であった。マテイコは委員会を説得し、最終的にはスタニスワフ・ヴィスピャンスキ、ユゼフ・メホフェルなどクラクフ美術学校の学生を作業に加え、できるだけポーランド人画家が重要な仕事を受け持つようにした。彼ら作業員の仕事は、マテイコがカルトンに描いた天使（参考図版 H）などを実際に壁に描き込んでいくことであり、ヴィスピャンスキは最も上手にこの作業を行ったとしてマテイコに褒められている。14 世紀の画家になった気分だというマテイコは聖歌隊席の設計まで行い、初めて建築家としての仕事もした。こうして内陣の装飾が完成し、1890 年 3 月 31 日には聖別式が行われた。ドゥナイエフスキ司祭はこの時マテイコに謝辞を述べている。

残りは主に外陣の作業である。聖マリア教会の外陣は、かつてクラクフの様々なギルドが資金を提供して装飾されたという。マテイコは教会の建築に特に功労のあったギルドの印章を外陣に描き入れることにした。彼は当時の文書を調べて印章を見つけ出し、それを拡大してカルトンに描くという骨の折れる作業を 1 人で行った。古い文書に残された印章は小さくて不鮮明であり、数も多かったため作業は難航した。1891 年 6 月 19 日、タルノフスキ家の紋章を入れたクラクフ学術アカデミーの印章をカルトンに描き、この作業はようやく終了した。同年 8 月には外陣の聖別式が行われ、改修作業は一通り完了した。しかし、改修作業に関するマテイコの考え方を理解しなかった委員や作業員もいたため、マテイコはこの聖別式に招かれなかった。

ちなみに、マテイコの死から 4 年後の 1897 年、クラクフ市議会はこの教会の外陣内部にマテイコの胸像と彼を偲ぶプレートを設置した。

3. 聖霊病院

マテイコの努力が報われず、取り壊されてしまった文化財もある。現在、スウォヴァツキ記念劇場 *Teatr im. J. Słowackiego* や聖十字架教会 *Kościół św. Krzyża* の付近に聖霊広場 *plac św. Ducha* と呼ばれる一帯がある。マテイコが必至に保護を訴えたのは、当時この広場にあった聖霊病院 *Szpital św. Ducha*、聖霊教会 *Kościół św. Ducha*（参考図版 I）、そして教会内にあった礼拝堂である。これらは 14 世紀に建てられたゴシック様式の建造物であり、老朽化が進んでいた。しかし、すでに当時のクラクフにおいてさえ、中世の建造物、とりわけ聖霊病院のような宗教建築以外のものは非常に貴重な文化財となっていたのである。

1887 年²⁰⁷、クラクフ市議会は市の威信をかけた市立劇場 *Teatr Miejski*²⁰⁸ を新築する場所を巡って議論を重ねていた。その結果、崩壊寸前の聖霊病院と聖霊教会を取り壊し、その跡地を利用することが決定されたのである。マテイコはこのことを知ると、ひどく心を痛めた。すでに希少な存在となっている歴史的建造物を、なぜ自分たちの手でさらに破壊

²⁰⁷ Gorzkowski, s. 327 は 1887 年 5 月、Ślōczyński, s. 215 は 1886 年となっている。

²⁰⁸ 現在のスウォヴァツキ記念劇場のこと。

しなければならぬのか、マテイコは理解に苦しんだという²⁰⁹。彼は聖霊病院及び教会の解体を阻止するために、あらゆる手を尽くした。まずクラクフ市の担当者らと直接話し合ったが、全く功を奏さなかった。次に、クラクフ市への請願書²¹⁰をゴシュコフスキに書かせた。マテイコによると²¹¹、聖霊広場にある建造物の重要性は、それらがバルバカン²¹²やフロリアンスカ門といった近辺の文化財と共に、いわば中世の建造物群を構成している点にあった。マテイコは請願書の中で、クラクフ美術学校の校舎を市庁舎の所有とする代わりに、聖霊病院を美術学校の校舎として使用させてほしいとも願っている²¹³。そして、もしこれが実現されれば、中世の面影を残す聖霊病院の最重要部分はそのままとし、その他の部分については当時の織物会館に負けないくらい、美しく堂々としたものにしようと考えていた。請願書ではこれに加え、聖霊広場は新劇場の設立場所として最適ではないという点も指摘した。周囲の道が狭いため、交通の便が悪いことなどをその理由として挙げている。ゴシュコフスキが直接クラクフ市長に提出したこの請願書は、市議会でも取り上げられた。

ゴシュコフスキの記録では、マテイコは翌 1888 年 7 月にも市議会に請願書を提出している²¹⁴。これ以後、聖霊病院についての記述が再び現れるのは 1892 年 5 月であり、この時にはすでに、クラクフ市が建物の取り壊しに入っていた。悲嘆に暮れるマテイコは、せめて聖霊教会内部の礼拝堂だけは守ろうと必死になった。聖霊広場の建物群全体の取り壊しを望む市議会議員 10 名程度を 1 人ずつ自宅に呼び出し、取り壊しの中止を切に訴えた。新劇場の設計者ヤン・ザヴィエイスキ²¹⁵も、幾度かマテイコと話し合いの場を持っている。しかし、議員らは全く聞く耳を持たず、マテイコの要求を頑として受け付けなかった。

クラクフ市副市長のフリードライン²¹⁶が礼拝堂の解体に即刻取り掛かるよう命じたのは、マテイコがクラクフ市に対し再度請願書を提出した矢先のことであった。自宅で議員らと話し合いを続けていたマテイコは、礼拝堂の状態を確認するため、彼らと共に聖霊広場に赴いた。議員らは、ここまで無惨な状態の礼拝堂は保護する価値もなく、間もなく自然に崩壊する危険性さえあると言い張った。礼拝堂の解体は夜中に断行されており、貴重な丸天井の中心部までもがあらかじめ壊されていたのである。マテイコとゴシュコフスキは、議員らの反対をよそに礼拝堂がある建物の内部に入ってみせ、体を張って安全性を主張した。一方、マテイコがクラクフ市に提出していた請願書²¹⁷は、市の対応がマテイコをいかに憤慨させ、失望させたのかを物語っている。マテイコはこの中で、10 年前に市から

²⁰⁹ Gorzkowski, s. 327.

²¹⁰ Gorzkowski, s. 444-445 参照。

²¹¹ Gorzkowski, s. 328 参照。

²¹² Barbakan: 1498 年頃に建築された。

²¹³ マテイコは以前から美術学校校舎の使い勝手の悪さを訴えていた。

²¹⁴ Gorzkowski, s. 356 参照。

²¹⁵ Jan Zawiejski (1854-1922) : 歴史主義を代表する建築家。ミュンヘン、ウィーン、ベルリン、イタリアで学び、1900 年から正式にクラクフ市の建築家となった。スウォヴァツキ記念劇場の建築を 1888 年から 1893 年にかけて行ったほか、「ヤスニ・ドム」Jasny Dom と称される自宅 (1909-1910 / クラクフのビスкупヤ通り 2 番地 ul. Biskupia 2) などを手掛けたことで知られる。

²¹⁶ Józef Friedlein (1831-1917) : Gorzkowski, s. 513 ではクラクフ市長とされている。

²¹⁷ Gorzkowski, s. 446 参照。

授与された「名誉市民」の賞状を返却すること、自分の作品を2度とクラクフに展示しないことを宣言した。

この頃、マテイコが発狂したという情報が国内外の新聞に掲載され、その真偽を尋ねる電報や手紙がゴシュコフスキに寄せられたという²¹⁸。ゴシュコフスキは、誰かがマテイコへの報復としてこのような虚偽の情報を流したのだと指摘しているが、いずれにしても、聖霊広場の建造物を巡るこの1件は、晩年の衰弱したマテイコにとって、大変悲痛な出来事となった。新劇場は翌1893年10月21日に完成し、そのおよそ10日後にマテイコは世を去っている²¹⁹。

²¹⁸ Gorzkowski, s. 447 参照。

²¹⁹ Jacek Purchla, „Kraków Matejki”, w: *Wokół Matejki. Materiały z konferencji „Matejko a malarstwo środkoeuropejskie”, zorganizowanej w stulecie śmierci artysty*, Międzynarodowe Centrum Kultury, Kraków 1994, s. 17. 及び Jacek Purchla, „Kraków i jego architektura na przełomie wieków”, w: *Sztuka około 1900 w Europie Środkowej*, Kraków 1997, s. 64. で著者は、クラクフの都市化が市立劇場の建設から本格化したと指摘し、マテイコの死と劇場の完成が同年であることに象徴的な意味を見出している。本章で扱ったマテイコの文化財保護・修復との関わりは、クラクフの都市化という、より大きな文脈の中で論じることが可能であると思われる。

結び

ヤン・マテイコという人物を紹介的に論ずるという本論文の目標は、どの程度達成され、どのような課題を残したであろうか。

第1章の目的は、マテイコの画家としての経歴と作品に関する基本的な情報をまとめることであった。確かに、この点に関する日本語による情報を少しは増やすことができたかもしれないが、この章に割いた時間が少なかったことや、筆者が美術史に精通していないことに起因する課題が残された。とりわけ、彼の作品については手薄になった。絵の内容や美術的観点からの評価について、せめて基本的な情報を提示することが、依然として必要とされている。

第2章から第4章では、マテイコが公的機関や皇帝と、どのような形で関わっていたのかを明らかにすることが目的であった。本論文で取り上げた事例からは、公的な場におけるマテイコの姿について、主に2つのことが見えてきたと思われる。

1つは、公的機関や皇帝によって、ポーランド社会やガリツィアを代表する偉大な人物として、いわば精神的指導者として扱われるマテイコの姿である。第2章で紹介した主な事例に関して言うと、クラクフ市は、プラハ美術アカデミーの学長職を固辞したマテイコのために祝宴を行い、「芸術領域における支配の印」としてマテイコに笏を贈呈し、マテイコの25年間の創作活動を称えて記念祭を行った。ガリツィア自治政府は、マテイコから《プロイセンの臣従》を寄贈された際に、マテイコ記念奨学金を設立し、また、マテイコの葬儀を荘厳に執り行った。公的機関がこれらの行事を行う時には、マテイコを称賛することで、愛国心を公的に表明するという意図があったのではないと思われる。ただし、その愛国心がポーランドとガリツィアのどちらに向けられたものなのか、といった点に関しては、筆者が当時の歴史や歴史学に精通していないため、曖昧な理解しかできなかった。

第3章におけるマテイコと皇帝との接触からも、皇帝からガリツィアの代表者として扱われるマテイコの姿が見えてきたように思われる。とりわけ、皇帝がマテイコの自宅に来訪したり、《プロイセンの臣従》と《ウィーンのソビエスキ》を観覧したりしたのは、マテイコがガリツィアにとって重要な人物であることを、念頭に置いていたからであろう。

公的な場におけるマテイコの姿には、以上の点の他に、もう1つ別の面が指摘できると思われる。それはマテイコの素顔とでもいえるものかもしれない。マテイコは公的機関と対立することがあった。第2章では、政界の懸念をよそに、《ソビエスキ》をローマ教皇に贈呈することを企画し、この絵を一般からの寄付金によって買い上げようとしていたクラクフの特別委員会は、計画の見直しを迫られた。スラヴ2使徒の記念祭にまつわる一件では、マテイコの企画が公的機関に聞き入れられなかった。第4章では、とりわけヴァヴェル大聖堂主祭壇や聖霊病院などの取り壊しに反対し、クラクフ市の公的機関と激しく対立した。これらの事例においては、公的機関と歩調を合わせていたのではなく、自分の思想や主張に基づいて行動していたマテイコの等身大の姿が浮き彫りになっている。マテイコが具体的にどのような思想を持っていたのかを検討することは、今後の大きな課題として残されているだろう。そのためには、彼が自分の歴史観を表明する手段であった、彼の

絵画作品の内容を研究することが必要となるはずである。

本論文は、画家としてのマテイコの姿に加え、同時代の公的な場における彼の姿を追うことで、マテイコの人物像をより立体的な形で紹介しようと試みた。しかし実際には、全体像の輪郭の一部を描くにとどまったと思われる。このことは、本論文で詳しく扱うことができなかった問題を、各所で指摘しなければならなかったことが証明している。また、筆者が指摘することすらできなかった課題も多くあるだろう。マテイコという人物の全体像を描く作業が、非常に大掛かりな仕事であるということが、本論文で露呈した。同時にこれは、マテイコが広範な領域に影響を及ぼしていること、そして、様々な角度からマテイコを考えることが可能だということを意味している。

参考図版

A ヤン・マテイコ



(Henryk Marek Słoczyński, *Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2000, s. 177.)

B 主要作品

B-1 《スカルガの説教》 *Kazanie Skargi* (1864) 224x397



両手を挙げている白髪の人物がスカルガ（右）。大きな白襟のついた黒い服を着て、椅子に座っているのがズィグムント3世（前列左から2番目）。

B-2 《レイタン——ポーランドの没落》 *Rejtan – Upadek Polski* (1866) 282x487



床に倒れ込んでいるのがレイタン（右下）。赤い服を着て扉を指差しているのがポニンスキ（中央右寄り）。

B-3 《ルブリン合同》 *Unia lubelska* (1869) 298x512



十字架を掲げているのがズィグムント・アウグスト（中央）。彼の隣では大きな聖書が開かれ、ルブリン合同の宣誓が行われている。

B-4 《プスコフのバトーリ》 *Batory pod Pskowem* (1872) 322x545



黄金のマントを付けて堂々と腰掛けているのがバトーリ（左）。中央に立つ黒ずくめの人物は教皇庁からの使者。画面右側にはモスクワ大公国勢が描かれている。

B-5 《グルンヴァルトの合戦》 *Bitwa pod Grunwaldem* (1878) 423x987



赤い服を着て両手を挙げているのがヴィトルト（ヴィタウタス）（中央）。白いマントをたなびかせ、今にも槍で突かれようとしているのがフォン・ユンギンゲン（左寄り）。ヴワディスワフ・ヤギェウォは画面右上に小さく描かれている。

B-6 《プロイセンの臣従》 *Hold pruski* (1882) 388x785



黄金の服を着て王冠をかぶり、白地に黒鷲が描かれた旗を差し出しているのがズィグムント1世（右寄り）。その真正面に跪いて聖書に手を置いている人物がアルブレヒト。

B-7 《ウィーンのソビエスキ》 *Sobieski pod Wiedniem* (1883) 458x894



馬に乗り、手紙を差し出しているのがソビエスキ（中央）。

B-8 《ラツワヴィツェのコシチュシュコ》 *Kościuszko pod Racławicami* (1888) 465x897



馬に乗り、右手に帽子を持っているのがコシチュシュコ（左寄り）。十字架のついた赤い旗の下で、右手を大砲に置き、左手に大鎌を持ってコシチュシュコを見つめているのがグウォヴァツキ（右寄り）。

C 1878年にクラクフ市よりマテイコに贈呈された笏（右）



左にあるのは、1880年にフランス政府からマテイコに贈られたセーヴル焼きの壺。

(Waldemar Okoń, *Jan Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2001, s. 47.)

D 《コンスタンティンとメトディウス》 *Cyryl i Metody* (1885) 145x95 ?



E マテイコの葬儀——フロリアンスカ通りを通る葬列



(Waldemar Okoń, *Jan Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2001, s. 78.)

F 《1515 年ヤギェウォ家の 2 人の王と皇帝マクシミリアンのウィーン会議》*Zjazd królów Jagiellonów z cesarzem Maksymilianem pod Wiedniem w roku 1515* (1879)
60.5x94



赤い服を着て、白馬に乗っているのがズィグムント 1 世（中央）。その手前の黒っぽい服を着た人物がルドヴィク。彼らの後ろ（画面左）には、白いドレスを着ているアンナ、駕籠の中から顔を出して従者と話をしているヴワディスワフ・ヤギェロンチクがいる。絵の右側には、赤い天蓋の下で両手を広げているマクシミリアン 1 世と、丈の長いドレスをきたマリアがおり、マリアの奥にいるのがフェルディナンドであるという。

G 《フランツ・ヨーゼフによるマテイコのアトリエ来訪》（ユリウシュ・コサック画）
Juliusz Kossak, Wizyta Franciszka Józefa w pracowni Matejki



左から：マテイコ、ガリツィア総督ポトツキ、皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世、マテイコの妻テオドラ、テオドラの左手：クラクフ市長ズィブリキェヴィチ、テオドラの後ろ：総督府代表バデーニ、バデーニの後ろ左から：マテイコの秘書ゴシュコフスキ、マテイコの長男タデウシュ、次女ベアタ、長女ヘレナ、皇帝の従者 2 人、次男イエジー。

(Henryk Marek Słoczyński, *Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2000, s. 148.)

H 聖マリア教会用の天使

(左) 《ゴシックの花模様と天使》 *Anioł na gotyckim kwiatonie* (1889) 225x203

(右) 《チターを弾く天使》 *Anioł grający na cytrze* (1890) 128.5x117



I 聖霊教会 kościół św. Ducha



(Waldemar Okoń, *Jan Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2001, s. 68.)

* 出典を記さなかった図版は、以下のサイトよりコピーした。

<http://www.pinakoteka.zascianek.pl/>

<http://sztuka.zaprasza.net/>

<http://artyzm.com/lista.htm>

<http://webart.omikron.com.pl/>

引用原文の抜粋

本論文で翻訳・引用したポーランド語の原文を 5 点紹介する（一部は抜粋）。出典はいずれも Marian Gorzkowski, *Jan Matejko – Epoka od r. 1861 do końca życia artysty z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu*, Oprac. Kazimierz Nowacki, Ignacy Trybowski, „UNIVERSITAS”, Kraków 1993. である。

◇クラクフ美術学校始業式での学長マテイコの演説（抜粋）

Należąc do kraju, który od lat tylu w wyjątkowym zawsze jest położeniu, pamiętajmy, panowie, że mamy właściwie dwie ojczyzny, s z t u k ę i k r a j ! S z t u k a odosobniona od ojczyzny i kraju jest również posłannictwem, ale grobowce tylu starodawnych bohaterów naszych, całe swe życie walczących za ojczyznę, patrzyłyby na nas z wyrzutem i taką dzisiejszą sztukę z ujemnej tylko ceniliby strony! S z t u k a jest obecnie dla nas pewnego rodzaju o r ę ż e m w r ę k u ; oddzielać s z t u k ę o d m i ł o ś c i o j c z y z n y n i e w o l n o ! kto tak nie czyni, ten tylko może połowicznie służy krajowi, bo sztuka nie tylko jest służbą dla kraju, ale jest obowiązkiem, ofiarą, w ostatnich zwłaszcza czasach. Już ksiądz Marek, przyjmując od Beniowskiego przysięgę wielkiego znaczenia, wypowiedział zdanie: „całego się powinno oddać na służbę ojczyzny, bo inaczej Pan Bóg nie wysłucha modlitwy..., a jako dąb tylko będzie gałęziami szumiał!” [...]

(Gorzkowski, s. 237./1882 年/本論文 16 頁)

◇プラハ美術アカデミー学長職を固辞する旨を記したマテイコの手紙（抜粋）

[...]

Z waszej jednomysłności a gorącego wystąpienia widzę, jak gorączkowo radzi byście mieć mnie pomiędzy sobą, i przekonywa mnie to o bezwarunkowym przychyleniu się Waszym do wszelkich żądań, jakie prawdopodobnie postawić bym musiał. Wiem, że wyjście z rodzinnego kraju mego hojnie wynagrodzić byście się starali, a stałoby się ono podwaliną, a może i zapewnieniem przyszłości mojej i dzieci moich, niczym jak dotąd nie zagwarantowanej w ojczyźnie. Wiem nadto, że pojawienie się moje pomiędzy wami zespoliłoby poniekąd rozprężone siły słowiańskie na polu sztuki. Wiem nareszcie, jak nieobcą dla was osobista moja pochyłość ku czeskiemu narodowi, tłumacząca się nawet jednością tętna krwi wspólnej, jakiej w sobie zapierać lub nie czuć nie mogę. Ta wspólność krwi właśnie, nie żadne inne względy materialne, wyglądające na pokusę, stać by się mogła pobudką najniebezpieczniejszą do wyrzeczenia się własnej a prawej ziemi rodzinnej z chwilą opuszczenia tejże,

zapowiadającego w następstwach ekspatriowanie całej rodziny mojej.

Przyjaźń dla Czech mieć mogę tak, jak ją mam dziś serdeczną, ale ziemi mojej Polsce miłość ma należeć; od tej więc wybór bezwzględny zależy. W bezwzględności takiej jest może odrobina tej fatalności historycznej, dzieląca interesy wspólne dwóch najbliższych sobie narodów na rozłam nigdy nie skojarzonej jedności, a może trochę zaściankowości, którą zwykliśmy grzeszyć Polacy. Nie przeczę, nie dowodzi to zmysłu politycznego, ale za to znakiem nieograniczonego przywiązania do własnej, choć mizernej strzechy, przenoszącego tę ponad wszelkie dostatki, nawet tak zbliżone i pokrewne jak wasze.

[---]

(Gorzkowski, s. 65./1873 年/本論文 28-29 頁)

◇マテイコに笏を贈呈する旨を記したクラクフ市議会の決議書

Zważywszy, że współobywatel nasz Jan Matejko w dziedzinie sztuki malarskiej wzniósł się do wyżyn przedtem w narodzie polskim niedoścignionych i swymi dziełami wobec areopagu świata cywilizowanego zajaśniał jako mistrz w ogólnej pracy ludzkości na polu sztuki; zważywszy także, że sławą niespożytą dla siebie zdobytą przysporzył chwały i sławy narodowi naszemu i złożył niezatarte dowody jego życia i żywotności; zważywszy dalej, że jako artysta, mistrz narodowy, w nieśmiertelnych swych dziełach, jak *Piotr Skarga*, *Unia lubelska*, *Stefan Batory*, *Bitwa pod Grunwaldem*, przyodziewając w ciało karty dziejów polskich wskrzesił postacie naszych bohaterów, odtworzył ich wiekopomne czyny, a tak nam i obcym okazał na nowo obrazy świetnej i drogiej przeszłości narodu z tą siłą geniuszu, jaki mu przyznała Europa; zważywszy nareszcie, że mąż ten należący do całego narodu ma prawo do wdzięczności całej Polski, przede wszystkim wszakże tego grodu, w którym urodził się, wychował i któremu pomnikowymi pracami swymi, wpośród nas wykonanymi, do świetnej jego historii nową pełną blasku kartę dołączył; zważywszy te wszystkie zasługi Jana Matejki wobec sztuki narodu polskiego, dziejów polskich i wobec miasta naszego, rada miasta Krakowa uchwaliła: Janowi Matejce, obywatelowi miasta Krakowa, ofiarowane być ma berło jako symbol jego panowania w dziedzinie sztuki.

(Gorzkowski, s. 121./1878 年/本論文 31 頁)

◇クラクフ市から笏を贈呈された際にマテイコが行った演説

W faktach dokonywanych czytamy przedwiekowe kreślenia myśli Bożej, palcem Jego zapisanej w księdze przeznaczeń, które dziwnie się w tradycję narodu wplatają! Niegdyś królowie, wolnymi głosy przodków naszych obierani, w murach tego grodu przyjmowali znamiona władzy swej z koroną – berło! toteż jakby wdzięcznością ku

miastu stołecznemu wiedzeni, dzieląc się niby władzą swą królewską, dostojnemu urzędnikowi tegoż miasta nadali prawo używania berła. Królowie nasi wznosząc w mieście tym instytucję, której udział władzy intelektualnie w narodzie uznawali, ozdobili ją niepróżną odznaką królewskiej godności, kładąc berła w tarczy Akademii Krakowskiej. Dziś *interregnum*! Dlatego to wy, reprezentanci miasta i narodu w bezkrólewiu obecnym, jakby na elekcji ozdabiacie swego – jak go nazywacie – mistrza godłem królewskości, berłem tradycyjnym, bo na nim w napisach żłobione smutne i świetne dzieje ojczyzny!

Jeżeli mamy wierzyć przeczuciom poetów, to chwila ta przypominać musi wizje dziejowe naszego Juliusza, swego króla-ducha bodaj czy naród mój nie uznaje dziś w sztuce polskiej! Wręceniem berła pozwalacie mu przeczuwać rychłą dziejową przemianę – odrodzenie! widzę je w oddali! z powitaniem więc wrywa mi się mimowolnie uprawnione waszym udostojnieniem na podobieństwo ryku spiżowej piersi Zyguntowskiego dzwonu, krzyk serdeczny: «Niech żyje!»

(Gorzowski, s. 122-123./1878 年/本論文 32-33 頁)

◇マテイコが《プロイセンの臣従》をガリツィアに寄贈したことを受け、ガリツィア政庁がガリツィア国会に対して発した文書（抜粋）

Wspaniały dar ofiarowany narodowi przez mistrza Jana Matejkę wywołał już w Wysokiej reprezentacji kraju doraźny i jednomyślny objaw uczuć wdzięczności i uwielbienia dla wielkodusznego dawcy; manifestacja ta znalazła żywy i serdeczny odgłos na całej przestrzeni kraju, a nawet daleko poza jego granicami! Kraj i naród cały umieją ocenić wielkość ofiary i szlachetność pobudek, jakie nieśmiertelnego twórcę *Hołdu pruskiego* skłoniły do tego aktu zdumiewającej zaiste hojności i abnegacji! Kraj i naród zapiszą Jana Matejkę w poczet swoich zasłużonych obywateli, jako go już umieściły w rzędzie największych swoich artystów i z dumą wskazywać będą po wieczne czasy na ów *Hołd pruski*, nie tylko jako na arcydzieło sztuki polskiej, lecz także jako na dowód wymowy polskiej cnoty obywatelskiej! Ale kraj przyjmując taki dar od mistrza przyjął też na siebie obowiązek odwzajemnienia się! Wielki artysta, który z miłości dla kraju składa mu w ofierze najlepsze ze swych arcydzieł, daje krajowi przykład ofiarności, który bez następstw pozostać nie może i nie powinien!

[...]

(Gorzowski, s. 231./1882 年/本論文 35 頁)

参考文献一覽

1. *Architektura*, tł. z angielskiego Barbara Gadomska, Arkady, Warszawa 1994.
2. *Atlas historyczny Polski*, Polskie Przedsiębiorstwo Wydawnictw Kartograficznych im. Eugeniusza Romera, S.A., wyd. XIV, Warszawa-Wrocław 1998.
3. BLAK Halina, MAŁKIEWICZ Barbara, WOJTAŁOWA Elżbieta, *Malarstwo polskie XIX wieku*, Muzeum Narodowe w Krakowie, Kraków 2001.
4. BOGUCKI Janusz, *Matejko*, Państwowe Wydawnictwo „Wiedza Powszechna”, Warszawa 1956.
5. CHWALBA Andrzej *Historia Polski 1795-1918*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 2001.
6. DOBROWOLSKI Tadeusz, *Nowoczesne malarstwo polskie 1764-1939. T. II*, Zakład Narodowy im. Ossolińskich Wydawnictwo, Wrocław-Kraków 1960.
7. FRAZ Zbigniew, *Galicja*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2003.
8. GORZKOWSKI Marian, *Jan Matejko, Epoka lat jego najmłodszych, wyjątki z dziennika prowadzonego w ciągu lat 17 przez Mariana Gorzkowskiego*, Kraków 1895.
9. GORZKOWSKI Marian, *Jan Matejko – Epoka od r. 1861 do końca życia artysty z dziennika prowadzonego w ciągu lat siedemnastu*, Oprac. NOWACKI Kazimierz, TRYBOWSKI Ignacy, „UNIVERSITAS”, Kraków 1993.
10. *Jan Matejko. Materiały z sesji naukowej poświęconej twórczości artysty 23-27 XI 1953*, Arkady, Warszawa 1957.
11. *Jan Matejko. Wypisy biograficzne.*, Oprac. GINTEL Jan, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955.
12. *Juliusz Słowacki, Dzieła wybrane, Tom 2, Poematy*, Oprac. KRZYŻANOWSKI Julian, Zakład Narodowy imienia Ossolińskich Wydawnictwo, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk 1979.
13. KNAFLEWSKA Joanna, *Ilustrowane dzieje literatury polskiej*, Wydawnictwo Podsiadlik-Raniowski i Spółka, Poznań 1997.
14. KRAWCZYK Jarosław, *Matejko i historia*, Instytut Sztuki Polskiej Akademii Nauk, Warszawa 1990.
15. KRAWCZYK Jarosław, *Jan Matejko. Mistrz Legendy św. Stanisława*, Fundacja Res Publica im. H. Krzeczковского, Warszawa 1998.
16. LEWICKA-MORAWSKA Anna, MACHOWSKI Marek, RUDZKA Maria Anna, *Słownik Malarzy Polskich. Od średniowiecza do modernizmu. Tom 1*, Arkady, Warszawa 1998.
17. MARTKIEWICZ Mariusz, *Historia Polski 1492-1795*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 2004.

18. *Matejko. Obrazy olejne. Katalog*, redakcja i wstęp SROCZYŃSKIEJ Krystyny, Arkady, Warszawa 1993.
19. MICKE-BRONIAREK Ewa, *Matejce w hołdzie... W stulecie śmierci artysty. Katalog wystawy*, Muzeum Narodowe w Warszawie, Warszawa 1993.
20. OKOŃ Waldemar, *Jan Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2001.
21. *Poczet królów i książąt polskich Jana Matejki*, wstęp BANASZKIEWICZA Jacka, Świat Książki, Warszawa 2003.
22. *Polski słownik biograficzny*, Nakładem Polskiej Akademii Umiejętności, Skład Główny w Księgarniach Gebethnera i Wolffa, Kraków 1935-.
23. PRZEMECKA-ZIELIŃSKA Maria, *Krakowskim szlakiem Jana Matejki*, Wydawnictwo Pijarów, Kraków 2003.
24. *Przewodniki Wiedzy i Życia – Polska*, pod redakcją CZERNIEWICZ-UMER Teresy i OMILANOWSKIEJ Małgorzaty, Wiedza i Życie, Warszawa 2001.
25. PURCHLA Jacek, „Kraków Matejki”, w: *Wokół Matejki. Materiały z konferencji „Matejko a malarstwo środkoeuropejskie”, zorganizowanej w stulecie śmierci artysty*, Międzynarodowe Centrum Kultury, Kraków 1994.
26. PURCHLA Jacek, „Kraków i jego architektura na przełomie wieków”, w: *Sztuka około 1900 w Europie Środkowej*, Kraków 1997.
27. RÓŻEK Michał, *Kraków*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2004.
28. SERAFIŃSKA Stanisława, *Jan Matejko, Wspomnienia Rodzinne*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1955.
29. SŁOCZYŃSKI Henryk Marek, *Matejko*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 2000.
30. SŁOCZYŃSKI Henryk Marek, „Racławice i cud odzyskania niepodległości, Historiozoficzne przesłanie Jana Matejki”, w: *Powstanie Kościuszkowskie i jego Naczelnik, Historia i tradycja, Materiały Konferencji Naukowej Kraków-Wrocław, 28-30 marca 1994 r.*, pod red. Teresy Kulak i Mirosława Franćicia, Oficyna Cracovia, Kraków 1996.
31. *Słownik Artystów Polskich i Obcych w Polsce Działających (Zmarłych przed 1966 r.) Malarze, Rzeźbiarze, Graficy, t. V*, Wydawnictwo Krag, Warszawa 1998.
32. STARZYŃSKI Juliusz, *Jan Matejko*, Arkady, Warszawa 1973.
33. SZYPOWSKA Maria, *Jan Matejko wszystkim znany*, Ludowa Spółdzielnia Wydawnicza, Warszawa 1985.
34. Wyka Kazimierz, *Matejko i Słowacki*, „Czytelnik” Spółdzielnia Wydawnicza, Warszawa 1953.
35. ZGÓRNIAK Marek, *Matejko w Paryżu. Opinie krytyków francuskich z lat 1865-1870*, Instytut Historii Sztuki UJ, Kraków 1998.
36. *Złota encyklopedia PWN* (DVD), Warszawa 2002.
37. 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』 山川出版社、1998年。
38. 伊東孝之他監修 『新訂増補 東欧を知る事典』 平凡社、2001年。

39. 馬杉宗夫 『大聖堂のコスモロジー——中世の聖なる空間を読む』 講談社現代新書、1992 年。
40. 大津留厚 『世界史リブレット 30 ハプスブルク帝国』 山川出版社、1996 年。
41. 学校法人上智学院 『新カトリック大事典』、研究社、1996 年。
42. 加藤雅彦 『図説 ハプスブルク帝国』 河出書房新社、1995 年。
43. ステファン・キエニエーヴィチ編 『ポーランド史』 加藤一夫・水島隆生訳、恒文社、1986 年。
44. 佐藤達生・木俣元一 『図説大聖堂物語——ゴシックの建築と美術』 河出書房新社、2000 年。
45. 白木太一 『近世ポーランド「共和国」の再建——四年議会と五月三日憲法への道』 彩流社、2005 年。
46. 『新詳世界史図説』 浜島書店、1993 年（1998 年印刷）。
47. 『世界大百科事典（新版）』 平凡社、1964-1968 年。
48. 『世界美術大事典』 小学館、1988-1990 年。
49. 『世界美術大全集 西洋編 第 21 巻 レアリスム』 馬淵明子編集、小学館、1993 年。
50. 関口時正 「世紀末のワルシャワとクラクフそして浮世絵」 『ポロニカ 創刊号』 ポロニカ編集室編、恒文社、1990 年。
51. 関口時正 「＜中欧都市漫歩①＞クラクフ——一月の都あるいはネクロポリア」 『ぶっくれっと』 9 月号、三省堂、1990 年。
52. 関口時正 「世紀末ポーランドで日本美術を見る困難について」 『比較文学研究 61』 東大比較文学會、1993 年。
53. 関口時正 「ポーランド語文学を語り続ける＜民族＞」 『岩波講座「文学」第 13 巻 ネイションを超えて』 岩波書店、2003 年。
54. 高階秀爾 『近代絵画史（上）』 中公新書、1975 年（1994 年第 30 版）。
55. 高階秀爾 『近代絵画史（下）』 中公新書、1975 年（1995 年第 30 版）。
56. 高階秀爾監修 『増補新装［カラー版］西洋美術史』 美術出版社、2002 年。
57. 「地球の歩き方」編集室 『地球の歩き方 65 チェコ／ポーランド／スロヴァキア 2001～2002 年版』 ダイヤモンド社、2001 年。
58. 蜂谷有紀 「ポーランド『四年国会』期の男性民族服——衣服とイデオロギー——」 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文、2002 年度。
59. 平子歩美 「ポスターにおける《ポーランド派》」 東京外国語大学外国語学部卒業論文、2002 年度。
60. スティーブン・ベラー 『フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国』 坂井榮八郎監訳、川瀬美保訳、刀水書房、2001 年。
61. 南塚信吾編 『ドナウ・ヨーロッパ史』 山川出版社、1999 年。
62. 渡辺克義編著 『ポーランドを知るための 60 章』 明石書店、2001 年。

Streszczenie

Jan Matejko w życiu publicznym w Galicji

Miho OGAWA

Niniejsza praca traktuje o życiu Jana Matejki (1838-1893). Nie jest ona jednak biografią w powszechnym tego słowa znaczeniu. Szczególną uwagę zwrócono bowiem na wydarzenia ukazujące jego wyjątkową rolę, jaką odgrywał on w życiu publicznym w Galicji. Do tych wydarzeń należą: uroczystości oraz demonstracje zorganizowane przez instytucje publiczne w Krakowie lub Galicji albo przez samego Matejkę; zakup jego obrazów przez cesarza Austro-Węgier Franciszka Józefa I oraz oficjalna wizyta cesarza w domu artysty; prace konserwatorskie na rzecz zabytków w Krakowie oraz starania artysty o ich ochronę przed rozbiórką.

Wiele z powyższych wydarzeń ujawnia wizerunek Matejki traktowanego przez instytucje publiczne i cesarza jako duchowego przywódcę Polaków oraz przedstawiciela Galicji. Dowodzą tego m. in. następujące wydarzenia:

- W roku 1867 cesarz austriacki zakupił za dużą sumę pieniędzy *Rejtana*, nagrodzonego złotym medalem I klasy na Wystawie Powszechnej w Paryżu.
- W roku 1873 miasto Kraków urządziło uroczysty obiad na cześć artysty, który odrzucił propozycję objęcia stanowiska dyrektora Akademii Sztuk Pięknych w Pradze.
- 29 X 1878 roku w Krakowie odbyła się okazała uroczystość ku czci Matejki, któremu prezydent miasta wręczył „berło jako symbol jego panowania w dziedzinie sztuki”.
- 2 IX 1880 cesarz Franciszek Józef I złożył wizytę w domu Matejki w trakcie podróży po Galicji.
- W roku 1882 na posiedzeniu Sejmu Krajowego we Lwowie Matejko ofiarował obraz *Hołd pruski* narodowi. W podziękę za dar artysty Wydział Krajowy funduje stypendium imienia Matejki, a rada miejska Krakowa nadała mu honorowe obywatelstwo i uchwaliła, aby plac koło gmachu Szkoły Sztuk Pięknych (obecnie ASP) został nazwany jego imieniem. Cesarz wkrótce obejrzał *Hołd pruski* wystawiony w Wiedniu i wyraził przychylną ocenę.
- We wrześniu 1883 roku w Krakowie miał miejsce uroczysty jubileusz 25-lecia pracy Matejki wraz z wystawą prac artysty na zamku królewskim na Wawelu. Prawie w tym samym czasie cesarz obejrzał *Sobieskiego pod Wiedniem* wystawionego w Wiedniu z okazji dwustulecia odsieczy Wiednia.
- 7 XI 1893 roku władze galicyjskie zorganizowały okazały i uroczysty pogrzeb Matejki, na którym obecni byli dostojnicy świeccy, duchowni oraz przedstawiciele środowisk

artystycznych.

Niektóre wydarzenia przedstawione w niniejszej pracy odsłaniają jednak inne oblicze Jana Matejki.

Był on świadomy swego czeskiego pochodzenia (ojciec artysty był Czechem), co było przyczyną jego „całomiesięcznej walki wewnętrznej” po otrzymaniu propozycji objęcia stanowiska dyrektora Akademii Sztuk Pięknych w Pradze.

Artysta nie zawsze postępował tak, jak spodziewały się społeczeństwo i władze krakowskie lub galicyjskie. Nie był on bowiem politykiem i kierował się swoją „historiozofią”. Stąd też niektóre organizowane przez niego demonstracje spotkały się ze sprzeciwem współczesnych mu ludzi, m.in. polityków. Chociaż w grudniu 1883 roku udało mu się w końcu ofiarować papieżowi Leonowi XIII obraz *Sobieski pod Wiedniem*, to w roku 1885 nie powiódł się jego zamiar uroczystego ofiarowania obrazu kościołowi w Welehradzie z okazji obchodów tysiąclecia działalności świętych Cyryla i Metodego.

Matejko, będąc miłośnikiem zabytków Krakowa i znając ich wartości jako pamiątek narodowych, chciał koniecznie brać udział w ich restaurowaniu, a często ostro występował przeciw ich zniszczeniu dokonywanemu przez władze Krakowa. W roku 1889-1891 artysta odgrywał ważną rolę w restaurowaniu polichromii kościoła NMP w Krakowie. Uratował główny ołtarz w Katedrze na Wawelu, od roku 1878 stanowczo protestując przeciw jego zburzeniu planowanemu przez kapitułę i władze miejskie. W roku 1887 ogarnęło go rozgoryczenie, kiedy władze miejskie zniszczyły szpital św. Ducha (gotycki budynek z XIV wieku, który stał koło dzisiejszego Teatru im. Słowackiego) mimo jego protestu.

Niniejsza praca w zwięzły sposób przedstawia także życiorys Matejki i podaje podstawowe informacje o jego twórczości.

. . .

Jestem niezmiernie wdzięczna wszystkim, którzy pomagali mi w napisaniu pierwszej w Japonii pracy poświęconej osobie Jana Matejki. Wyrażam specjalne podziękowanie prof. Tokimasa Sekiguchi, dr. Henrykowi Dudzie i tym, z których pomocy korzystałam w Krakowie – dr. Januszowi Pezdzie, pani Beacie Romanowicz i pracownikom Domu Jana Matejki z panią Małgorzatą Buyko na czele. Najserdeczniejszą wdzięczność wyrażam pp. Chmurom i pp. Bielczykom. Serdecznie dziękuję za podarowanie książki pp. Althamerom. Niniejszą pracę poświęcam pamięci babci Karolinie.

あとがき

卒業論文でマテイコを扱うことに決めたのは、大学 3 年生になった時であり、これは決して早いとはいえない。私は以前より、18 世紀後半に国が分割されるという歴史を持つポーランドには、どのような形の愛国主義が存在してきたのだろうかという点に関心があった。しかし、この問題に対してどのような角度から取り組めばよいのか、自分に合った方法がなかなか見えてこなかった。マテイコという人物に行き当たることができたのは、指導教官である関口時正先生からご教示を頂いたからであった。私は大学に入るまで、絵を描く趣味があった。そこで、19 世紀に歴史画を描いた画家マテイコについて研究することを薦めて頂いたのである。だが振り返ってみると、私はこれ以前からマテイコに興味があったのかもしれない。大学に入学して間もない頃、地域基礎の授業で見たマテイコの《ポロニア》は印象的であったし、大学 2 年生を迎える春休みに、2002 年の初頭から横浜美術館で開催されていたチャルトリスキ・コレクション展に足を運んだ折には、実際にこの絵を見て感銘を受けた覚えがある。

大学 3 年生の後半から約 1 年間、マテイコゆかりの地であるクラクフに留学した。どうか資料集めを行うことはできたが、研究はあまり進めることができなかった。本格的にマテイコに関する文献を読み始めたのは、留学後のことである。当初はマテイコの伝記を書く予定であったが、扱う範囲が広くなりすぎるため、テーマを絞ることにした。最終的に、公的な場におけるマテイコの姿を中心に検討し、マテイコを取り巻いていた当時のクラクフを垣間見ることにもなった。知らず知らずのうちに、留学したクラクフという都市への関心から、今回のテーマを選択したのかもしれないと思う時がある。

卒業論文を執筆している間、自分の力量不足が原因で、さまざまな困難にぶつかった。特に私には、当時の公的な文書やマテイコの演説を翻訳できるほど、この時代についての知識があるわけではなく、日本語の能力自体も不足している。また、本論文で浮き彫りになったマテイコの姿を、どのように理解すればよいのか、未だに判然としない。これは、私に歴史や文化に関する見識が足りないからであろう。一方で、マテイコという 1 人の人物を通して、多くのことが見えてきた。以前から関心があった愛国主義の形について、その一端が生々しく浮かび上がってくるのを感じた。また、特にガリツィアの自治や、それを可能にしたフランツ・ヨーゼフ 1 世という皇帝の存在についても、思い掛けず知ることになった。

最後に、この論文の執筆にあたってお世話になった方々に対し、深い感謝の意を表したい。とりわけ、多岐にわたってご指導を賜った関口時正先生には篤く感謝申し上げたい。知識・能力に欠ける私が、馴染みの薄い 19 世紀という時代を背景にしたテーマに取り組むことができたのは、先生のご指導があったからである。また、ヘンリク・ドゥーダ先生や、クラクフでお世話になった方々、何らかの機会にこの論文の草稿を読んだり研究の発表を聞いたりして頂いた方々や家族にも、心より感謝申し上げたい。

2006 年 1 月 小川美穂